

平成 23 年度 学位論文

食に関する指導への養護教諭の関わり

弘前大学大学院教育学研究科
養護教育専攻 養護教育専修

10GP303 横濱 克子

目 次

序章 はじめに

第1節	児童生徒の食生活を取り巻く状況	1
第2節	「食育」と「食に関する指導」の定義	1
第3節	食に関する指導の要請	2
第4節	食育をめぐる動き	2
第5節	青森県における食育	3

第1章 食に関する指導の課題と本研究の目的

第1節	食に関する指導の5つの課題	4
第2節	研究の目的	12

第2章 本研究の方法

第1節	研究の方法	13
第2節	調査方法	13

第3章 結果

第1節	養護教諭	15
	1 回答者の属性	
	2 回答者の現任校の給食の状況	
	3 回答者の現任校における食に関する指導の状況	
	4 食に関する指導への意識について	
	5 養護教諭と栄養教諭、学校栄養職員との連携について	
第2節	栄養教諭	32
	1 回答者の属性	
	2 給食の状況	
	3 回答者の所属校・受配校における食に関する指導の状況	
	4 食に関する指導への意識について	
	5 養護教諭と栄養教諭、学校栄養職員との連携について	
第3節	検定結果	45

第4章 考察

1	食に関する指導の実態	
2	養護教諭の食に関する指導への関わり	
3	栄養教諭との連携のありかた	

終章 まとめ

謝辞

文献

資料

序章 はじめに

第1節 児童生徒の食生活を取り巻く状況

近年、食生活を取り巻く社会環境の変化に伴い、子どもに食生活の乱れ、健康に関して様々な問題が指摘されている。

児童生徒の食生活を取り巻く状況としては、以下のことがあげられている。¹⁾

①朝食欠食の状況

平成12年度及び平成17年度の調査を比較すると改善傾向にはあるが、食べないことがある児童生徒の状況を改善する必要がある。また、食事内容の偏りや摂取量の不足などの新たな課題も指摘されている。

②肥満傾向の状況

平成18年度の調査では、小学校5年生以上のすべての学年で10%を超えていたが、平成20年度の調査では10%に満たない学年が出てきている。

③痩身傾向の状況

小学校5年生から2%を超え、中学校1年生で最も高くなっている。平成20年度の調査では、小学校6年生の出現率は2.7%となっている。

④食習慣と学力、体力等との関係

毎日朝食を食べる子どもの方が、学力調査の平均正答率が高い傾向があることが、調査した小学校6年生と中学校3年生のすべての教科において明らかになった。また、毎日朝食を食べる子どもの方が、体力合計点が高い傾向にある。

この他に、孤食、外食や調理済み食品の利用の増大、体力の低下傾向なども取り上げられている。

このような様々な問題に対応するために、「食育基本法」（平成17年7月）が制定され、学校においても食育に取り組むこととなった。

第2節 「食育」と「食に関する指導」の定義

1) 「食育」とは

食育基本法は、「国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむ」（食育基本法第1条）ことを目的としている。

その前文では、食育を、「生きる上での基本であって、知育、徳育および体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる」²⁾と規定している。

「食育」ということばは現在では一般化され、広く認識されるようになった。そして、学校のみならず様々な団体で「食育」が意識され、行われて当たり前のようになってきて

いるように感じる。食育という考え方は明治時代に既に存在していた。(注 1)

2) 「食に関する指導」とは

平成 20 年 3 月改訂の学習指導要領総則には、「食育」と示されているが、総則以外では「食に関する指導」と統一されて使われている。学習指導要領総則 3 に示されているように、体育科の時間はもとより、家庭科、特別活動など学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとされている。そこで、本研究においても、学校で行われる指導を「食に関する指導」とする。

第 3 節 食に関する指導の要請

食習慣は、子どもの頃の習慣が成長後の食生活に与える影響が大きく、大人になって改めることは困難を伴うものであることから、子どもが将来にわたって健康に生活していくことができるようにするためには、子どもに対する食に関する指導を充実し、食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けさせることが重要な課題とされている。この対応として、学校では食に関する指導の計画を作成し、学校の実態に応じた指導を行うことが求められている。

前述の、児童生徒の食生活を取り巻く状況において、これまでの取組により、朝食欠食のように改善傾向がみられるものがあるものの、幾つかの状況に関しては、引き続き改善に向けた取組が必要である³⁾。この状況を含めた、様々な「食をめぐる状況に対応し、その解決を目指した取組が食育である。」⁴⁾と食育推進基本計画では述べている。

第 4 節 食育及び食に関する指導をめぐる動き

以下、食育及び食に関する指導の概要を年表に示した（詳細は資料(1)を参照）。

平成 9 年	・保健体育審議会「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興の在り方について」を答申 ⁵⁾ 。
平成 12 年	・「栄養教諭制度」の検討が始まる。
平成 14 年	・「食生活指針」を厚生省、農林水産省、文部省の 3 省合同で推進することが閣議決定される。
平成 16 年	・3 省連携による食育推進連絡会議設置。
	・「楽しく食べる子どもに一食からはじまる健やかガイド」 ⁶⁾ の作成。
	・「食を通じた子どもの健全育成（—いわゆる「食育」の視点から—）のあり方検討会」 ⁷⁾ 開催。
平成 17 年	・「栄養教諭」を食に関する専門性と教育に関する資質を併せもつと提言 ⁸⁾ 。
	・栄養教諭制度施行（4 月 1 日）。
	・「食育基本法」施行（7 月 15 日） ⁹⁾¹⁰⁾ 。

平成 18 年	・「食育推進基本計画」策定（3 月 31 日） ¹¹⁾¹²⁾ 。
平成 19 年	・文部科学省「食に関する指導の手引き」発行（3 月） ¹³⁾ 。
平成 20 年	・中央教育審議会答申（1 月） ¹⁴⁾ 。 ・学習指導要領改訂（3 月） ¹⁵⁾ 。
平成 21 年	・文部科学省 食生活学習教材児童生徒用「食生活を考えよう」、食生活学習教材指導者用「食生活を考えよう」発行。 （小学校低・中・高学年用，中学生用を該当児童生徒に配布）。
平成 22 年	・改正学校給食法施行（4 月） ・文部科学省「食に関する指導の手引」第 1 次改訂版発行（3 月）
平成 23 年	・「第 2 次食育推進基本計画」策定（3 月）（平成 23 年度からの 5 年間）

第 5 節 青森県における食育

国の食育推進の動きを受け、青森県では、青森県庁「食の安全・安心課」が中心となって学校、農林水産団体などと連携して次のような取り組みが着々と進められてきた。

<ul style="list-style-type: none"> ・青森県食育推進計画（平成 18 年 11 月 1 日策定）（※平成 18～22 年度までの 5 年間） ・いただきます！あおもり食育行動プラン（※平成 18～22 年度までの 5 年間） ・いただきます！みんなで進める食育県民運動 食育月間（6 月，11 月）・食育の日（毎月 19 日）の制定 ・いただきます！あおもり食育推進モデル事業（平成 19～20 年度） ・「学校における食育マニュアル 学校・家庭・地域が連携した食に関する指導の充実のために」発行（青森県教育委員会）（平成 19 年 3 月） ・「学校における食育プログラム」発行（青森県教育委員会）（平成 20 年 3 月） ・「あおもりっ子食育推進チーム」結成（平成 20 年） 県内各地域の 7～8 名の児童生徒による。 ・あおもりっ子食育サミット（平成 20 年 11 月） ・あおもりっ子食育新聞発行（青森県教育庁）（平成 21 年 2 月） ・あおもりっ子食育チャレンジカード（平成 21 年 11 月） ・食育推進チーム会議や「あおもりっ子食育フェスタ」開催。（平成 21 年度） ・大学生が「食育を応援します」 ・「第 2 次青森県食育推進計画」策定（平成 23 年 3 月 22 日）（※平成 23 年度～5 年間） 学校における食育は、最重要項目に位置づけられている¹⁶⁾。 ・「地場産物を活用した食育指導資料」発行（青森県教育委員会）（平成 23 年 3 月）

第1章 食に関する指導の課題と本研究の目的

第1節 食に関する指導の5つの課題

学校現場では、前述のような目まぐるしい流れの中で求められている食に関する指導が行われているのだろうか。少なからず困難を感じていると思われる。食に関する指導の推進を困難にしている要因としては、何より指導時間の確保が難しいことではないか。筆者の現任校の状況からも、食に関する指導以外にも特別活動や総合的な学習の時間に組み込まれた指導が多々あり、食に関しての問題は感じながらも、指導の優先度は高くないと思われる。また、教育活動全体を通じて行うものとされているがために中心となる担当者が不明確であること、指導内容が、食事の重要性から食品を選択する能力、社会性までと広範囲であること、食に関しては、児童生徒のみならず家庭での食事あり方や食に対する考え方が大きく影響しているため、家庭との連携や協力が必要であること、栄養教諭制度が導入されたとはいえその数は少なく、推進の担い手としての栄養教諭は、給食管理の職務が多忙を極め、十分に指導にあたれない状況にあるのではないかと、等が考えられる。

以上のことから、以下の5つの課題があると考ええる。

- 1) 学校全体で行うための組織としてどのようにしていくかが曖昧で、体制づくりが難しい。
- 2) 特別に定められた時間がないため、指導時間の確保が難しい。
- 3) 目標が多岐にわたり、取り扱う内容も広範囲である。
- 4) 栄養教諭の配置が少ない。
- 5) 養護教諭はどのように関わるのか。

以下、各課題について説明する。

1) 課題1：組織・体制づくりと時間の確保

平成20年に改訂された小学校及び中学校の新学習指導要領総則では、新しく「学校における食育の推進」が加えられ、発達段階を考慮して、体育科、保健体育科、保健体育の時間はもとより、家庭科、技術・家庭科・特別活動などにおいても、それぞれの特質に応じて適切に行うなど、学校教育活動全体として取り組むことが必要であると示されている。組織と指導時間については、学習指導要領より引用するが、教科を横断するため定められた指導時間ではないことによる曖昧さと、学校教育活動全体として取り組むため指導体制の曖昧さがあり、食に関する指導を進めていく上での課題の一つであると考ええる。

以下、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）から引用する。

総則

小学校学習指導要領総則 体育・健康に関する指導 （第1章第1の3）¹⁷⁾

第1条 教育課程編成の一般方針

- 3 学校における体育・健康に関する指導は、児童の発達の段階を考慮して、学校のエ
- 教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、学校における食育の推進並び

に体力の向上に関する指導，安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については，体育科の時間はもとより，家庭科，特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする。また，それらの指導を通して，家庭や地域社会との連携を図りながら，日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し，生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。

（中学校については資料 3¹⁸⁾ 参照。）

小学校（中学校）学習指導要領解説 総則編より 19)

学校における食育の推進においては，偏った栄養摂取などによる肥満傾向の増加など食に起因する健康課題に適切に対応するため，児童（生徒）が食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけることにより，生涯にわたって健やかな心身と豊かな人間性をはぐくんでいくための基礎が培われるよう，栄養のバランスや規則正しい食生活，食品の安全性などの指導が一層重視されなければならない。また，これら心身の健康に関する内容に加えて，自然の恩恵・勤労などへの感謝や食文化などについても教科等の内容と関連させた指導を行うことが効果的である。食に関する指導に当たっては，栄養教諭等の専門性を生かすなど教師間の連携に努めるとともに，地域の産物を学校給食に使用するなどの創意工夫を行いつつ，学校給食の教科的効果を引き出すよう取り組むことが重要である。

2) 課題 2：関連教科等

小中学校においては，以下のような教科で指導することが示されており，食育のための時間が増やされたわけではなく，従来の時間枠の中で行うことになっている。

①家庭科，技術・家庭科 20)，21)

食に関する指導については，家庭科の特質に応じて，食育の充実に資するよう規定。

②体育科，保健体育科 22)，23)

保健の内容のうち，食事，運動，休養及び睡眠について，食育の観点も踏まえつつ健康的な生活習慣の形成に結び付くよう配慮することを規定。

③特別活動[学級活動] 24)，25)

食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成について規定。

3) 課題 3：食に関する指導の目標

食に関する指導の目標は6つあげられているが，多岐にわたり，その目標からおりてくる指導内容も広範囲であり，指導計画立案の際，焦点化に困難を感じ，食に関する指導を進めていく上での課題の一つであると考えられる。

以下に，文部科学省発行「食に関する指導の手引―第一次改訂版―」から関連する部分

を引用する。²⁶⁾

.....

食に関する指導は、児童生徒が食に関する知識や能力等を発達段階に応じて総合的に身に付けることができるよう、各教科における個々の食に関する指導を継続性に配慮しつつ、教科横断的な指導として関連付け、学校教育全体で進めていくことが必要である。

児童生徒が健全な食生活を実践し、健康で豊かな人間性を育んでいけるよう、栄養や食事のとり方などについて、正しい知識に基づいて自ら判断し、実践していく能力などを身につけさせるために、次の6つの事項を食に関する指導の目標としている。

- ①食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。[食事の重要性]
- ②心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付ける。[心身の健康]
- ③正しい知識、情報に基づいて、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける。[食品を選択する能力]
- ④食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ。[感謝の心]
- ⑤食生活のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。[社会性]
- ⑥各地域の産物、食文化や食に関わる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。[食文化]

これらの目標達成に向け、家庭や地域との連携を図るとともに、継続性に配慮し意図的に学校給食を教材として活用しつつ、給食の時間をはじめとする関連教科等における食に関する指導を体系付け、学校教育活動全体を通じて総合的に食育を推進することを、「学校における食育を推進すること」とする。

.....

4) 課題4：栄養教諭制度と配置状況

栄養教諭は、各学校における指導体制の要として食育の推進において重要な役割を担う。その制度は、平成17年4月に開始された。配置が進むことにより、各学校において、栄養教諭を中心として食に関する指導に関わる全体計画が作成されることや、教諭等により体系的・継続的な学校全体の取り組みとなることが期待されている。

1) 栄養教諭の職務

栄養教諭の職務としては、食に関する指導と給食管理を一体のものとして行うことにより、地場産物を活用して給食と食に関する指導を実施するなど、教育上の高い相乗効果がもたらされるとされ、以下の2つが述べられている。²⁷⁾

(1) 食に関する指導

- ①肥満、偏食、食物アレルギーなどの児童生徒に対する個別指導を行う。
- ②学級活動、教科、学校行事等の時間に、学級担任等と連携して、集団的な食に関する指導を行う。

③他の教職員や家庭・地域と連携した食に関する指導を推進するための連絡・調整を行うこと。

(2) 学校給食の管理

栄養管理，衛生管理，検食，物資管理等

「学校栄養職員との職務内容の相違としては，栄養教諭が『児童生徒の栄養の指導及び管理をつかさどる』ことを任務としており（学校教育法第28条第8項・第40条等），一方学校栄養職員は，『学校給食の栄養に関する専門的事項をつかさどる』ことを任務としており（学校給食法第5条の3），これら両者の本来的な任務はことなるものとされている。また，栄養教諭は，教員免許法に基づく免許状の所持者であり，一定水準の教職の専門性が担保されている者と言える。学校栄養職員は，食に関する指導が職務に位置づけられておらず，学校全体の食育の推進体制を整備する職責を負う者として校務分掌において位置づけられるものではない。」²⁸⁾とされている。（注2）

2) 栄養教諭の配置

平成18年3月31日に政府の食育推進会議において決定された食育推進基本計画では，全都道府県における栄養教諭の早期の配置を求めている。栄養教諭の配置が進むことにより，各学校において，栄養教諭を中心として食に関する指導に係る全体計画が作成されることや教諭等により，体系的・継続的な学校全体の取組となることが期待されている。

文部科学省によると，すべての義務教育諸学校において給食を実施しているわけではないことや，地方分権の趣旨等から，栄養教諭の配置は地方公共団体や設置者の判断によることとされている。公立小中学校の栄養教諭は県費負担教職員であることから，都道府県教育委員会の判断によって配置されるとなっている。

青森県においては，栄養教諭制度が始まって3年目に当たる平成19年度に，初めて配置されている。

平成17年度から平成23年度の全国の栄養教諭配置状況を，表1に示した。

文部科学省では，「栄養教諭の配置促進について（依頼）」を，平成19年7月（各都道府県教育委員会教育長あてと各都道府県知事あて）と平成21年4月とにわたり通達している。

表1 平成17～23年度の栄養教諭配置状況（平成23年4月1日現在）²⁹⁾（単位：人）

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
北海道	10	67	194	263	328	362	404
青森県			6	6	18	21	23
岩手県			17	32	43	59	74
宮城県		3	12	25	35	44	54
秋田県		1	4	8	15	21	25
山形県		1	5	12	17	34	49
福島県			12	20	28	27	27
茨城県		10	20	36	42	47	45
栃木県			9	22	34	43	43
群馬県			6	14	19	18	27
埼玉県		5	10	15	65	115	138
千葉県		5	10	15	23	38	58
東京都				5	16	27	36
神奈川県			8	12	26	40	52
新潟県			2	32	73	100	119
富山県		1	4	8	10	20	25
石川県		4	11	20	30	41	49
福井県	10	32	30	32	32	32	32
山梨県			5	5	5	13	21
長野県			5	20	23	43	41
岐阜県			4	4	81	97	112
静岡県				3	5	28	36
愛知県		10	10	68	73	117	144
三重県		11	48	72	98	112	115
滋賀県		4	11	15	20	27	30
京都府		58	91	122	131	154	156
大阪府	9	9	20	140	270	385	442
兵庫県			51	285	312	322	338
奈良県			10	20	27	30	32
和歌山県			3	3	10	12	15
鳥取県			3	3	11	15	19
島根県			14	29	49	62	61
岡山県		3	9	21	26	34	41
広島県			10	10	10	26	26
山口県		7	16	32	48	63	78
徳島県		9	17	25	25	25	35
香川県		5	5	19	41	54	71
愛媛県		16	41	57	77	85	91
高知県	5	11	15	19	23	31	41
福岡県		9	40	70	115	177	213
佐賀県		3	5	10	17	27	34
長崎県			12	33	51	68	77
熊本県			15	30	42	51	67
大分県			7	14	20	20	23
宮崎県		6	11	16	22	26	28
鹿児島県		69	144	161	163	162	155
沖縄県			4	14	14	24	31
合計	34	359	986	1, 897	2, 663	3, 379	3, 853

表 2 は、青森県内の栄養教諭の配置状況を示したものである。この県教委の分類は栄養教諭の所属校種によるものとは異なり、「共同調理場」と「教育委員会」の所属先がある。平成 23 年度は 27 名の栄養教諭が配置されていた。

表 2 青森県内の栄養教諭の配置状況 人

	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
小学校	0	0	2	2	5	3	18※
中学校	0	0	0	0	1	1	4※
特別支援学校	0	0	1	1	4	4	4※
定時制高校	0	0	0	0	0	0	0※
共同調理場	0	0	5	5	10	16	
教育委員会						1	1※
合計	0	0	8	8	20	25	27※

H17～H22 は青森県「児童生徒の健康・体力」³⁰⁾ より

※H23 は青森県学校基本調査³¹⁾ より

栄養教諭の所属先による分類のため、前年度までの分類とは異なる。

表 3 青森県内の栄養教諭所属先による配置状況 人

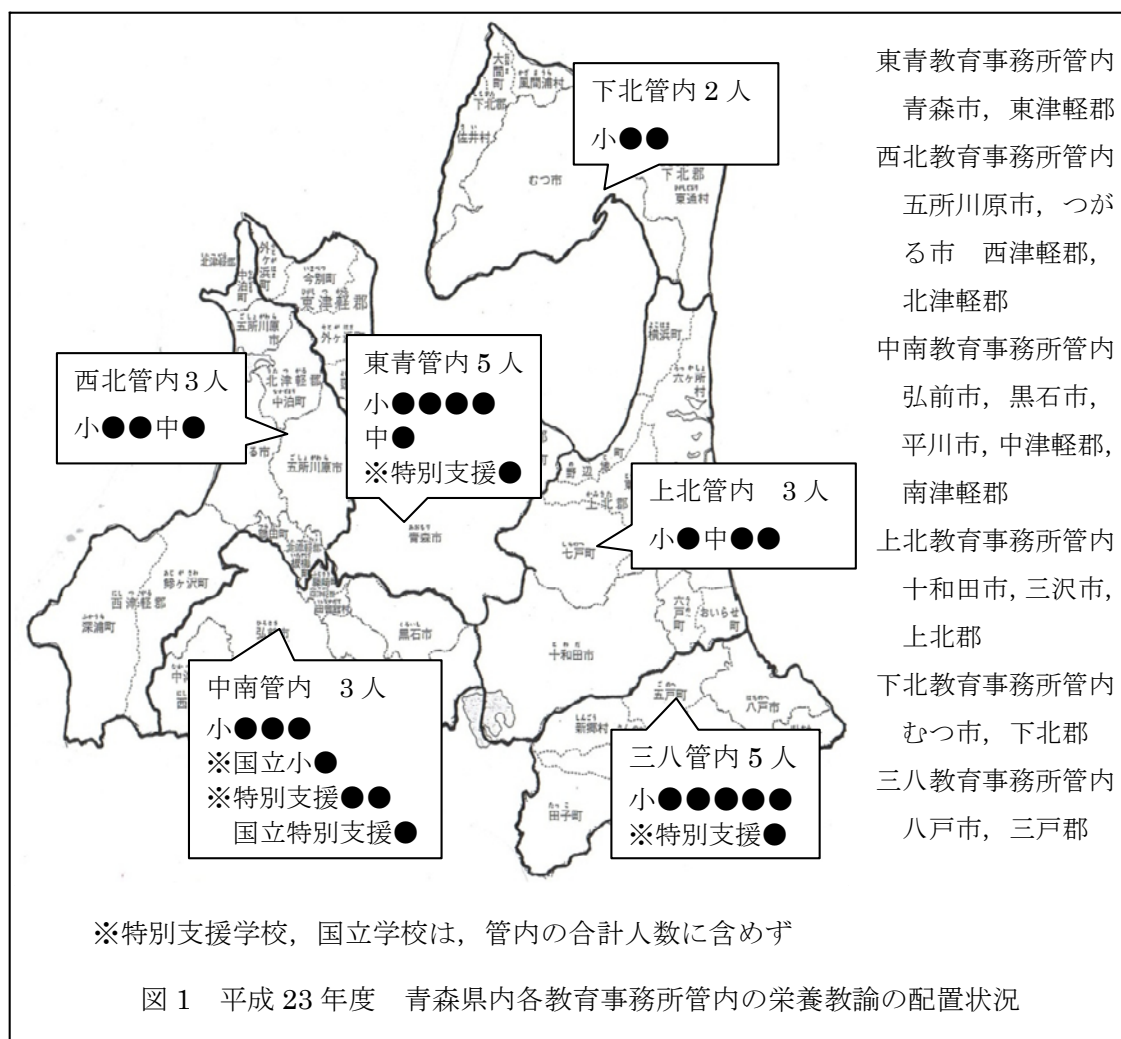
	H22 年度	H23 年度		
	栄養教諭数	栄養教諭数	学校数	栄養教諭一人あたりに 対する児童生徒数
小学校計	17	18	333	4,024
公立	16	17	332	4,223
国立	1	1	1	630
中学校計	4	4	171	10,127
公立	4	4	166	9,884
国立	0	0	1	0
私立	0	0	4	0
高等学校	0	0	85	0
特別支援学校	4	4	20	440
県立	3	3	19	567
国立	1	1	1	57
合計	23	26	609	

※教育委員会所属の 1 名を除く

平成 22 年度青森県学校基本調査³²⁾，平成 23 年度青森県学校基本調査³³⁾ より

表 3 は、青森県学校基本調査より栄養教諭の配置状況を所属校の校種別で示したものである。平成 23 年度は、小学校所属の栄養教諭が 1 人増えただけであった。

平成 23 年 5 月 1 日現在の青森県の栄養教諭の配置状況を単純に学校数で計算すると、小学校 333 校、中学校 171 校、特別支援学校 20 校（いずれも国立を含む）計 524 校中栄養教諭は 26 名、5.0%という状況である（高等学校は除く）。



国をあげて食育の推進を図っている感があるが，学校における食育の中核的役割を担う栄養教諭の配置がこの状況であることは，残念な限りである。厳しい財政状況では，今後の急増の可能性は低いと思われるが，その職務の重要性からも，今後も少しずつでも配置が進むことを期待したい。また，このような状況であるために，栄養教諭が未配置で，共同調理場にも配置されていない市町村の学校では，学校栄養職員を活用したり，校内はもとより校外の関係機関とも連携し，食に関する指導を工夫して進めていく必要があるとも考える。

5) 課題 5 養護教諭の関わり

平成 21 年度の東京都養護教員会の調査によると、「養護教諭として食育の取り組みにどの程度かかわっているか」という質問に対して、小学校勤務の養護教諭の回答は以下のとおりである。食の全体計画では、「主に関わる」8.2%、「全く関わっていない」が 55.8%、学習時間の指導では、「主に関わる」4.8%、「全く関わっていない」が 63.7%という結果であった。また、89.5%が東京都独自の制度である「食育リーダー」にはなっていなかった。³⁴⁾ (注 3)

また、青森県教育委員会発行の「学校における食育マニュアル」では、食育推進の基本的な考え方としてあげた 3 点のうち、第 2 点目として「栄養教諭及び学校栄養職員の専門性を生かし、各教科における指導と関連付けて実施する。栄養教諭及び学校栄養職員が配置されていない学校においては、養護教諭や家庭科担当教諭等の専門性を生かす。」と述べられている。³⁵⁾

これまで多くの養護教諭は、食については、朝食の大切さや間食の摂り方について、生活リズムや排便、歯・口腔の指導にからめて等の保健指導に取り組んできている。養護教諭としてだけではなく、保健主事や給食主任という立場から食に関する指導の担当者となりうる場合も少なくないのではないだろうか。

筆者は、現任校において保健主事として中心的立場で全体計画の見直しに取り組んだ。しかし、計画作成の段階から困難を感じている。今後ますます食育の推進が求められると予想される中で、養護教諭はどのように関わっていくことが望ましいのかを、本調査を通して考察する。

※注 1:『食育』という言葉は、明治時代以降、知育、体育と並ぶものとして用いられてきた。出版物には、陸軍薬剤監であった石塚左玄が、『通俗食物養生法』で『今日、学童を持つ人は、体育も知育も才育も全て食育にあると認識すべき。』と記している。さらに、1903 年には報知新聞編集長であった村井弦斎が、連載していた人気小説『食道楽』の中で、『幼児には徳育よりも、知育よりも食育が先き。体育、徳育の根元も食育にある。』³⁶⁾ というように、近年に生まれたことばではなく、明治時代から使われ、さらには全ての基礎になるものとして、その重要性が認識されていた。

現在では、食育は「食をめぐる状況に対処し、その解決を目指した取組」³⁷⁾、「県民一人ひとりが生涯を通して健全な生活を実現して、健康を確保できるようにするため、自らの食について考える習慣や食に感謝する心、食に関するさまざまな知識、食を選択する判断力を正しく身に付ける活動や学習等に取り組むこと」³⁸⁾ 等とされている。

※注 2: 栄養教諭の資格は、栄養教諭普通免許状（専修、一種、二種）を新設し、大学における所要単位の習得により免許状を取得することが基本とされるが、現職の学校栄養 7 職員は、一定の在職経験と都道府県教育委員会が実施する講習等において所定の単位を

修得することにより、栄養教諭免許状を取得できるよう法律上特別の措置が講じられている³⁹⁾。

※注3：「食育リーダー」とは東京都の全公立学校に設置された「食育推進チーム」のリーダーであり、以下のように記載されている。

「食育推進チーム」は、主幹・家庭科教諭・養護教諭・学校栄養職員等によって構成され、各学校の食育推進の中心となって「食に関する指導の全体計画」を作成し、円滑な実施に向けた調整等を行うための組織で、「食育リーダー」は、このチームの中核的役割を担う者として、全体計画作成や授業構築の際の助言等を行う。」⁴⁰⁾

第2節 本研究の目的

これまで述べてきたように、「食育」は国をあげて積極的に推進されてきており、「食育基本法」制定から5年を経て、第2次食育推進計画が策定されるなど、次のステップへと進み、今後も同様に推進されていくものと思われる。学校における食に関する指導も学習指導要領に明記され、これまで以上に推進していくことが求められてきている。しかし、食に関する指導の中心的推進役と期待されている栄養教諭は、青森県内ではこの1年間にただ1人の増加という状況であり、今後も急増することは厳しいと思われる。このような状況で、第2次食育推進基本計画でその推進が求められている「すべての児童生徒が栄養教諭の専門性を生かした食に関する指導を受けられるように」⁴¹⁾、となるのは困難であると思われる。

このような中で、青森県内の栄養教諭が配置されていない小学校では食に関する指導において、養護教諭にその中心的役割が求められているのではないかと考えられた。このことは、久保らの「青森県内初等教育機関における食育活動の実態調査」⁴²⁾に回答した学校175校のうち、最も多い68校で養護教諭が回答していることから、校内の担当者が養護教諭であることがうかがえる。

そこで、前述の課題を明らかにするために、県内小学校における食に関する指導の実態を把握し、養護教諭としての関わり方や栄養教諭との連携のあり方を探ること目的として、調査（養護教諭へのアンケート調査と栄養教諭へのアンケート調査、栄養教諭への面接調査や指導の参観）を行った。

第 2 章 本研究の方法

第 1 節 研究の方法

本研究の方法は、次の 2 つである。

- 1 栄養教諭と青森県教育委員会担当指導主事への面接調査、及び栄養教諭の授業の参観
- 2 養護教諭と栄養教諭への質問紙調査

第 2 節 調査方法

1 面接調査及び栄養教諭の授業参観

1) 面接調査

(1) 調査対象

青森県内の小・中学校に勤務する栄養教諭 3 人、及び青森県教育委員会担当指導主事 1 人。

(2) 調査期間

平成 22 年 9 月～平成 23 年 2 月

2) 授業参観

(1) 調査対象

- ・上記の面接調査対象の栄養教諭 2 人の授業の参観
- ・平成 22 年度及び平成 23 年度青森県学校保健・安全・給食研究大会における公開授業の参観

(2) 調査期間

平成 22 年 10 月～平成 23 年 11 月

2 質問紙調査

1) 調査対象

青森県内の小学校に勤務する養護教諭 347 人の 46.1%にあたる 160 人（栄養教諭配置校 15 人、それ以外 145 名）を対象とし、栄養教諭は総数 22 人のうち、小中学校に所属する 19 人（小学校所属者 15 人、中学校所属者 4 人）全員を対象とした。

回収数及び回収率は表 4 に示した。有効回答率はそれぞれ 100%であった。

表 4 回収数及び回収率

人数 (%)

1 養護教諭		2 栄養教諭	
栄養教諭配置校	11 人 (73.3%)	小学校所属	11 人 (73.3%)
栄養教諭未配置校	96 人 (66.2%)	中学校所属	3 人 (75.0%)
合計	107 人 (66.9%)	合計	14 人 (73.7%)

分析対象者数は、養護教諭は 107 人、栄養教諭は 14 人であった。

2) 調査期間

平成 23 年 2 月～3 月。

3) 調査方法

選択肢式及び一部自由記述式を併用した質問紙を用い、郵送法および直接配布法で行った。

4) 調査内容

(1) 養護教諭を対象とした調査

- ・調査対象者の属性と、現任校の給食の状況について
- ・現任校での食に関する指導の状況について
- ・これまでの食に関する指導について※
- ・栄養教諭制度の導入による、連携の状況と連携のしかたについて※

(2) 栄養教諭を対象とした調査

- ・調査対象者の属性と、給食の状況について
- ・所属校と受配校の食に関する指導の状況について
- ・これまでの食に関する指導について※
- ・養護教諭との連携について※

※ 調査内容作成に際しては、2010 年（平成 22 年）文部科学省発行「食に関する指導の手引（第一次改訂版）」に掲げられている「食に関する指導の目標」に沿った 6 つの観点（「食事の重要性」、「心身の健康」、「食品を選択する能力」、「感謝の心」、「社会性」、「食文化」）から例示された内容の、それぞれ 3～4 項目をとりあげ、内容を構成した。

5) 分析方法

SPSS 16.0 for Windows を用いて統計解析を行い、 χ^2 検定及び Fisher の直接確立計算法によって検定を行った。

第 3 章 結 果

以下、質問紙調査の結果について述べる。

第 1 節 養護教諭

1 回答者の属性

①現任校の栄養教諭の配置状況

表 5 は、現任校に栄養教諭が配置されていますか、という質問の回答である。

配置されている小学校での勤務者は 10.3 % (11 人)、配置されていない小学校での勤務者は 89.7% (96 人) であった。

表 5 栄養教諭が配置されているか
人 (%)

配置されている	96 (89.7)
配置されていない	11 (10.3)
合計	107 (100.0)

②職名

表 6 は、職名をお知らせくださいという質問の回答である。

養護教諭は 91.6% (98 人)、養護助教諭は 8.4% (9 人) であった。

表 6 職名
人 (%)

養護教諭	98 (91.6)
養護助教諭	9 (28.4)
合計	107 (100.0)

③年齢分布

表 7 は、年齢をお知らせください、という質問の回答である。

50 代が最も多く、57.0% (61 人) であった。

表 7 年齢分布
人 (%)

20 代	99 (8.4)
30 代	14 (13.1)
40 代	23 (21.5)
50 代	61 (57.0)
合計	107 (100.0)

④養護教諭関連の所持免許状

表 8 は、所持免許状についてお知らせください、という質問に対しての複数回答のうち、養護教諭の免許状について示したものである。

1 種免許状が最も多く、91.6% (98 人) であった。

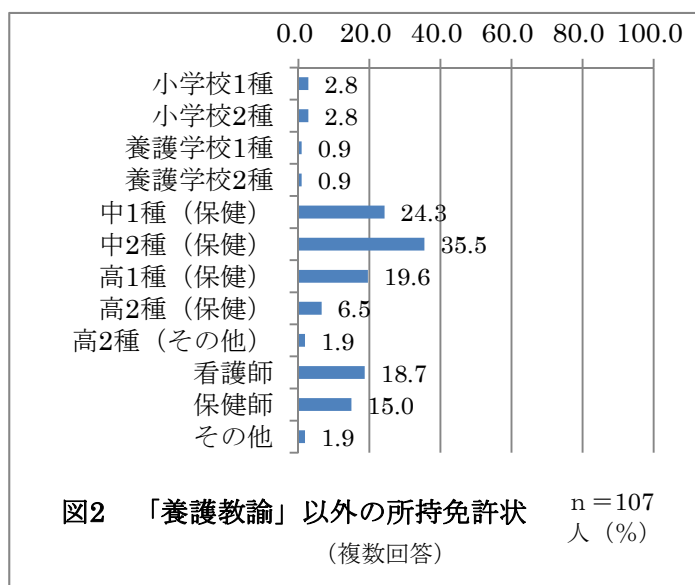
表 8 「養護教諭」の所持免許状
人 (%)

養護教諭専修	2 (1.9)
養護教諭 1 種	98 (91.6)
養護教諭 2 種	7 (6.5)
合計	107 (100.0)

⑤その他の所持免許状

図2は、上記④の回答のうち、養護教諭以外の免許状をお知らせください、という質問に対しての複数回答である。

教員免許状では、「保健」の中学校2種免許状が最も多く、1種も含めた中学校保健の免許状所持者は59.8%、高等学校保健の免許状所持者は26.1%であった。



⑥教職経験年数

表9は、経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

31年目以上が43.9% (47人) と最も多く、次いで21～30年目が20.6% (22人) であった。

1年目の者はいなかった。

表9 教職経験年数 人 (%)

1年目	0 (0.0)
2～5年目	10 (9.3)
6～10年目	12 (11.2)
11～20年目	16 (15.0)
21～30年目	22 (20.6)
31年目以上	47 (43.9)
合計	107 (100.0)

⑦現任校勤務年数

表10は、現任校の勤務年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～5年目が64.5% (69人) と半数以上であった。

表10 現任校勤務年数 人 (%)

1年目	20 (18.7)
2～5年目	69 (64.5)
6～10年目	18 (16.8)
合計	107 (100.0)

⑧保健主事の兼務状況

表11は、保健主事を兼務しているかお知らせください、という質問の回答である。

「兼務していない」が60.7% (65人) で半数以上を占め、「兼務している」より多かった。

表11 保健主事の兼務状況 人 (%)

兼務している	42 (39.3)
兼務していない	65 (60.7)
合計	107 (100.0)

⑨保健学習の担当状況

表 12 は、保健学習を担当しているかお知らせください、という質問の回答である。

「担当していない」が 89.7% (96 人) と圧倒的に多かった。

表 12 保健学習の担当状況 人 (%)

担当している	11 (10.3)
担当していない	96 (89.7)
合計	107 (100.0)

⑩養護教諭配置状況

表 13 は、現任校における養護教諭の配置状況についてお知らせください、という質問の回答である。

ほとんどが「単数配置」であり (96.3%, 103 人), 「複数配置」は 3.7% (4 人) であった。

表 13 養護教諭配置状況 人 (%)

単数配置	103 (96.3)
複数配置	
養護教諭 2 名	2 (1.9)
養護教諭と養護助教諭	2 (1.9)
合計	107 (100.0)

⑪現任校の児童数

表 14 は、現任校の在籍児童数についてお知らせください、という質問の回答である。

100 人～300 人未満が 33.6% (36 人) と最も多く、次いで 300 人～700 人未満が 26.2% (28 人) であった。

規模別にみると、300 人未満の小規模校が 68.2%と半数以上であった。

表 14 在籍児童数 人 (%)

50 人未満	13 (12.1)
50～100 人未満	24 (22.4)
100 人～300 人未満	36 (33.6)
300 人～700 人未満	28 (6.2)
700 人以上	6 (5.6)
合計	107 (100.0)

2 回答者の現任校の給食の状況

①給食形態

表 15 は、給食の実施状況についてお知らせください、という質問の回答である。

パンまたは米飯、おかず、ミルクが提供される「完全給食」が圧倒的に多く、95.3% (102 校) であった。給食を実施していない学校も 2 校あった。

表 15 現任校の給食実施状況 人 (%)

完全給食	102 (95.3)
補食給食	0 (0.0)
ミルク給食	3 (2.8)
実施していない	2 (1.9)
合計	107 (100.0)

②給食配食方式

表 16 は、上記①で「完全給食」と回答した場合、給食の形態についてお知らせください、という質問の回答である。

センター式給食が多く 85.7% (84 校) であった。

表 16 養護教諭現任校の給食配食方式
人 (%)

自校給食	14	(14.3)
センター式給食	84	(85.7)
合計	98	(100.0)

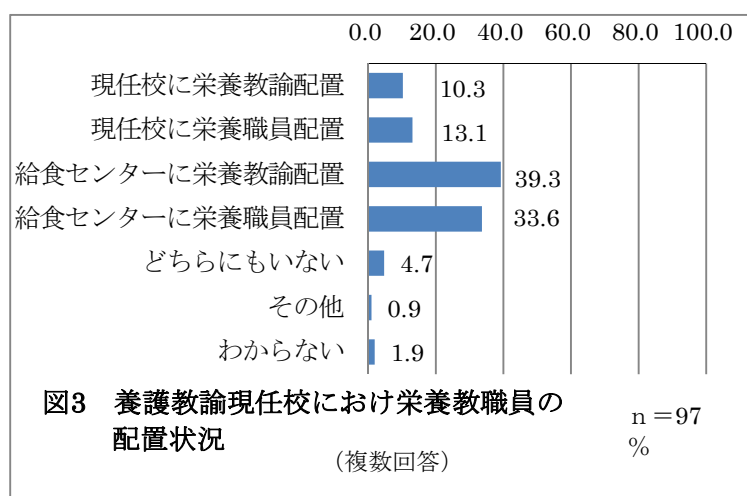
③回答者の現任校における栄養教諭・学校栄養職員の配置状況

図 3 は、栄養教諭または学校栄養職員（本論文中においては以下、栄養教職員と記す。）が配置されていますか、という質問の複数回答である。

現任校では、「学校栄養職員が配置されている」(13.1%)、給食センターでは、「栄養教諭が配置されている」(39.3%) が多かった。

栄養教職員が現任校に在籍しているが、同時に給食センターにも配置されている場合もあった。

「どちらにもいない」が 4.7%、「わからない」が 1.9%であった。



3 回答者の現任校における食に関する指導の状況

①食に関する指導の全体計画

表 17 は、食に関する指導の全体計画はありますか、という質問の回答である。

「ある」が 87.7% (93 人)、「ない」が 12.3% (13 人) だった。

表 17 食に関する指導の全体計画は
あるか 人 (%)

ある	93	(87.7)
ない	13	(12.3)
合計	106	(100.0)

②食に関する指導の全体計画の中心作成者

表 18 は、食に関する指導の全体計画を、実際に中心となって作成したのはどなたですか、という質問の回答である。保健主事兼務の場合は、保健主事と養護教諭のどちらの立場で作成したかを回答してもらった。

「養護教諭」が最も多く 37.1% (33 人) で、次いで「保健部所属の職員」19.1% (17 人)、「保健主事」14.5% (13 人) であった。

表 18 食に関する指導の全体計画の中心作成者はだれか 人 (%)

養護教諭	33 (37.1)
保健部所属の職員	17 (19.1)
保健主事	13 (14.6)
栄養教諭	10 (11.2)
学校栄養職員	4 (4.5)
その他	12 (13.5)
合計	89 (100.0)

③上記②で、「養護教諭」以外と回答した者の関わり方

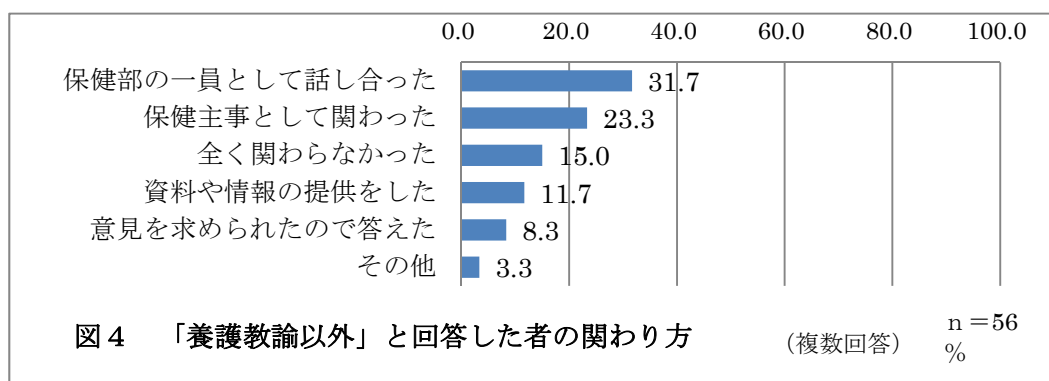


図 4 は、上記②で「養護教諭」以外と回答した者に、養護教諭はどの程度関わりましたか、という質問をした複数回答である。

「保健部の一員として話し合った」のが 31.7% (19 人)、「保健主事として関わった」のは 23.3% (14 人) であった。

④食に関する指導の研究推進校指定の有無 (平成 17 年度以降)

表 19 は、現任校は食に関する指導に関連する推進校・研究指定校の指定を受けたことがありますか、という質問の回答である。

研究推進校の指定を、栄養教諭制度が導入された平成 17 年度以降に受けたことが「ない」が 82.9% (87 人) であった。

表 19 食に関する指導に関連する推進校・研究推進校の指定を受けたか 人 (%)

ある	8 (7.6)
ない	87 (82.9)
わからない	10 (9.5)
合計	105 (100.0)

⑤食に関する指導への取組状況

表 20 は、現任校の食に関する指導への取組状況はいかがですか、という質問の回答である。

「比較的重点をおいている」と答えた者が最も多く、56.2%（59 人）であった。

「非常に重点をおいている」（11.4%、12 人）と合わせると 60%以上が重点をおいて取り組んでいる。「あまり重点をおいていない」は 32.4%（34 人）であったが、「取り組んでいない」はなかった。

表 20 食に関する指導への取組状況

	人(%)
非常に重点をおいている	12 (11.4)
比較的重点をおいている	59 (56.2)
あまり重点をおいていない	34 (32.4)
取り組んでいない	0 (0.0)
合計	105 (100.0)

⑥平成 22 年度の「食に関する指導」実施状況

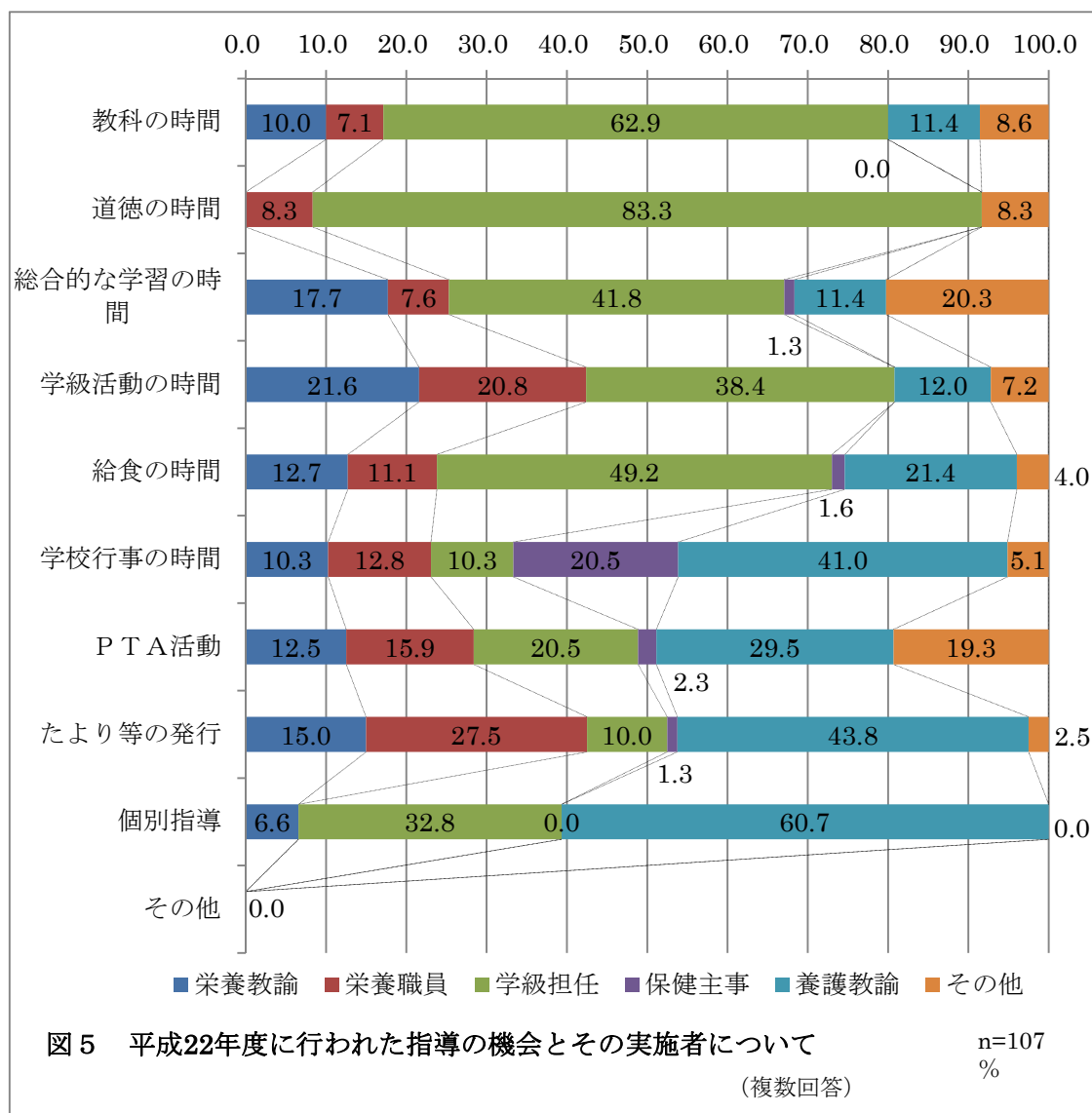


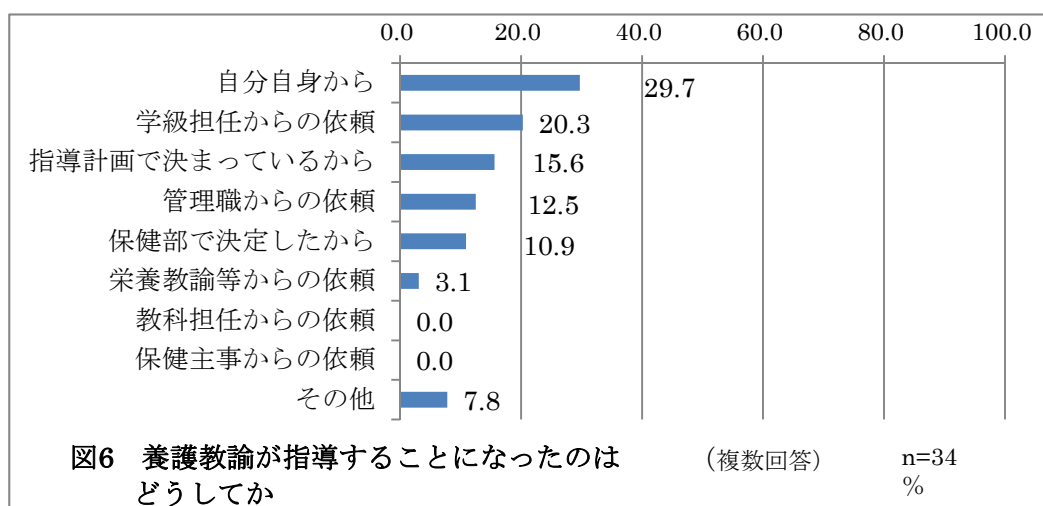
図 5 は、平成 22 年度に行われた指導の機会とその実施者に○をつけてください、という質問の複数回答である。

「教科」、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「学級活動」、「給食」の各時間の指導は学級担任が担当する割合が最も多く、「学校行事」、「PTA 活動」、「たより等の発行」、「個別指導」は養護教諭が担当する割合がどの項目でも最多であった。これらは、栄養教諭と学校栄養職員が担当する割合を合計しても、養護教諭の方が多かった。特に、個別指導では、養護教諭が担当した割合は 60.7% と高率であった

⑦養護教諭として関わった経緯

図 6 は、上記⑥の指導状況のうち、「教科」、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「学級活動」、「給食」の各時間で養護教諭が指導することになったのはどうしてですか、という質問に対しての複数回答である。

「自分自身から」が最も多く、29.7%（19 人）であった。学級担任や管理職等からの依頼により関わっている場合も多く、合わせて 32.8% あった。



4 食に関する指導への意識について

①力を入れている保健指導の内容

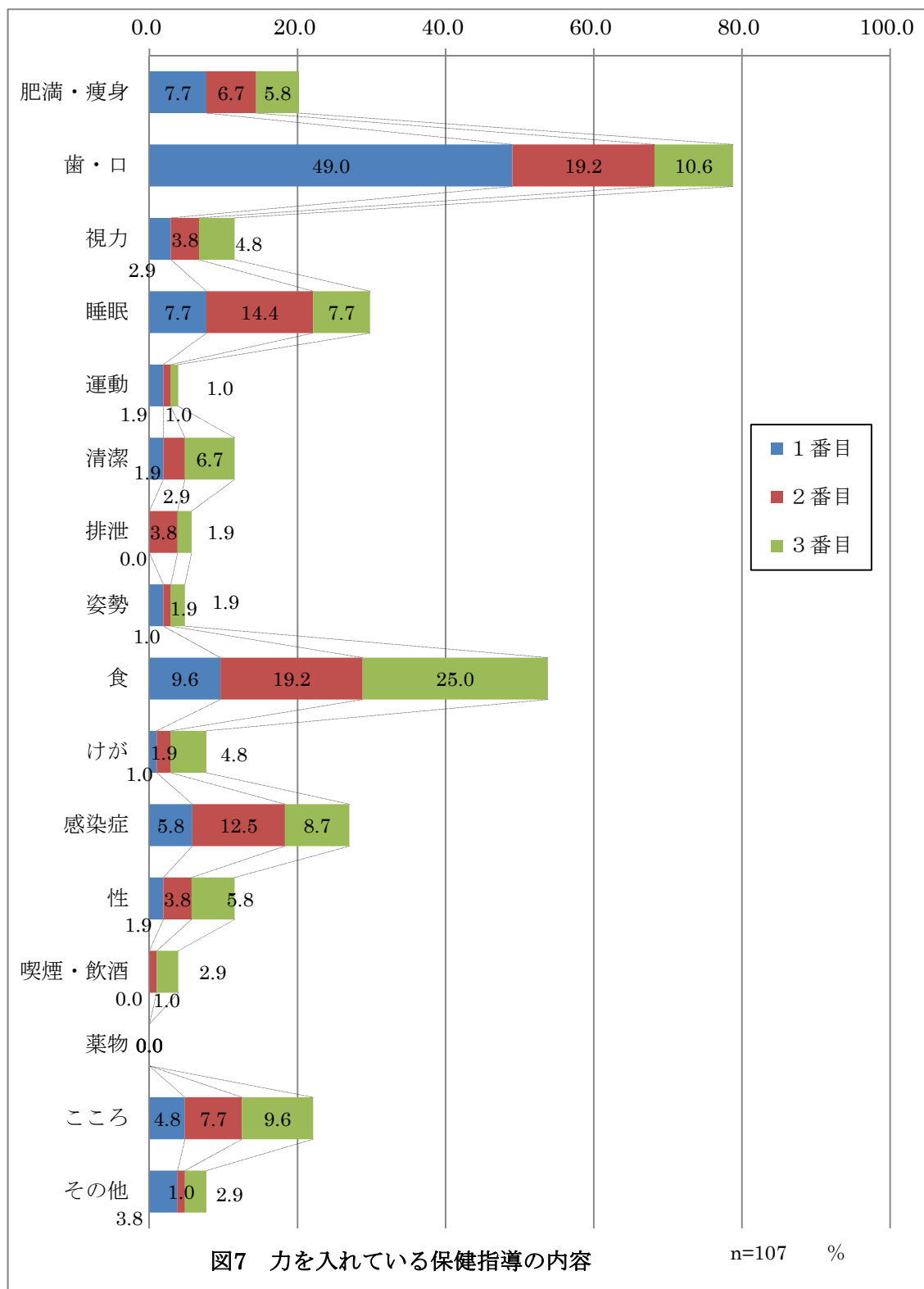
図 7 は、回答者が力を入れている保健指導の内容を、力を入れている順番に 3 つあげたものである。

全体としては、「歯・口に関すること」が最も多く、78.8%であった。次いで「食に関すること」53.8%、「睡眠に関すること」29.8%、「感染症」27.0%の順に多かった。

力を入れている順番の 1 番目にあげられている内容は、「歯・口に関すること」(49.0%) が圧倒的に多く、次いで「食に関すること」(9.6%)、「肥満・痩身」、「睡眠」(いずれも 7.7%) の順であった。2 番目にあげられている内容は、「歯・口に関すること」、「食に関

すること」（いずれも 19.2%）が同数で最も多く、次いで「睡眠」（14.4%）であった。

3 番目にあげられている内容は、「食に関すること」（25.0%）が最も多く、次いで「歯・口に関すること」（10.6%）, 「こころに関すること」（9.6%）であった。



②食に関する指導への関心

表 21 は、ご自身の食育や食に関する指導への関心はいかがですか、という質問の回答である。

「ある」が 71.8% (74 人) と最も多く、「非常にある」と合わせると、90%以上を占めた。

表 21 食に関する指導への関心人 (%)

非常にある	23	(22.3)
ある	74	(71.8)
あまりない	6	(5.8)
ほとんどない	0	(0.0)
合計	103	(100.0)

③食に関する指導の指導経験

表 22 は、これまでに資料や情報の提供を含めて、食に関する指導を行ったことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」が 87.5% (91 人) と多くを占めていた。

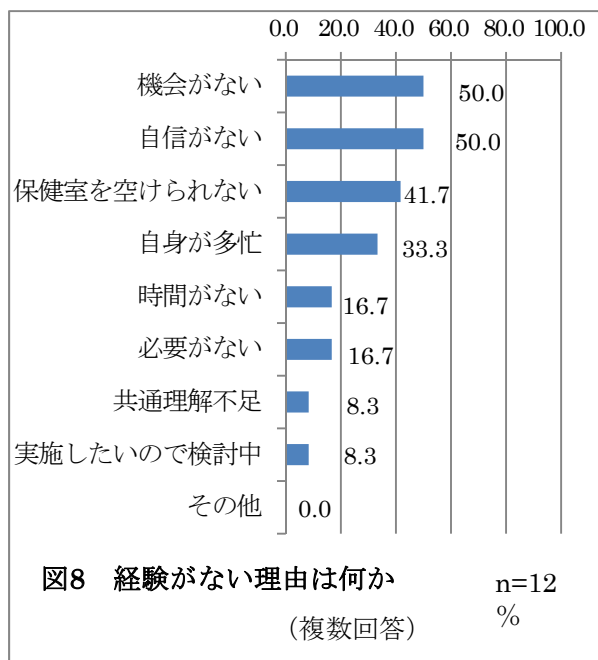
表 22 これまでに資料や情報の提供を含めて、食に関する指導を行ったことがあるか 人 (%)

ある	91	(87.5)
ない	13	(12.5)
合計	104	(100.0)

④上記③で、指導をしなかった理由

図 8 は、上記③で経験がないと答えた者に対して、その理由は何ですか、という質問の複数回答である。

「(指導の) 機会がない」、「(指導に対して) 自信がない」がそれぞれ 50.0% と最も多く、次いで、「保健室を空けられない」41.7%、「多忙」33.3%であった。



⑤これまでに関わった指導の機会の有無と、直接指導した機会

表 23 は、これまでに関わったことのある指導の機会と内容について○をつけてください、という質問を複数回答で回答してもらったうち、指導をした経験と、そのうち回答者が直接指導した機会を示したものである。

指導したことがある機会としては、「学級活動の時間」(64.6%, 62 人)、「たより等の発行」(63.5%, 61 人) が最も多く、次いで「学校行事の時間」(59.4%, 57 人)、「給食の時間」(53.1%, 51 人) が多かった。少なかったのは「道徳の時間」で 3.1% (3 人)

であった。

指導したことがある機会のうち、直接指導した機会としては、「個別指導」(60.0%, 42 人), 「たより等の発行」(54.3%, 38 人), 「学級活動の時間」(52.9%, 37 人)が多かった。

少なかったのは, 「道徳の時間」で 2.9% (2 人)であった。

表 23 これまでに関わったことのある指導の機会と、そのうち直接指導した機会 n=107 人(%)

指導の機会	これまでに関わった指導の機会	直接指導した機会
教科の時間	20 (20.8)	14 (20.0)
道徳の時間	3 (3.1)	2 (2.9)
総合的な学習の時間	22 (22.9)	12 (17.1)
学級活動の時間	62 (64.6)	37 (52.9)
給食の時間	51 (53.1)	32 (45.7)
学校行事の時間	57 (59.4)	33 (47.1)
PTA活動	20 (20.8)	9 (12.9)
たより等の発行	61 (63.5)	38 (54.3)
個別指導	52 (54.2)	42 (60.0)
全体計画立案	37 (38.5)	26 (37.1)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)

⑥指導後の評価

表 24 は, 指導後のご自身の評価はいかがでしたか, という質問の回答である。

「良かった」は 87.9% (88 人) だった。

「良くも悪くもない」は 9.9% (9 人),

「良くなかった」は 2.2% (2 人) だった。

表 24 指導後の評価はどうか 人 (%)

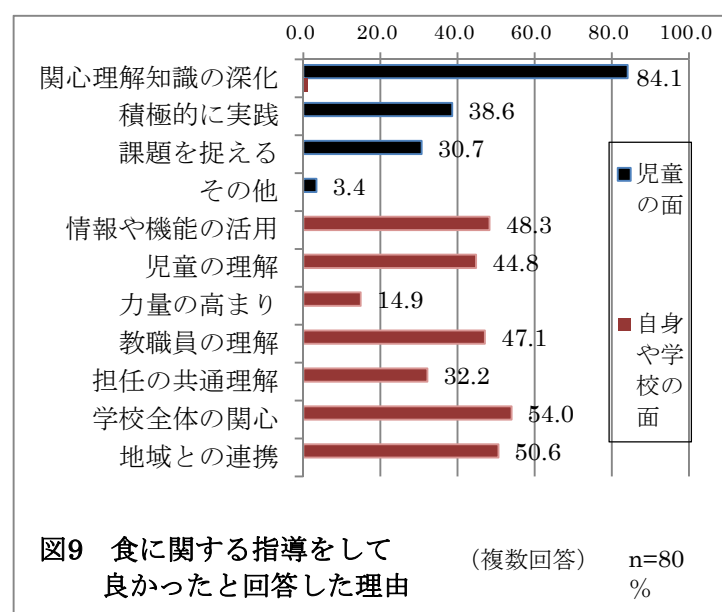
良かった	80 (87.9)
良くも悪くもない	9 (9.9)
良くなかった	2 (2.2)
合計	91 (100.0)

⑦上記⑥で, 「良かった」と回答した理由

図 9 は, 上記⑥の指導後の評価で, 「良かった」と回答した者へ, その理由をお知らせください, という質問をした複数回答である。

理由は, 児童の面からと自分自身や学校全体の面から示した。

児童の面としては, 「関心や理解, 知識が深まった」が 84.1%と最も多か



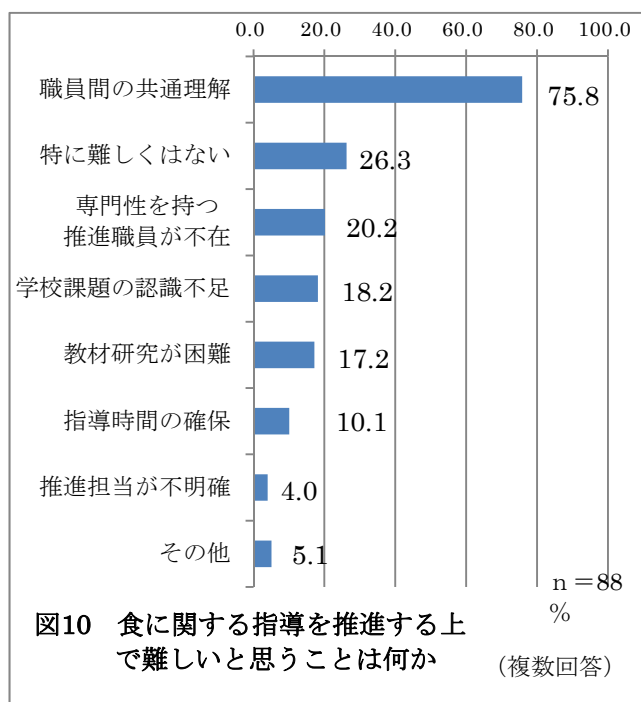
った。

養護教諭自身や学校全体の面としては、「学校全体の関心が高まった」(54.0%)や「地域との連携が深まった」(50.6%),「養護教諭としての情報や機能が活用できた」(48.3%),「教職員の理解が深まった」(47.1%),「児童の理解が深まった」(44.8%)が多かった。

⑧食に関する指導の指導上の困難点

図10は、食に関する指導を推進する上で、難しいと思われることは何ですか、という質問の複数回答である。

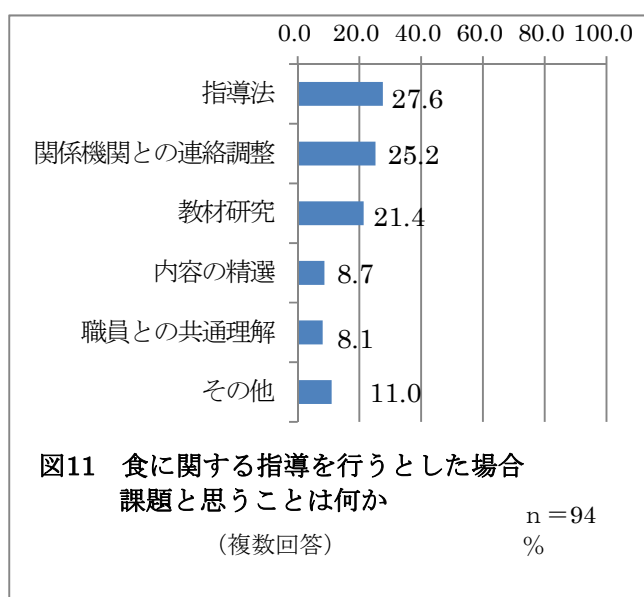
「職員間の共通理解」が最も多く75.8%であった。「専門性を持つ推進職員が不在」(20.2%),「学校課題の認識不足」(18.2%),「教材研究が困難」(17.2%)などがあげられたが、「特に難しくはない」が26.3%と全体の1/4を占めた。



⑨食に関する指導についての自身の課題

図11は、食に関する指導を行うとした場合、課題と思うことは何ですか、という質問の複数回答である。

「指導法」(27.6%),「関係機関との連絡調整」(25.2%),「教材研究」(21.4%)が多かった。



⑨回答者の食に関する指導への意見および感想

表 24 は、食に関する指導について、養護教諭としてどのように関わっていけばよいと思われるか、また、食に関する指導についてのお考えなどをお知らせください、という自由記述に記載されたものをまとめたものである。

107 人のうち回答者は 86 人、記載なしは 21 人であった。92 の記述があり、19 の項目に整理された。「特になし」は 1 人であった。

19 の項目は「肯定的」、「どちらかという肯定的」、「肯定的ではない」に分類した。

肯定的な記述は 13 項目で、「養護教諭の専門性を生かした指導をしていきたい」、「担任、栄養士や栄養教諭と連携してかかわってきたい」、「コーディネーター、または推進役、リーダーとしてかかわってきたい」が多かった。

どちらかという意欲的な記述は 4 項目で、「家庭との連携が難しい」、「校内体制により関わり方が異なると思う」が多かった。

肯定的ではない記述は 2 項目で、「積極的に関わることだと思うが、現実的には無理がある」、「関わりを減らしていきたい」という意見があった。

表 24 食に関する指導に養護教諭としてどのように関わっていけばよいと思うか、また食に関する指導についての考え n=107 () 記述数

肯定的	<ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭の専門性を生かした指導をしていきたい。(11) ・担任と連携して関わってきたい。(10) ・栄養士や栄養教諭と連携して関わってきたい。(10) ・養護教諭は、コーディネーター、または推進役、リーダーとして関わってきたい。(9) ・担任への資料の提供を行いたい。(6) ・自己研鑽を積極的にして関わる必要性を感じる。(4) ・体制作りを行いたい。(4) ・関係機関と連携して、関わってきたい。(4) ・現在の給食指導を有効に活用していきたい。(3) ・将来の生きる力につなげる指導をしていきたい。(2) ・委員会活動を通した指導をしていきたい。(2) ・必要な指導だと思う。(2) ・自校の児童の実態を把握する必要がある。(1)
どちらかという肯定的	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との連携が難しいと思う。(9) ・校内体制により、関わり方が異なると思う。(3) ・栄養教諭の指導を期待する。(2) ・できることからやっていく。(2)
肯定的ではない	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に関わることだと思うが、現実的には無理がある。(1) ・関わりを減らしていきたい。(1)

5 養護教諭と栄養教諭・学校栄養職員との連携について

①栄養教職員との連携の経験

表 25 は、これまでに栄養教職員と連携したことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」は 80.4% (86 人) と高率であった。一方、「ない」は 19.6% (21 人) であった。

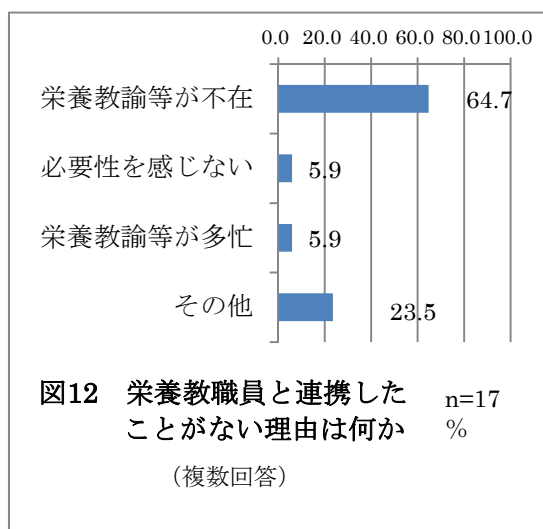
表 25 これまでに栄養教職員と連携したことがあるか 人 (%)

ある	86	(80.4)
ない	21	(19.6)
合計	107	(100.0)

②上記①で、連携したことがない理由

図 21 は、上記①で「連携したことがない」と回答した者にその理由は何ですか、という質問をした複数回答である。

「栄養教諭や学校栄養職員が不在」が最も多く、64.7%であった。



③上記①で、「ある」場合の連携の様子

表 26 は、上記①で「連携したことがある」と回答した者に、栄養教職員との連携の様子はいかがですか、という質問をした回答である。

「できている」が最も多く 59.3% (48 人) であった。「十分にできている」を合わせると、79.0% (64 人) と高率であった。一方、「あまりできていない」、「ほとんどできていない」は合わせて 21.0% であった。

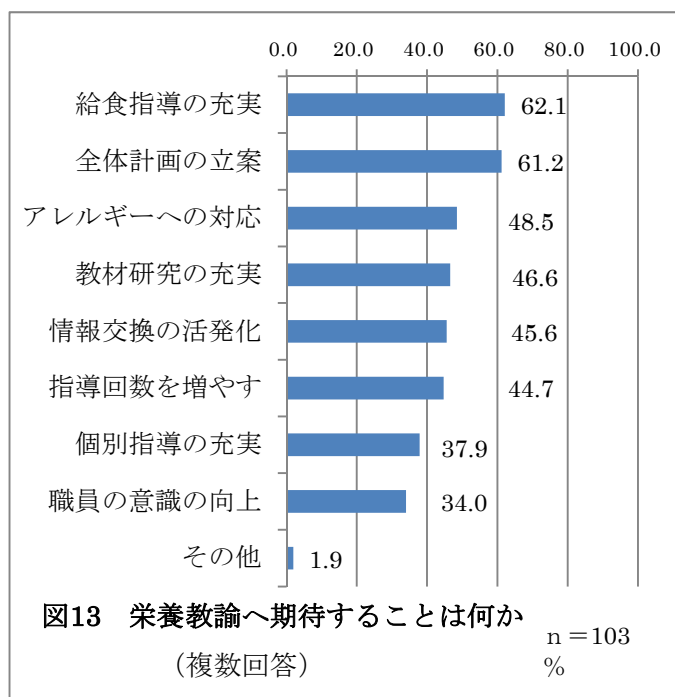
表 26 栄養教職員との連携はどうか 人 (%)

十分にできている	16	(19.8)
できている	48	(59.3)
あまりできていない	16	(19.8)
ほとんどできていない	1	(1.2)
合計	81	(100.0)

④栄養教諭へ期待すること

図 13 は、栄養教諭制度が始まっていることにより、栄養教諭へ期待することは何ですか、という質問の回答である。

「給食指導の充実」が62.1%、「食に関する指導の全体計画の立案」が61.2%、次いで、「アレルギーへの対応」48.5%、「教材研究の充実」46.6%、「情報交換の活発化」45.6%、「指導回数を増やす」が44.7%であった。



⑤指導内容による適切と考える指導者

図14は、「方法」で示したように、文部科学省発行の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容の項目ごとに、適切と思う指導者に○をつけてください、という質問の回答である。

回答は、「1 養護教諭が」、「2 栄養教諭が」、「3 学級担任や他の専門家が」、「4 養護教諭と栄養教諭が連携して」、「5 栄養教諭と学級担任や他の専門家が連携して」、「6 養護教諭と学級担任や他の専門家が連携して」、「7 養護教諭、栄養教諭、学級担任や他の専門家の3者が連携して」の7つに分けて示した。

「アレルギーの個別指導」などの個別指導については、養護教諭単独または栄養教諭や学級担任と連携しての指導が適切という回答が多数を占めた。「規則正しい食事」、「よくかむ」、「正しい姿勢」についても同様に多かった。

「給食の食品」、「食品や料理の名前」、「品質等への関心」では、栄養教諭が半数以上を占め、「食品の適切な選択」、「伝統料理」でも多かった。

「協力しての準備」、「食事のマナー」、「感謝の気持ち」では、学級担任が多かった。

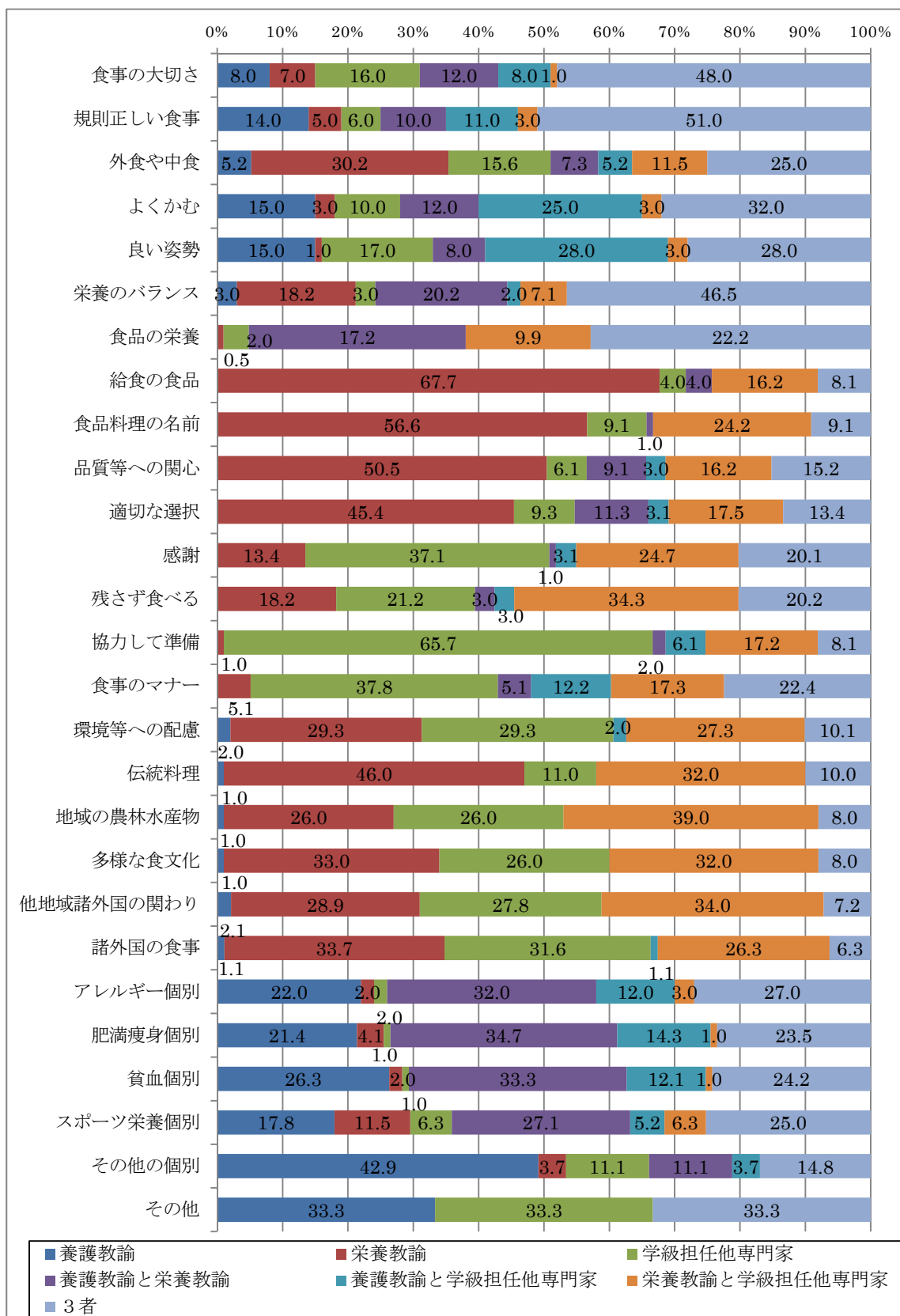


図14 指導内容により適切と考えられる指導者はだれか

n=101 %

⑥栄養教諭との連携について

表 27 は、栄養教諭とどのように連携していけばよいのか、また、栄養教諭制度についての自由記述に記載されたものをまとめたものである。107 人のうち回答者は 81 人、記載なしは 26 人であった。77 の記述があり、22 の項目に整理された。「特になし」は 3 人であった。

22 の項目は、「連携のしかた」、「栄養教諭制度について」、「その他」に分類した。連携のしかたについては 13 項目で、「情報交換や協議を行い、内容を充実させたい」、「全体指導、個別指導、保護者の指導を行ってほしい」という意見が多かった。

栄養教諭制度についての記述は 4 項目で、「配置を増やしてほしい」が多数であり、「現状は配置数が少ないため活用しにくい」という意見もあった。その他としては 2 項目で、「連携のしかたがよくわからない」が多数であった。

栄養教諭配置校に勤務する養護教諭の記述は 10 項目あり、アンダーラインで示した。

表 27 栄養教諭とどのようにして連携していけばよいのか
栄養教諭制度について n = 81 () 記述数

連携のしかたについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>情報交換や協議を行い、内容を充実させたい。</u> (7) ・ <u>全体指導、個別指導、保護者対象の指導も行ってもらいたい。</u> (6) ・ <u>連絡調整や、職員との間をつなぐ橋渡しの役割を果たす。</u> (5) ・ 積極的に連携していきたい。 (4) ・ <u>お互いの専門性を生かして連携していきたい。</u> (3) ・ 協力、分担していきたい。 (3) ・ 全体指導計画の立案、指導内容の検討を共同で行う。 (2) ・ 教材研究を共同で行う。 (2) ・ 役割を明確にし、職員間で共通理解をする必要がある。 (1)
栄養教諭制度について	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>各校または、給食センターに配置を増やしてほしい。</u> (17) ・ 積極的に活用したい。 (6) ・ 教諭として専念させたい。(栄養士の仕事をなくする。) (4) ・ 活用できれば良い制度だと思う。 (3) ・ 現状は、配置数が少ないため、活用しにくい。 (3) ・ アドバイザーと捉えている。 (1) ・ 食の指導を行える時間が限られてくる中で、その力を発揮できるのか不安である。 (1) ・ 配置の基準が不明であるので、栄養教諭の役割を明確にし、子どもたちのためになる配置をしてほしい。 (1)

その他	<ul style="list-style-type: none"> ・連携の仕方がわからない。(6) ・今後の展開により考えたい。(2) ・学校側の要請に応える指導もしてほしい。(1) ・指導内容が毎年同じだが，話し合いの機会がない。(1) ・センターに配置と校内に配置とでは連携のしかたが変わってくる。(1)
-----	---

第2節 栄養教諭

1 回答者の属性

①所属先

表 28 は、所属先をお知らせください、という質問の回答である。

小学校が 78.6%（11 人）と多く、中学校は 12.3%（3 人）であった。

表 28 栄養教諭の所属先 人（%）

小学校	11	（ 76.8）
中学校	3	（ 12.3）
合計	14	（100.0）

②兼務先

表 29 は、兼務先をお知らせください、という質問の回答である。

共同調理場が 85.7%（12 人）、小学校 7.1%（1 人）、兼務先がない者もいた。（7.1%，1 人）

ほとんどの栄養教諭は、所属校以外に兼務先があった。

表 29 栄養教諭の兼務先 人（%）

共同調理場	12	（ 85.7）
小学校	1	（ 7.1）
なし	1	（ 7.1）
合計	14	（100.0）

③年齢分布

表 30 は、年齢をお知らせください、という質問の回答である。

40 代が最も多く、50.0%（7 人）であった。

表 30 栄養教諭の年齢分布 人（%）

20 代	1	（ 7.1）
30 代	2	（ 14.3）
40 代	7	（ 50.0）
50 代	4	（ 28.6）
合計	14	（100.0）

④学校栄養職員としての経験年数

表 31 は、学校栄養職員としての経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

21 年以上が最も多く、61.5%（8 人）であった。

表 31 栄養教諭の学校栄養職員としての経験年数 人（%）

1～10 年目	4	（ 30.8）
11～20 年目	1	（ 7.7）
21 年以上	8	（ 61.5）
合計	13	（100.0）

⑤栄養教諭としての経験年数

表 32 は、栄養教諭としての経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～4 年目が最も多く、84.7%（11 人）

表 32 栄養教諭としての経験年数 人（%）

1 年目	1	（ 7.7）
2～4 年目	11	（ 84.6）
5 年以上	1	（ 7.7）
合計	13	（100.0）

であった。平成 18 年度に青森県の公立学校での栄養教諭制度が始まり、4 年経過しているためと考えられる。

⑥所属先での勤務年数

表 33 は、所属先での勤務年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～4 年目が最も多く、57.1%（8 人）であった。

表 33 所属先での勤務年数 人 (%)

1 年目	3 (21.4)
2～4 年目	8 (57.1)
5 年以上	3 (21.4)
合計	14 (100.0)

⑦主な仕事場

表 34 は、主に仕事をしている所はどちらですか、という質問の回答である。

兼務先が 71.4%（10 人）と多く、日常の主な仕事場所は兼務先である共同調理場であった。

表 34 栄養教諭の主な仕事場所 人 (%)

所属先	4 (28.6)
兼務先	10 (71.4)
合計	14 (100.0)

2 給食の状況

⑧給食配食対象校数

表 35 は、給食の対象となる学校数と人数についての質問の回答のうち、給食配食対象校数を示したものである。

最少 1 校から最多は 23 校までであり、最も多かったのは 2～5 校と 16～20 校で、それぞれ 25.0%であった。

表 35 給食配食対象校数 人 (%)

1 校	1 (8.3)
2～ 5 校	3 (25.0)
6～10 校	2 (16.7)
11～15 校	3 (25.0)
16～20 校	2 (16.7)
21～25 校	1 (8.3)
合計	12 (100.0)

⑨給食配食対象人数

表 36 は、給食の対象となる学校数と人数についての質問の回答のうち、給食配食対象人数を示したものである。

最少 254 人から最多は 8300 人までであり、8,000 人以上は 2 人であった。

最も多かったのは、3,000 人以上で、全体の 50.0%であった。

表 36 給食配食対象人数 人 (%)

500 人未満	1 (8.3)
500～999 人	3 (25.0)
1000～1499 人	2 (16.7)
1500～1999 人	0 (0.0)
2000～2499 人	0 (0.0)
2500～2999 人	0 (0.0)
3000 人以上	6 (50.0)
合計	12 (100.0)

3 回答者の所属校・受配校における食に関する指導の状況

①所属校の食に関する指導についての研究推進校の指定の有無(平成 17 年度以降)

表 37 は、所属校は平成 17 年度以降に食に関する指導に関しての推進校・研究推進校の指定を受けたことがありますか、という質問の回答である。

64.3%が指定を受けていなかった。

表 37 所属校は食に関する指導についての推進校・研究推進校の指定を受けたか 人 (%)

ある	5 (35.7)
ない	9 (64.3)
合計	14 (100.0)

②所属校の食に関する指導への取組状況

表 38 は、所属校の食に関する指導の取組状況についての質問の回答である。

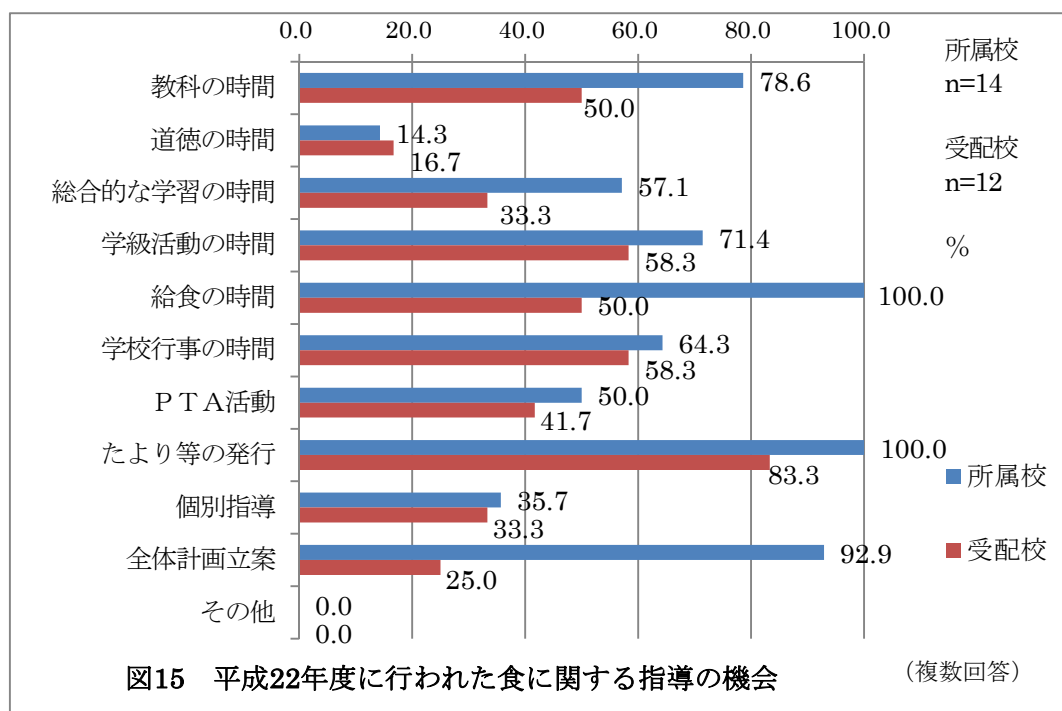
「比較的重点をおいている」が 64.3%であり、「非常に重点をおいている」と合わせると、ほとんどが重点をおいて取り組んでいた。

表 38 所属校の食に関する指導の取組状況 人 (%)

非常に重点をおいている	4 (28.5)
比較的重点をおいている	9 (64.3)
あまり重点をおいていない	1 (7.1)
取り組んでいない	0 (0.0)
合計	14 (100.0)

③所属校と受配校における平成 22 年度実施された指導

図 15 は、所属校及び受配校で 22 年度に行われた食に関する指導の機会と関わり程度についてあてはまるものを回答してください、という質問の複数回答のうち、指導の機会について示したものである。



「給食の時間」と「たより等の発行」は全ての学校で行われており、「全体計画の立案」もほとんどの学校で行われていた。受配校では「たより等の発行」が多かった。特に、「全体計画立案」と「給食の時間」において、所属校と受配校との差が大きかった。

④平成 22 年度の指導への関わりの状況（所属校と受配校）

図 16 は、上記③の回答のうち、所属校での食に関する指導へ関わりの状況を、また、図 17 は、同じく受配校での食に関する指導へのかかわりの状況を示したものである。

所属校

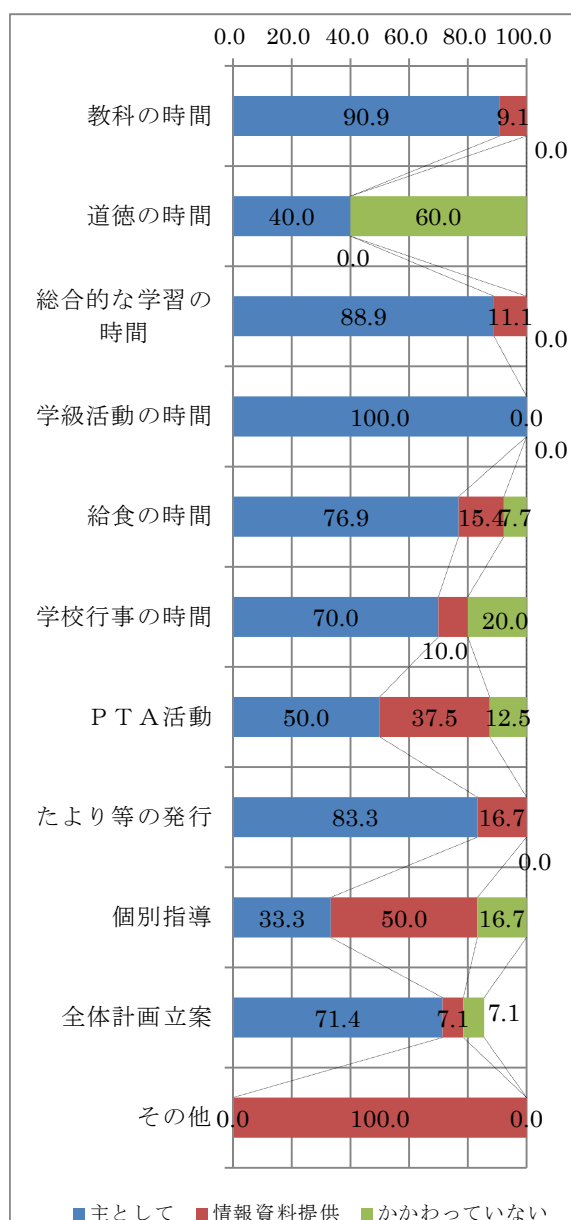


図16 所属校における
関わり方

n=13
%

受配校

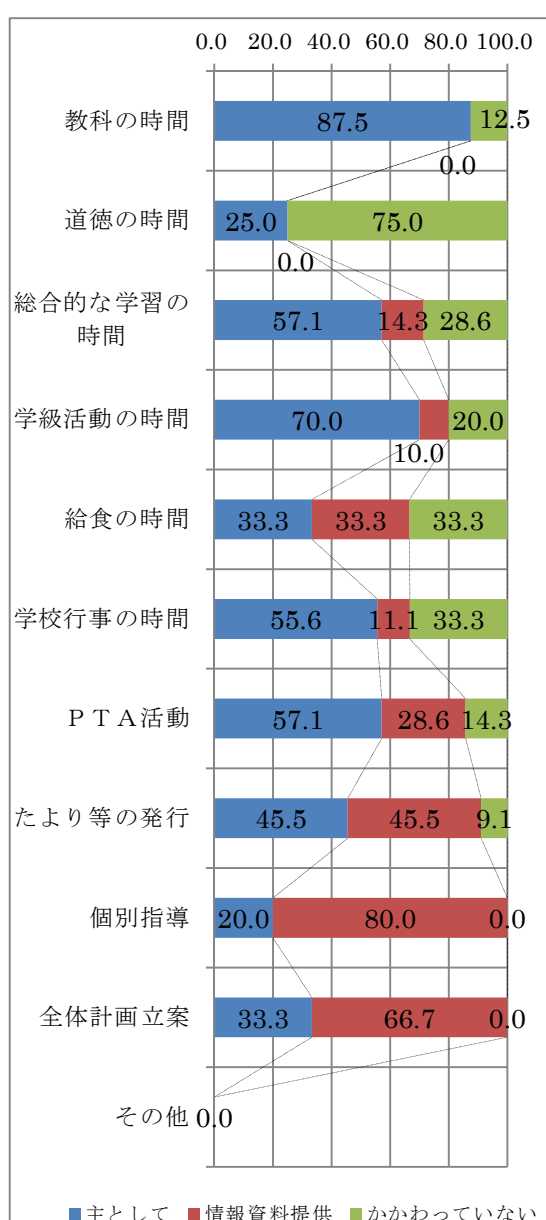


図17 受配校における
関わり方

n=12
%

P T A活動以外のすべての指導の機会において、所属校での指導へ「主としてかわる」割合が高かった。

給食の時間、たより等の発行、個別指導においては、受配校での指導では「情報や資料の提供」の割合が、所属先での指導の場合より高かった。

受配校では、教科の時間・道徳の時間・総合的な学習の時間・学級活動の時間・給食の時間・学校行事の時間において、「かかわっていない」の割合が、所属校での指導の場合より高かった。

⑤平成 22 年度の指導の実施

表 39 は、平成 22 年度に食に関する指導を行いましたか、という質問の回答である。無回答 1 名を除く全員が指導をしていた。

表 39 平成 22 年度に食に関する指導を行ったか 人 (%)

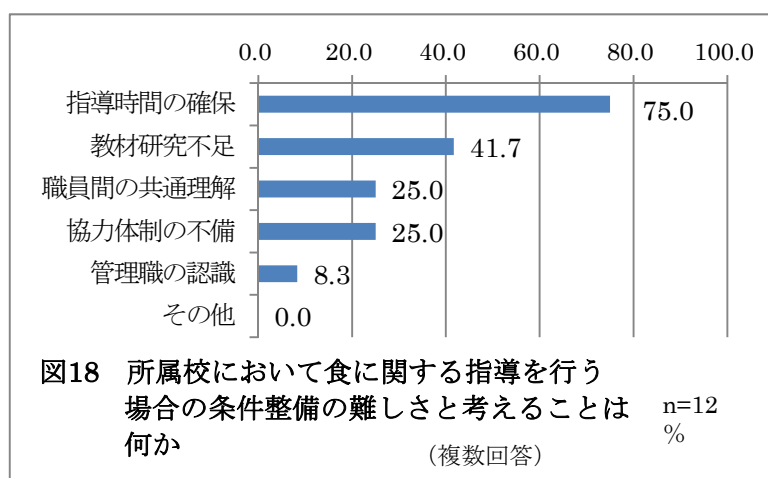
した	13 (100.0)
していない	0 (0.0)
合計	13 (100.0)

※無回答 1 名は、3 学期より臨時講師して赴任し、指導の機会がなかったため。

⑥所属校における指導を行う上での困難点

図 18 は、所属校において食に関する指導を行う場合の条件整備の難しさと考えられることは何ですか、という質問の複数回答である。

「指導時間の確保」が最も多く 75.0%、次いで「教材研究不足」41.7%であった。



⑦受配校での指導状況

表 40 は、受配校でも所属校と同じような内容で指導をしていますか、という質問の回答である。

「(所属校と) 同じようにはしていない」が 53.8% (7 人), 「ほぼ同じ」は 38.5% (5 人) であった。

表 40 受配校でも所属校と同じような内容で指導をしているか 人 (%)

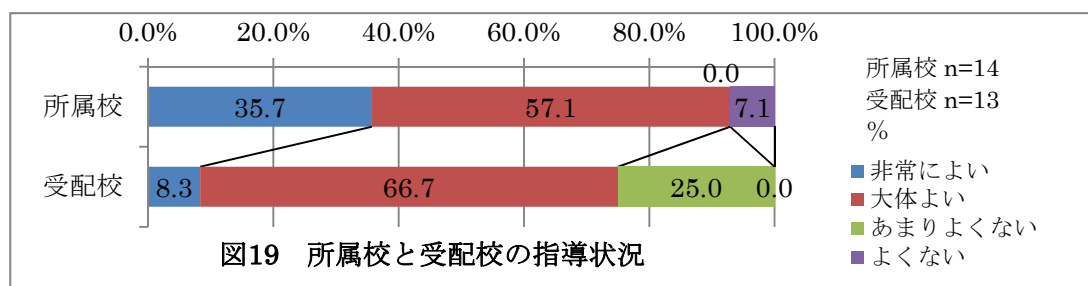
ほぼ同じ	5 (38.5)
同じようにはしていない	7 (53.8)
その他	1 (7.7)
合計	13 (100.0)

⑧所属校と受配校の指導状況

図 19 は、所属校や受配校において食に関する指導は円滑に行われていますか、という質問の回答である。

所属校においては、「非常によい」、「大体よい」を合わせると 92.9%であった。

受配校においては、「非常によい」、「大体よい」を合わせると 75.0%、「あまりよくない」が 25.0%であった。



4 食に関する指導への意識について

①これまでに関わった指導の機会と、そのうち直接指導した機会

表 41 は、これまでに関わったことのある食に関する指導の機会と、その内容をお知らせください、という質問の複数回答のうち、直接指導した機会を示したものである。

関わったことのある指導の機会としては、「給食の時間」、「学校行事の時間」、「たより等の発行」が 100.0%であり、次いで「教科の時間」、「学級活動の時間」、「総合的な学習の時間」も 85～90%以上だった。「道徳の時間」と「個別指導」は少なかった。

直接指導したことのある機会としては、「学級活動の時間」、「給食の時間」が 100.0%、次いで「教科の時間」、「たより等の発行」がいずれ 90.0%であった。こちらも「道徳の時間」と「個別指導」が少なかった。

表 41 これまでに関わったことのある指導の機会とそのうち直接指導した機会は何か 人(%)

指導の機会	これまでに関わった指導の機会 n = 14	直接指導した機会 n = 10
教科の時間	13 (92.9)	9 (90.0)
道徳の時間	2 (14.3)	1 (10.0)
総合的な学習の時間	12 (85.7)	7 (70.0)
学級活動の時間	13 (92.9)	10 (100.0)
給食の時間	14 (100.0)	10 (100.0)
学校行事の時間	14 (100.0)	7 (70.0)
PTA活動	11 (78.6)	8 (80.0)
たより等の発行	14 (100.0)	9 (90.0)
個別指導	8 (57.1)	4 (40.0)
全体計画立案	11 (78.6)	6 (60.0)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)

②これまでに指導したことのあった内容

図 20 は、上記①でこれまでに関わったことのある指導の内容のうち、直接指導した内容について示したものである。前述の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容から取り上げた項目について、これまでに指導したことがあるかを示した。

「食事の大切さ」、「規則正しい食事」、「食品に含まれる栄養」がいずれも 92.9%と高かった。アレルギーと肥満を除く「個別指導」が少なかった。

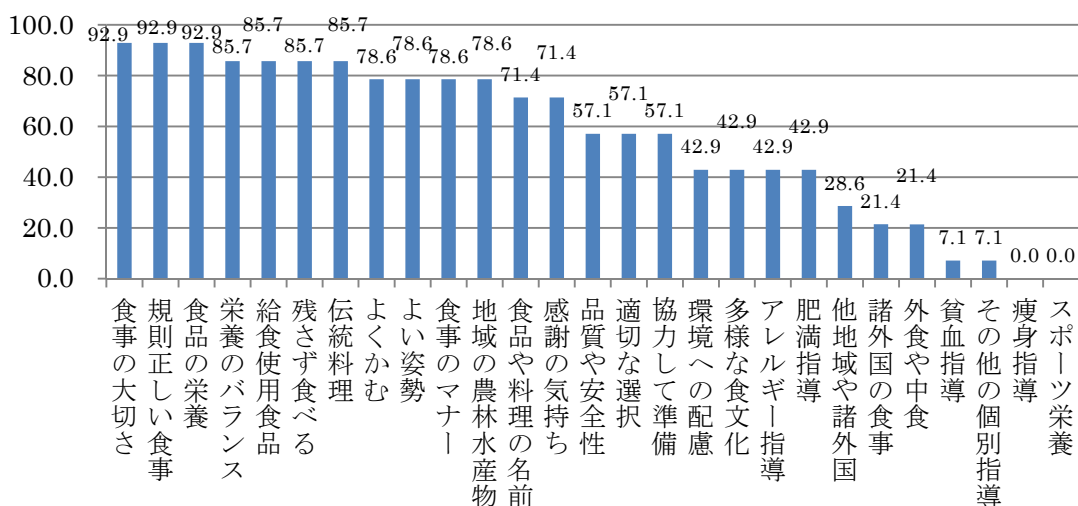


図20 これまでに関わったことのある指導内容のうち、
直接指導したものは何か
(複数回答)

n = 14
%

⑤指導の満足度

図 21 は、指導回数、指導内容、所属校の協力体制、受配校の協力体制のそれぞれについて、食に関する指導における満足度で、あてはまるものは何ですか、という質問に、4件法で回答してもらったものである。

どの項目も、「十分満足している」と「やや満足している」を合わせると高率となっている。しかし、その中で「指導内容」はやや満足度が低かった。

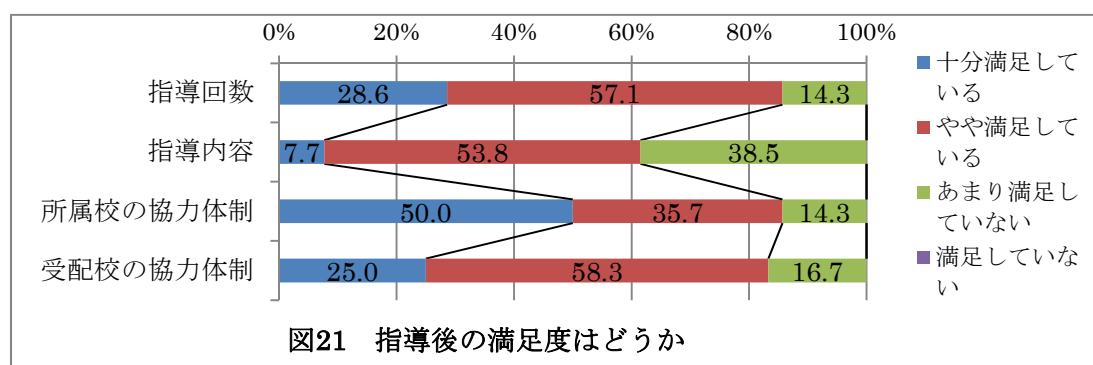


図21 指導後の満足度はどうか

③指導後の評価

表 42 は、指導した結果についてあてはまるものに○をつけてください、という質問の回答である。

全員が「良かった」と評価している。

表 42 指導した結果についてあてはまるものは何か 人 (%)

良かった	14	(100.0)
良くなかった	0	(0.0)
合計	14	(100.0)

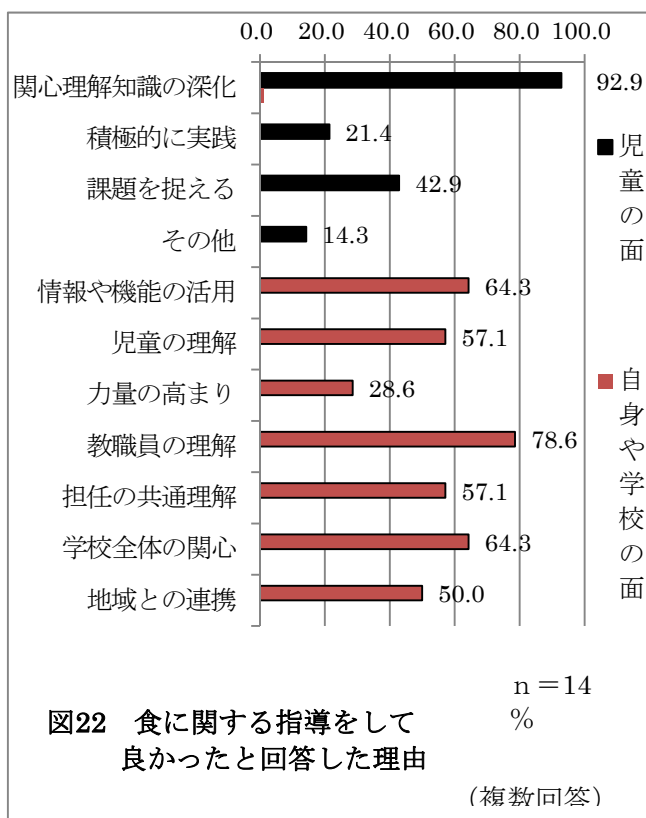
④上記③で、「良かった」と回答した理由

図 22 は、上記②の指導後の評価で、「良かった」と回答した者に、その理由をお知らせください、という質問をした複数回答である。

理由は、児童の面からと自身自身や学校全体の面から示した。

児童の面としては、「関心や理解、知識が深まった」が 92.9%と最も多かった。

栄養教諭自身や学校全体の面としては、「教職員の理解が進んだ」(78.6%)や「栄養教諭としての情報や機能が活用できた」、「学校全体の関心が高まった」(64.3%)が多かった。

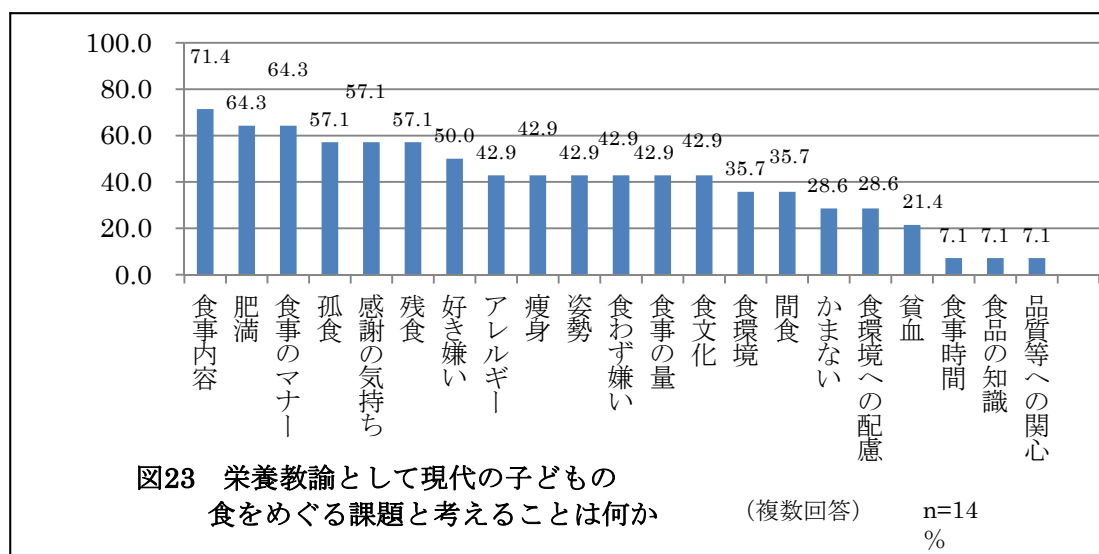


④食をめぐる課題と考えること

図 23 は、栄養教諭として現代の子どもたちの食をめぐる課題と考えることは何ですか、という質問の複数回答である。

「朝食抜き」が最も多く 78.6%，次いで「食事内容」が 71.4%，「肥満」，「食事のマナー」が 64.3%であった。

一方、少なかったのは、「食事の時間」，「食品の知識」，「品質等への関心」でいずれも 7.1%であった。



⑦食に関する指導についての課題，学校側の問題点等についての考え

表 43 は，食に関する指導についての課題や学校側の問題点と考えることをお知らせくださいという質問の自由記述に記載されたものをまとめたものである。

回答者は 10 人，記載なしは 4 人であった。14 の記述があり，3 項目に整理された。

「食に関する指導」についての課題としては，「継続的な指導が困難である」，「自己研鑽が必要である」，「教材研究や教材作りが困難である」などがあげられた。

また，学校側の問題点としては，「指導時間・打ち合わせ時間の確保が困難である」，「職員の共通理解が困難である」があげられた。「特に問題がない」もあった。

表 43 食に関する指導についての課題，学校側の問題点と考えることは何か

n = 10 () 記述数

食に関する指導についての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な指導が困難である。(2) ・自己研鑽が必要である。(授業評価，教科内容) (2) ・教材研究，教材づくり，その時間の確保が困難である。(2) ・共同調理場内の理解・協力。任せられる環境づくりが必要である。(1) ・地域との連携が困難である。(1)
学校側の問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・指導時間の確保が困難である。(2) ・打ち合わせ時間の確保が困難である。(2) ・職員との共通理解が不可欠である。(2) ・栄養教諭の職務内容が把握されていない。(1)
問題なし	<ul style="list-style-type: none"> ・全体計画や年間計画に従って計画的に行っている。(1)

5 養護教諭と栄養教諭、学校栄養職員との連携について

①養護教諭に要望したいこと

図 24 は、養護教諭に要望したいことについて、あてはまるものに○をしてください、という質問の回答である。

「共同での研究」が 25.7%（9 人）と最も多く、次いで「個別指導の充実」、「事後指導の充実」が最も少なく 8.6%（3 人）であった。

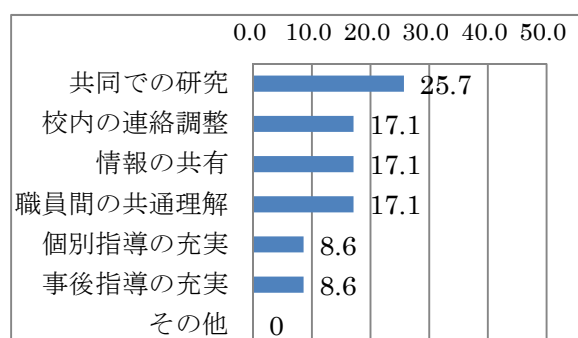


図24 養護教諭に要望したい

ことは何か

(複数回答)

n = 13
%

②養護教諭との連携の経験

表 44 は、これまでに養護教諭と連携して指導をしたことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」は 61.5%（8 人）と多かった。

一方、「ない」は 38.5%（5 人）であった。

表 44 養護教諭と連携して指導したことがあるか

	人(%)
ある	8 (61.5)
ない	5 (38.5)
合計	13 (100.0)

③上記②で、連携したことの無い理由

表 45 は、上記で②で、「連携したことがない」と答えた者に、その理由は何ですかという質問をした回答である。

選択肢の中での回答は、「連携の必要性がない」（20.0%，1 人）のみで、「その他」が 80.0%（4 人）であった。

「その他」としては、「機会がない」、「（役割が分担されており）一緒に T T となっていない」、「時間の調整が難しい」があげられた。

表 45 連携したことがない理由は何か

	人(%)
連携の必要性がない	1 (20.0)
推進担当の中心ではない	0 (0.0)
一人で実施する方がよい	0 (0.0)
その他	4 (80.0)
合計	5 (100.0)

④上記②で「ある」場合の連携の様子

表 46 は、上記②で「連携したことがある」と答えた者に、養護教諭との連携の様子はいかがでしたか、という質問をした回答である。

「十分にできている」「できていない」がそれぞれ 50.0% (4 人) で全員が連携できている状況であった。

「できていない」はなかった。

表 46 連携の様子はどうか 人 (%)

十分にできている	4	(50.0)
できている	4	(50.0)
あまりできていない	0	(0.0)
ほとんどできていない	0	(0.0)
合計	8	(100.0)

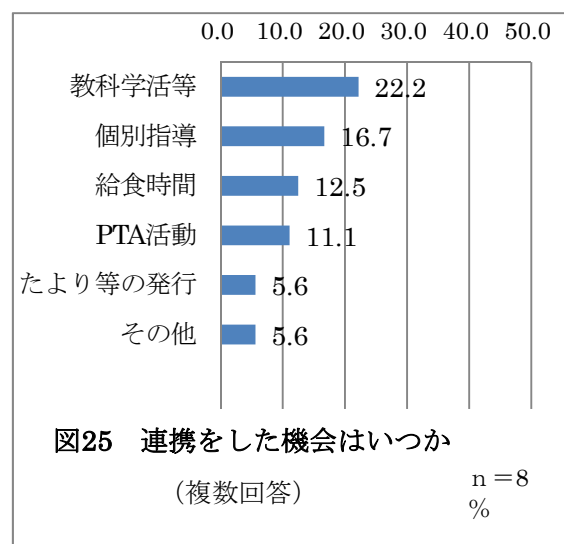
⑤上記②で「ある」と答えた者の連携の機会

図 25 は、上記②で「連携したことがある」と答えた者に、連携した機会に○をつけてください、という質問をした複数回答である。

「学校行事」が 33.3% (6 人) と最も多く、次いで「教科・学活等での指導」が 22.2% (4 人)「個別指導」(16.7%, 3 人)であった。

少なかったのは、「たより等の発行」, 「その他」(5.6%, 1 人)であった。

「その他」としては、「養護教諭部会での共同研究」があげられた。



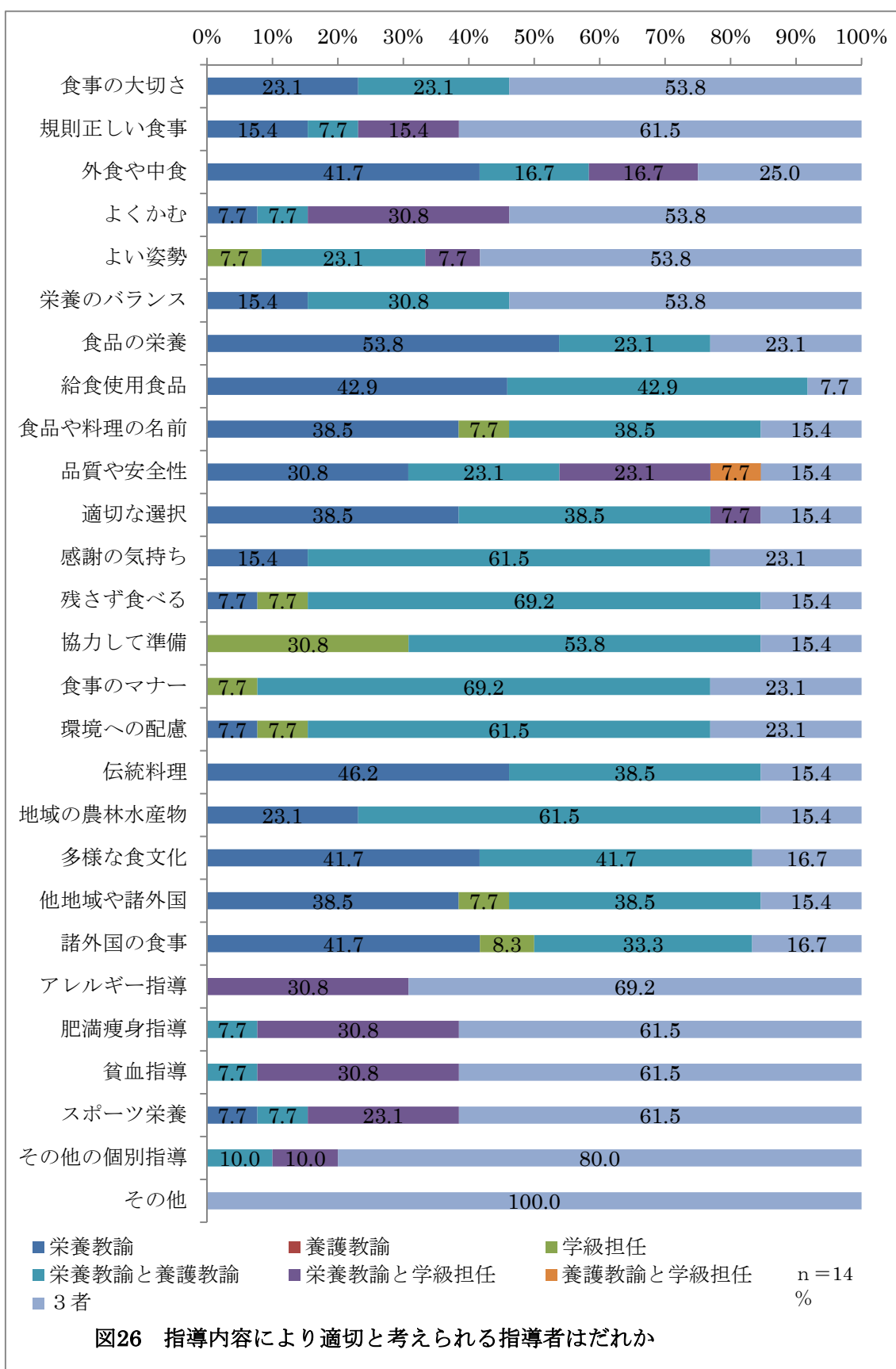
⑥指導内容により適切と考える指導者

図 26 は、「方法」で示したように、文部科学省発行の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容の項目ごとに、適当と思う指導者に○をつけてください、という質問に複数回答で答えてもらったものである。

回答は、「1 栄養教諭が」、「2 養護教諭が」、「3 学級担任が」、「4 栄養教諭と養護教諭が」、「5 栄養教諭と学級担任が」、「6 養護教諭と学級担任が」、「7 栄養教諭、養護教諭、学級担任の3者が連携して」の7つに分けて示した。

栄養教諭単独では、「食品の栄養」(53.8%), 「伝統料理」(46.2%), 「給食の食品」(42.9%) 「外食や中食」(41.7%) が多かった。

養護教諭単独で最も多かったのは、「よくかむ」、「アレルギーの個別指導」、「肥満痩身の個別指導」、「貧血の個別指導」がそれぞれ 30.8%であった。



⑦養護教諭との連携についての自由記述

表 47 は、養護教諭との連携についてのお考えをお聞かせくださいという自由記述に記載されたものをまとめたものである。回答者 13 人、記載なしは 1 人であった。13 の記述があり、2 項目に整理された。

いずれも養護教諭との連携には肯定的であり、連携のしかたでは、「健康面に関することや個別指導時や受配校で特に連携が必要である」、「情報を共有したい」という意見が多かった。

また、養護教諭との連携により、「相乗効果が期待できる」「子どものためになる」という意見があった。

表 47 養護教諭との連携についての考え

n = 13 () 記述数

連携のしかた	<ul style="list-style-type: none"> ・特に健康面に関することや、個別指導時に強い連携が必要である。(4) ・情報を共有したい。(4) ・共同で教材研究、教材づくりをしたい。(2) ・受配校において指導を推進していくために、特に連携が必要である(2) ・連絡調整の中心になってもらっている。(1) ・市町村の学校保健会活動で、共同で取り組んだ。(1)
連携の効果	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの専門性を出し合うことで相乗効果が期待できる。(1) ・「健康」を扱う職種同士、連携を持つことができれば、子どものためになる。(1)

第3節 検定結果

①栄養教諭の配置状況と食に関する指導計画の中心作成者

表 48 は、栄養教諭の配置状況と食に関する指導計画の中心作成者との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.001$)。

表 48 栄養教諭配置と食に関する指導計画の中心作成者 人 (%)

配置 \ 作成者	栄養教諭以外	
	栄養教諭	外
配置 (n=11)	9 (81.8)	2 (18.2)
未配置 (n=78)	1 (1.3)	77 (98.7)
合計 (n=89)	10 (11.2)	79 (88.8)

$p<0.001$

②栄養教職員配置と食に関する指導の取組状況

表 49 は、栄養教職員の配置状況と食に関する指導の取組状況の関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

取組状況については4段階の回答を2段階にまとめて検定を行った。

栄養教職員配置校では、食に関する指導に重点をおいて取り組んでいる傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 49 栄養教職員と食に関する指導の取組状況 人 (%)

配置 \ 取組状況	重点をおいている / そうでもない	
	重点をおいている	そうでもない
配置 (n= 23)	19 (82.6)	4 (17.4)
未配置 (n= 82)	52 (63.4)	30 (36.6)
合計 (n=105)	71 (67.6)	34 (32.4)

$p<0.1$

③養護教諭の食に関する指導の経験と食に関する指導への関心

表 50 は、食に関する指導の経験の有無と食に関する指導への関心の有無の関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 50 食に関する指導の経験と食に関する指導への関心 人 (%)

指導経験 \ 関心	ある / ない	
	ある	ない
ある (n= 90)	87 (96.7)	3 (3.3)
ない (n= 13)	10 (76.9)	3 (23.1)
合計 (n=103)	97 (94.2)	6 (5.8)

$p<0.05$

④在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施

表 51 は、在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 51 在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施 人 (%)

児童数	指導実施	
	した	しない
100 人未満 (n= 33)	30 (90. 9)	3 (9. 1)
100~300 人未満 (n= 30)	20 (66. 7)	10 (33. 3)
300 人以上 (n= 39)	22 (56. 4)	17 (43. 6)
合計 (n=102)	72 (70. 6)	30 (29. 4)

$p < 0.05$

⑤食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施

表 52 は、食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

取組状況については 4 段階の回答を 2 段階にまとめて検定を行った。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 52 食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施 人 (%)

取組状況	指導実施	
	した	しない
重点をおいている (n= 67)	53 (79. 1)	14 (20. 9)
そうでもない (n= 33)	17 (51. 5)	16 (48. 5)
合計 (n=100)	70 (70. 0)	30 (30. 0)

$p < 0.05$

⑥養護教諭が力を入れている保健指導内容と食に関する指導への関心

表 53 は、養護教諭が、保健指導内容の中で食に関することに力を入れているかどうかと、食に関する指導への関心との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

「食に関すること」を力を入れている保健指導内容の 1 番目から 3 番目までに選択した者を対象とした。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

力を入れている保健指導内容に「食に関すること」を選択した者は、食に関する指導への関心が高い傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 53 養護教諭の力を入れている保健指導内容と食に関する指導への関心 人 (%)

食に関すること	関心	
	ある	ない
力を入れている (n= 55)	54 (98. 2)	1 (1. 8)
そうでもない (n= 48)	43 (89. 6)	5 (10. 4)
合計 (n=103)	97 (94. 2)	6 (5. 8)

$p < 0.1$

⑦養護教諭が力を入れている保健指導内容と栄養教諭の配置状況

表 54 は、養護教諭が、保健指導内容の中で食に関することに力を入れているかどうかと、養護教諭現任校への栄養教諭の配置との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

「食に関すること」を力を入れている保健指導内容の 1 番目から 3 番目までに選択した者を対象とした。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

力を入れている保健指導内容に「食に関すること」を選択した者は、現任校に栄養教諭が配置されている傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 54 養護教諭の力を入れている保健指導内容と栄養教諭の配置 人 (%)

食に関すること 栄養教諭	配置	
	配置	未配置
力を入れている (n= 56)	3 (5.4)	53 (94.6)
そうでもない (n= 48)	8 (16.7)	40 (83.3)
合計 (n=104)	11 (10.6)	93 (89.4)

$p < 0.1$

⑧現任校または給食センターへの栄養教職員の配置と養護教諭と栄養教職員との連携

表 55 は、養護教諭の現任校または給食センターへの栄養教職員の配置と、養護教諭と栄養教職員との連携保健学習担当との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 55 栄養教職員の配置と養護教諭と栄養教職員との連携 人 (%)

配置状況 連携	したことが	
	ある	ない
配置されている (n=102)	85 (83.3)	17 (16.7)
配置されていない (n= 5)	1 (20.0)	4 (80.0)
合計 (n=107)	86 (80.4)	21 (19.6)

$p < 0.05$

第 3 章 結 果

以下、質問紙調査の結果について述べる。

第 1 節 養護教諭

1 回答者の属性

①現任校の栄養教諭の配置状況

表 5 は、現任校に栄養教諭が配置されていますか、という質問の回答である。

配置されている小学校での勤務者は 10.3 % (11 人)、配置されていない小学校での勤務者は 89.7% (96 人) であった。

表 5 栄養教諭が配置されているか
人 (%)

配置されている	96 (89.7)
配置されていない	11 (10.3)
合計	107 (100.0)

②職名

表 6 は、職名をお知らせくださいという質問の回答である。

養護教諭は 91.6% (98 人)、養護助教諭は 8.4% (9 人) であった。

表 6 職名
人 (%)

養護教諭	98 (91.6)
養護助教諭	9 (28.4)
合計	107 (100.0)

③年齢分布

表 7 は、年齢をお知らせください、という質問の回答である。

50 代が最も多く、57.0% (61 人) であった。

表 7 年齢分布
人 (%)

20 代	99 (8.4)
30 代	14 (13.1)
40 代	23 (21.5)
50 代	61 (57.0)
合計	107 (100.0)

④養護教諭関連の所持免許状

表 8 は、所持免許状についてお知らせください、という質問に対しての複数回答のうち、養護教諭の免許状について示したものである。

1 種免許状が最も多く、91.6% (98 人) であった。

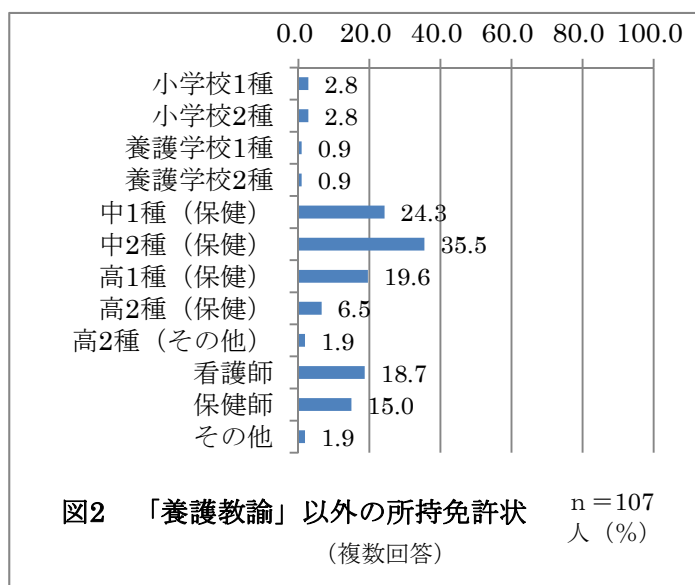
表 8 「養護教諭」の所持免許状
人 (%)

養護教諭専修	2 (1.9)
養護教諭 1 種	98 (91.6)
養護教諭 2 種	7 (6.5)
合計	107 (100.0)

⑤その他の所持免許状

図2は、上記④の回答のうち、養護教諭以外の免許状をお知らせください、という質問に対しての複数回答である。

教員免許状では、「保健」の中学校2種免許状が最も多く、1種も含めた中学校保健の免許状所持者は59.8%、高等学校保健の免許状所持者は26.1%であった。



⑥教職経験年数

表9は、経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

31年目以上が43.9% (47人) と最も多く、次いで21～30年目が20.6% (22人) であった。

1年目の者はいなかった。

表9 教職経験年数 人 (%)

1年目	0 (0.0)
2～5年目	10 (9.3)
6～10年目	12 (11.2)
11～20年目	16 (15.0)
21～30年目	22 (20.6)
31年目以上	47 (43.9)
合計	107 (100.0)

⑦現任校勤務年数

表10は、現任校の勤務年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～5年目が64.5% (69人) と半数以上であった。

表10 現任校勤務年数 人 (%)

1年目	20 (18.7)
2～5年目	69 (64.5)
6～10年目	18 (16.8)
合計	107 (100.0)

⑧保健主事の兼務状況

表11は、保健主事を兼務しているかお知らせください、という質問の回答である。

「兼務していない」が60.7% (65人) で半数以上を占め、「兼務している」より多かった。

表11 保健主事の兼務状況 人 (%)

兼務している	42 (39.3)
兼務していない	65 (60.7)
合計	107 (100.0)

⑨保健学習の担当状況

表 12 は、保健学習を担当しているかお知らせください、という質問の回答である。

「担当していない」が 89.7%（96 人）と圧倒的に多かった。

表 12 保健学習の担当状況 人 (%)

担当している	11 (10.3)
担当していない	96 (89.7)
合計	107 (100.0)

⑩養護教諭配置状況

表 13 は、現任校における養護教諭の配置状況についてお知らせください、という質問の回答である。

ほとんどが「単数配置」であり（96.3%，103 人），「複数配置」は 3.7%（4 人）であった。

表 13 養護教諭配置状況 人 (%)

単数配置	103 (96.3)
複数配置	
養護教諭 2 名	2 (1.9)
養護教諭と養護助教諭	2 (1.9)
合計	107 (100.0)

⑪現任校の児童数

表 14 は、現任校の在籍児童数についてお知らせください、という質問の回答である。

100 人～300 人未満が 33.6%（36 人）と最も多く、次いで 300 人～700 人未満が 26.2%（28 人）であった。

規模別にみると、300 人未満の小規模校が 68.2%と半数以上であった。

表 14 在籍児童数 人 (%)

50 人未満	13 (12.1)
50～100 人未満	24 (22.4)
100 人～300 人未満	36 (33.6)
300 人～700 人未満	28 (6.2)
700 人以上	6 (5.6)
合計	107 (100.0)

2 回答者の現任校の給食の状況

①給食形態

表 15 は、給食の実施状況についてお知らせください、という質問の回答である。

パンまたは米飯、おかず、ミルクが提供される「完全給食」が圧倒的に多く、95.3%（102 校）であった。給食を実施していない学校も 2 校あった。

表 15 現任校の給食実施状況 人 (%)

完全給食	102 (95.3)
補食給食	0 (0.0)
ミルク給食	3 (2.8)
実施していない	2 (1.9)
合計	107 (100.0)

②給食配食方式

表 16 は、上記①で「完全給食」と回答した場合、給食の形態についてお知らせください、という質問の回答である。

センター式給食が多く 85.7% (84 校) であった。

表 16 養護教諭現任校の給食配食方式
人 (%)

自校給食	14	(14.3)
センター式給食	84	(85.7)
合計	98	(100.0)

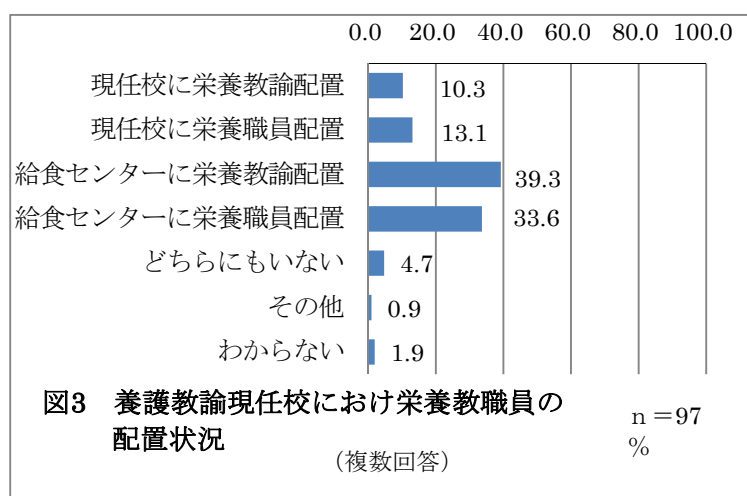
③回答者の現任校における栄養教諭・学校栄養職員の配置状況

図 3 は、栄養教諭または学校栄養職員（本論文中においては以下、栄養教職員と記す。）が配置されていますか、という質問の複数回答である。

現任校では、「学校栄養職員が配置されている」(13.1%)、給食センターでは、「栄養教諭が配置されている」(39.3%) が多かった。

栄養教職員が現任校に在籍しているが、同時に給食センターにも配置されている場合もあった。

「どちらにもいない」が 4.7%、「わからない」が 1.9%であった。



3 回答者の現任校における食に関する指導の状況

①食に関する指導の全体計画

表 17 は、食に関する指導の全体計画はありますか、という質問の回答である。

「ある」が 87.7% (93 人)、「ない」が 12.3% (13 人) だった。

表 17 食に関する指導の全体計画は
あるか 人 (%)

ある	93	(87.7)
ない	13	(12.3)
合計	106	(100.0)

②食に関する指導の全体計画の中心作成者

表 18 は、食に関する指導の全体計画を、実際に中心となって作成したのはどなたですか、という質問の回答である。保健主事兼務の場合は、保健主事と養護教諭のどちらの立場で作成したかを回答してもらった。

「養護教諭」が最も多く 37.1% (33 人) で、次いで「保健部所属の職員」19.1% (17 人)、「保健主事」14.5% (13 人) であった。

表 18 食に関する指導の全体計画の中心作成者はだれか 人 (%)

養護教諭	33 (37.1)
保健部所属の職員	17 (19.1)
保健主事	13 (14.6)
栄養教諭	10 (11.2)
学校栄養職員	4 (4.5)
その他	12 (13.5)
合計	89 (100.0)

③上記②で、「養護教諭」以外と回答した者の関わり方

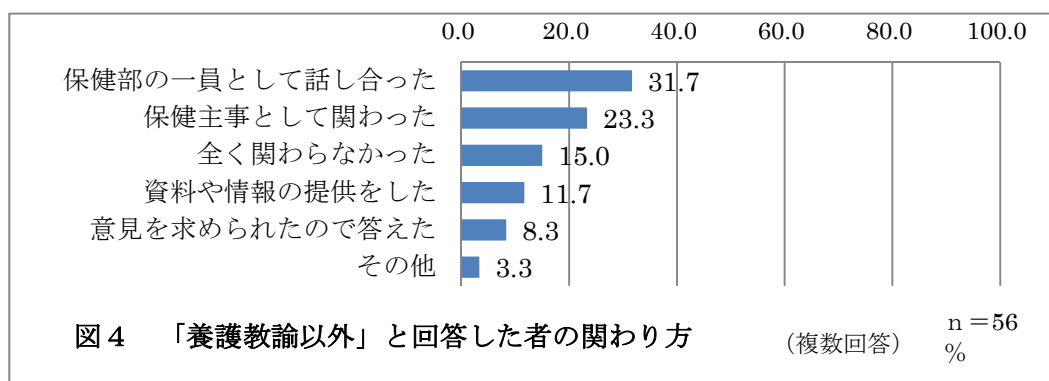


図 4 は、上記②で「養護教諭」以外と回答した者に、養護教諭はどの程度関わりましたか、という質問をした複数回答である。

「保健部の一員として話し合った」のが 31.7% (19 人)、「保健主事として関わった」のは 23.3% (14 人) であった。

④食に関する指導の研究推進校指定の有無 (平成 17 年度以降)

表 19 は、現任校は食に関する指導に関連する推進校・研究指定校の指定を受けたことがありますか、という質問の回答である。

研究推進校の指定を、栄養教諭制度が導入された平成 17 年度以降に受けたことが「ない」が 82.9% (87 人) であった。

表 19 食に関する指導に関連する推進校・研究推進校の指定を受けたか 人 (%)

ある	8 (7.6)
ない	87 (82.9)
わからない	10 (9.5)
合計	105 (100.0)

⑤食に関する指導への取組状況

表 20 は、現任校の食に関する指導への取組状況はいかがですか、という質問の回答である。

「比較的重点をおいている」と答えた者が最も多く、56.2%（59 人）であった。

「非常に重点をおいている」（11.4%，12 人）と合わせると 60%以上が重点をおいて取り組んでいる。「あまり重点をおいていない」は 32.4%（34 人）であったが、「取り組んでいない」はなかった。

表 20 食に関する指導への取組状況

	人(%)	
非常に重点をおいている	12	(11.4)
比較的重点をおいている	59	(56.2)
あまり重点をおいていない	34	(32.4)
取り組んでいない	0	(0.0)
合計	105	(100.0)

⑥平成 22 年度の「食に関する指導」実施状況

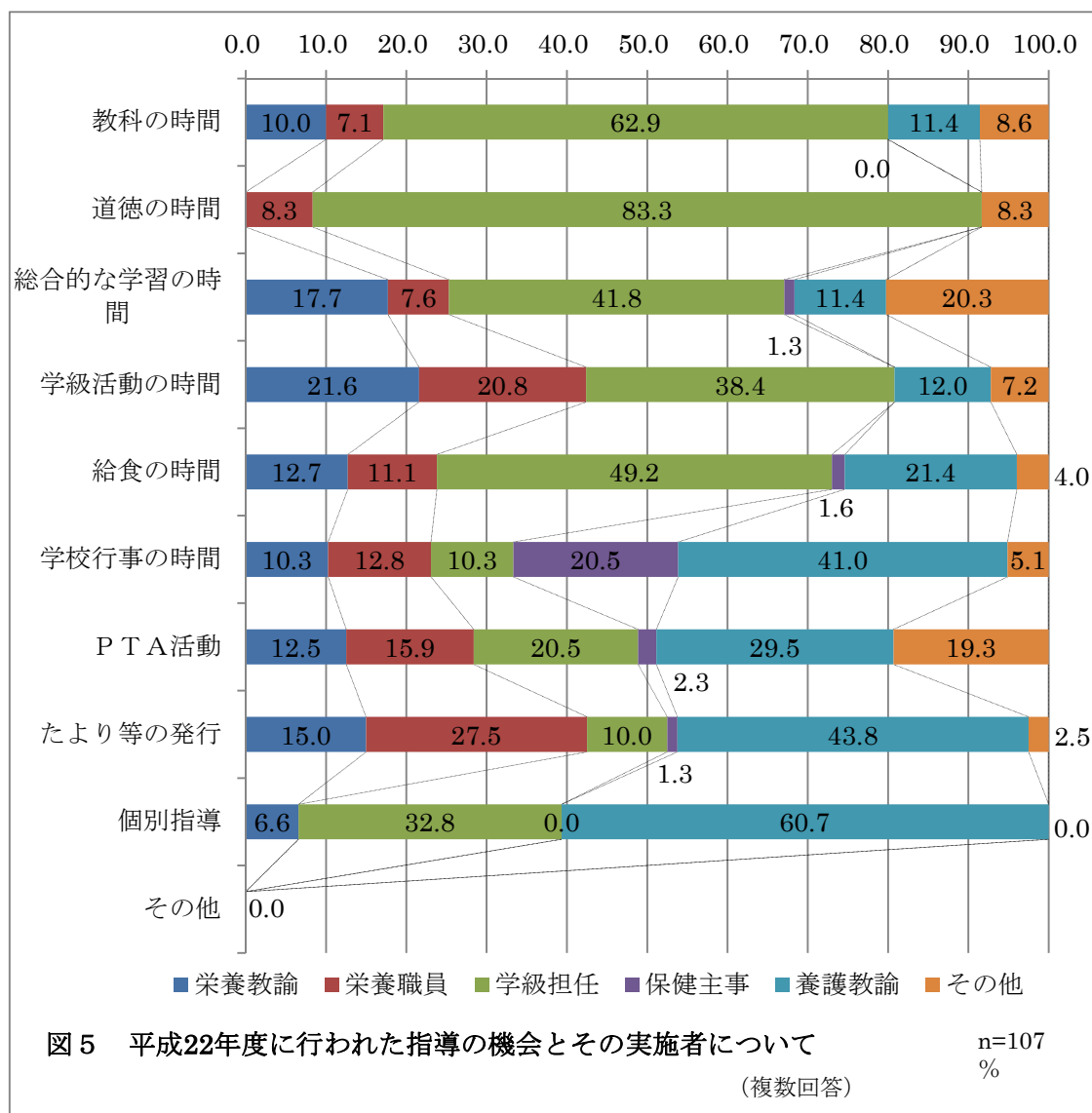


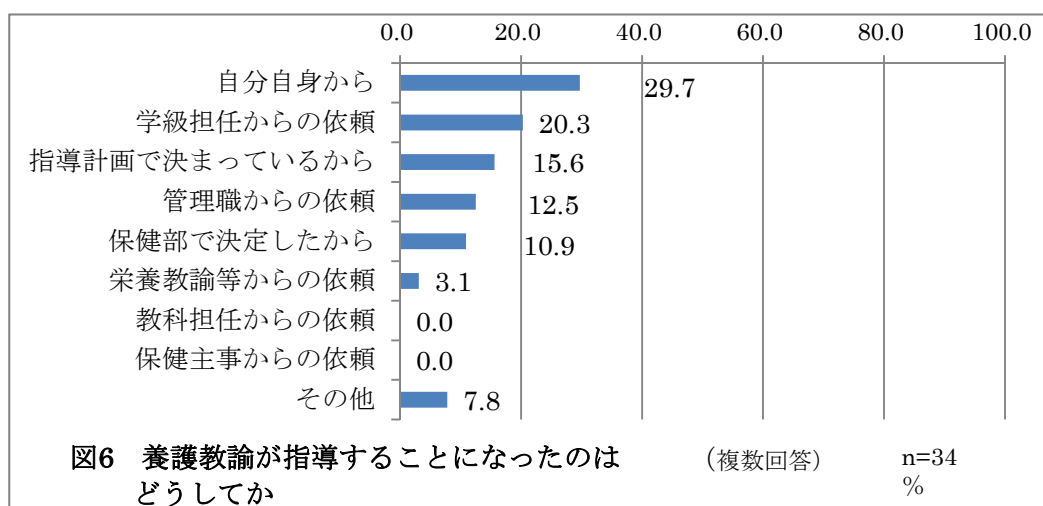
図 5 は、平成 22 年度に行われた指導の機会とその実施者に○をつけてください、という質問の複数回答である。

「教科」、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「学級活動」、「給食」の各時間の指導は学級担任が担当する割合が最も多く、「学校行事」、「PTA 活動」、「たより等の発行」、「個別指導」は養護教諭が担当する割合がどの項目でも最多であった。これらは、栄養教諭と学校栄養職員が担当する割合を合計しても、養護教諭の方が多かった。特に、個別指導では、養護教諭が担当した割合は 60.7% と高率であった

⑦養護教諭として関わった経緯

図 6 は、上記⑥の指導状況のうち、「教科」、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「学級活動」、「給食」の各時間で養護教諭が指導することになったのはどうしてですか、という質問に対しての複数回答である。

「自分自身から」が最も多く、29.7%（19 人）であった。学級担任や管理職等からの依頼により関わっている場合も多く、合わせて 32.8% あった。



4 食に関する指導への意識について

①力を入れている保健指導の内容

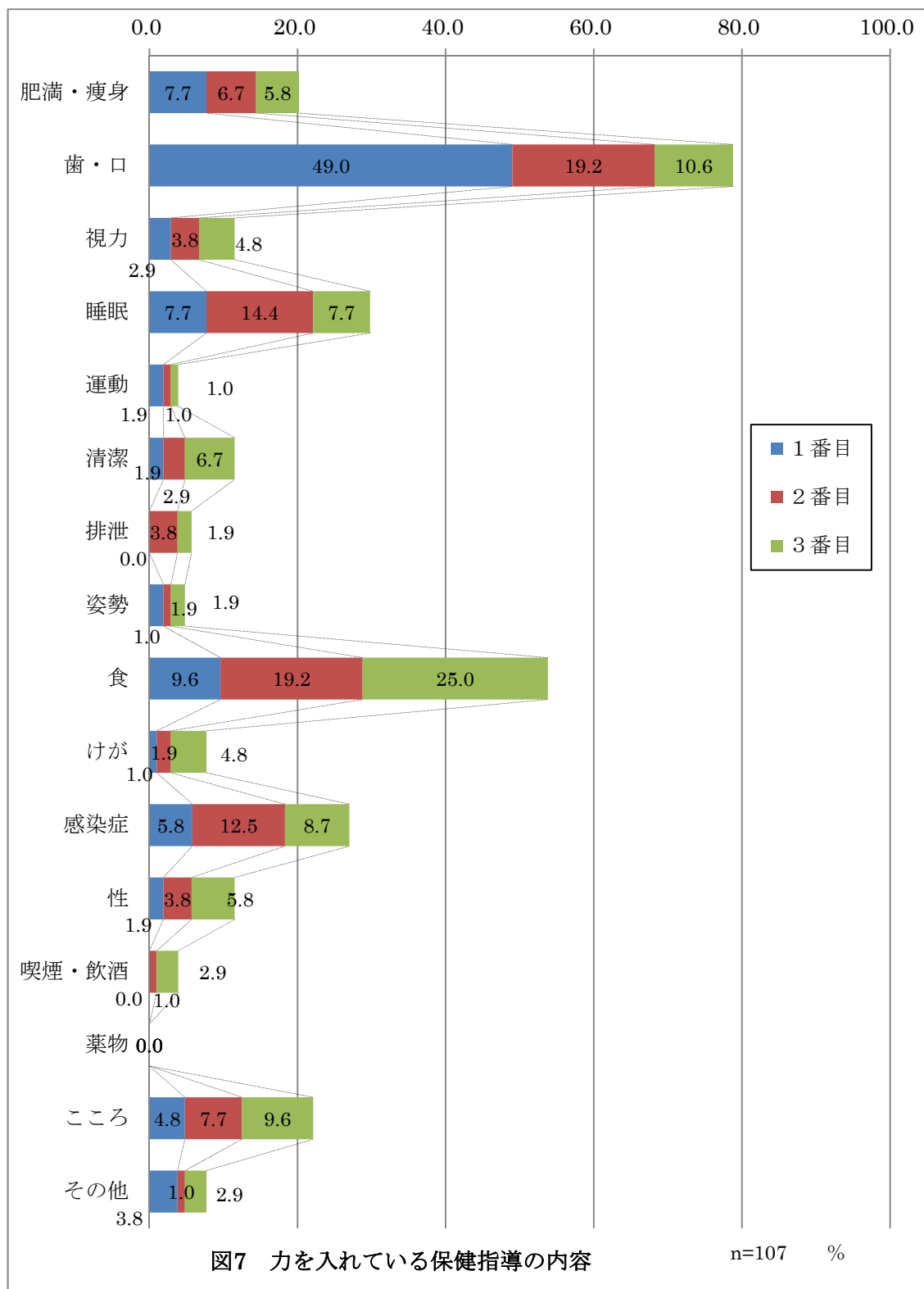
図 7 は、回答者が力を入れている保健指導の内容を、力を入れている順番に 3 つあげたものである。

全体としては、「歯・口に関すること」が最も多く、78.8%であった。次いで「食に関すること」53.8%、「睡眠に関すること」29.8%、「感染症」27.0%の順に多かった。

力を入れている順番の 1 番目にあげられている内容は、「歯・口に関すること」(49.0%) が圧倒的に多く、次いで「食に関すること」(9.6%)、「肥満・痩身」、「睡眠」(いずれも 7.7%) の順であった。2 番目にあげられている内容は、「歯・口に関すること」、「食に関

すること」（いずれも 19.2%）が同数で最も多く、次いで「睡眠」（14.4%）であった。

3 番目にあげられている内容は、「食に関すること」（25.0%）が最も多く、次いで「歯・口に関すること」（10.6%）, 「こころに関すること」（9.6%）であった。



②食に関する指導への関心

表 21 は、ご自身の食育や食に関する指導への関心はいかがですか、という質問の回答である。

「ある」が 71.8% (74 人) と最も多く、「非常にある」と合わせると、90%以上を占めた。

表 21 食に関する指導への関心人 (%)

非常にある	23	(22.3)
ある	74	(71.8)
あまりない	6	(5.8)
ほとんどない	0	(0.0)
合計	103	(100.0)

③食に関する指導の指導経験

表 22 は、これまでに資料や情報の提供を含めて、食に関する指導を行ったことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」が 87.5% (91 人) と多くを占めていた。

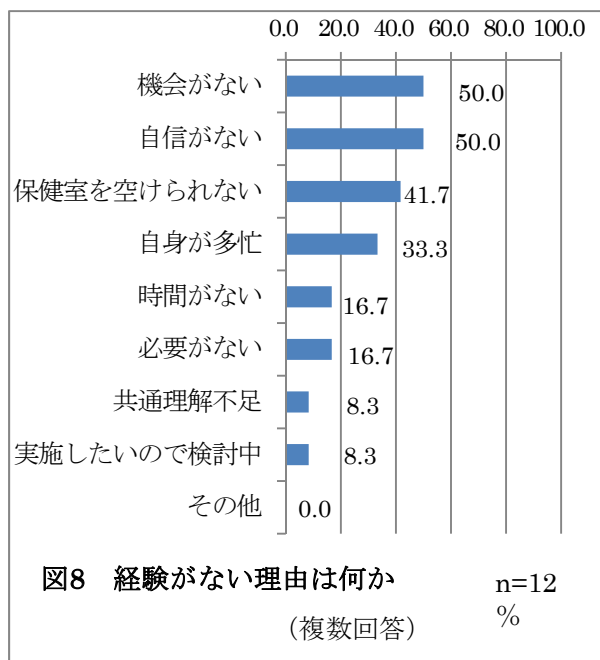
表 22 これまでに資料や情報の提供を含めて、食に関する指導を行ったことがあるか 人 (%)

ある	91	(87.5)
ない	13	(12.5)
合計	104	(100.0)

④上記③で、指導をしなかった理由

図 8 は、上記③で経験がないと答えた者に対して、その理由は何ですか、という質問の複数回答である。

「(指導の) 機会がない」、「(指導に対して) 自信がない」がそれぞれ 50.0% と最も多く、次いで、「保健室を空けられない」41.7%、「多忙」33.3%であった。



⑤これまでに関わった指導の機会の有無と、直接指導した機会

表 23 は、これまでに関わったことのある指導の機会と内容について○をつけてください、という質問を複数回答で回答してもらったうち、指導をした経験と、そのうち回答者が直接指導した機会を示したものである。

指導したことがある機会としては、「学級活動の時間」(64.6%, 62 人)、「たより等の発行」(63.5%, 61 人) が最も多く、次いで「学校行事の時間」(59.4%, 57 人)、「給食の時間」(53.1%, 51 人) が多かった。少なかったのは「道徳の時間」で 3.1% (3 人)

であった。

指導したことがある機
会のうち、直接指導した
機会としては、「個別指導」
(60.0%, 42 人), 「たよ
り等の発行」(54.3%, 38
人), 「学級活動の時間」
(52.9%, 37 人) が多か
った。

少なかったのは, 「道徳
の時間」で 2.9% (2 人)
であった。

表 23 これまでに関わったことのある指導の機会と,
そのうち直接指導した機会 n=107 人(%)

指導の機会	これまでに関わった指導の機会	直接指導した機会
教科の時間	20 (20.8)	14 (20.0)
道徳の時間	3 (3.1)	2 (2.9)
総合的な学習の時間	22 (22.9)	12 (17.1)
学級活動の時間	62 (64.6)	37 (52.9)
給食の時間	51 (53.1)	32 (45.7)
学校行事の時間	57 (59.4)	33 (47.1)
PTA活動	20 (20.8)	9 (12.9)
たより等の発行	61 (63.5)	38 (54.3)
個別指導	52 (54.2)	42 (60.0)
全体計画立案	37 (38.5)	26 (37.1)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)

⑥指導後の評価

表 24 は, 指導後のご自身の評価はいか
がでしたか, という質問の回答である。

「良かった」は 87.9% (88 人) だった。

「良くも悪くもない」は 9.9% (9 人),

「良くなかった」は 2.2% (2 人) だった。

表 24 指導後の評価はどうか 人 (%)

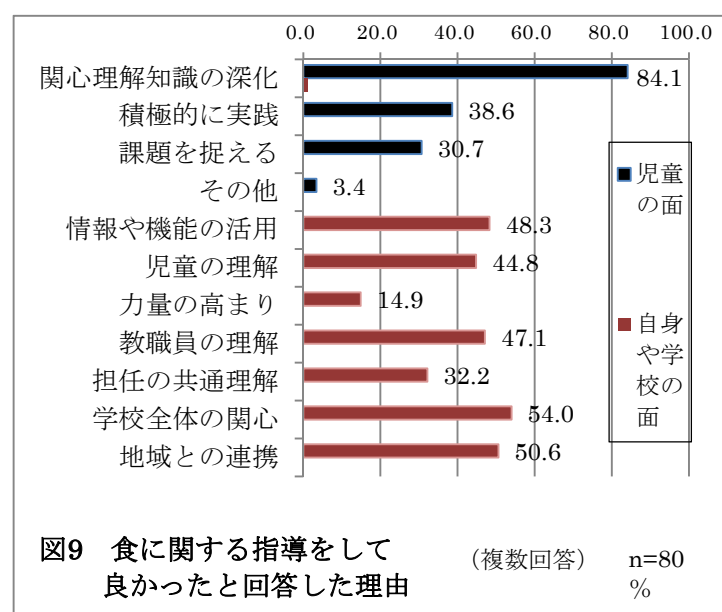
良かった	80 (87.9)
良くも悪くもない	9 (9.9)
良くなかった	2 (2.2)
合計	91 (100.0)

⑦上記⑥で, 「良かった」と回答した理由

図 9 は, 上記⑥の指導
後の評価で, 「良かった」
と回答した者へ, その理
由をお知らせください,
という質問をした複数回
答である。

理由は, 児童の面から
と自分自身や学校全体の
面から示した。

児童の面としては, 「関
心や理解, 知識が深まっ
た」が 84.1%と最も多か



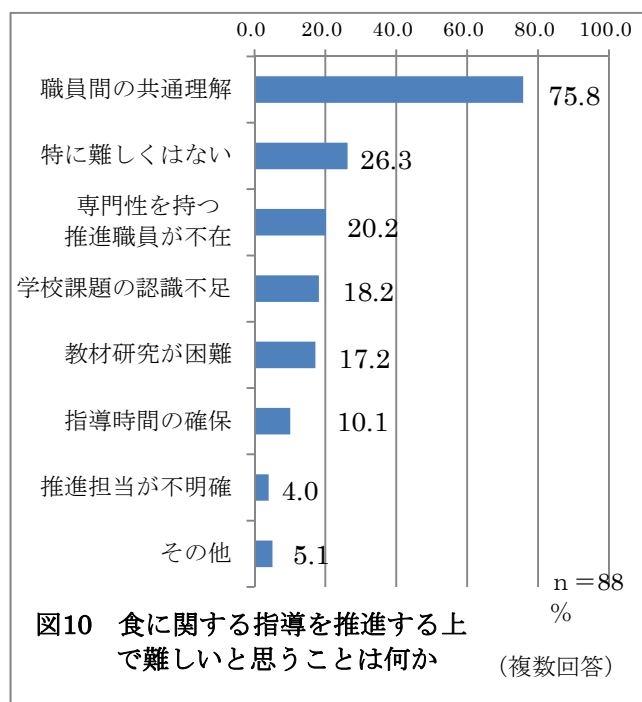
った。

養護教諭自身や学校全体の面としては、「学校全体の関心が高まった」(54.0%)や「地域との連携が深まった」(50.6%),「養護教諭としての情報や機能が活用できた」(48.3%),「教職員の理解が深まった」(47.1%),「児童の理解が深まった」(44.8%)が多かった。

⑧食に関する指導の指導上の困難点

図10は、食に関する指導を推進する上で、難しいと思われることは何ですか、という質問の複数回答である。

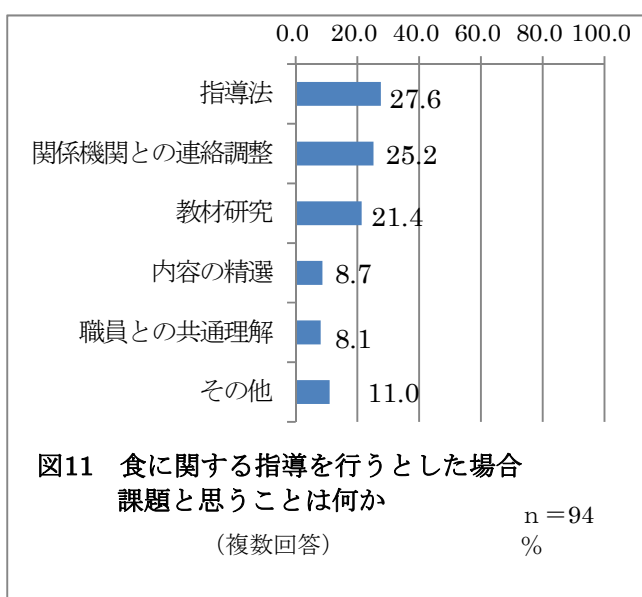
「職員間の共通理解」が最も多く75.8%であった。「専門性を持つ推進職員が不在」(20.2%),「学校課題の認識不足」(18.2%),「教材研究が困難」(17.2%)などがあげられたが、「特に難しくはない」が26.3%と全体の1/4を占めた。



⑨食に関する指導についての自身の課題

図11は、食に関する指導を行うとした場合、課題と思うことは何ですか、という質問の複数回答である。

「指導法」(27.6%),「関係機関との連絡調整」(25.2%),「教材研究」(21.4%)が多かった。



⑨回答者の食に関する指導への意見および感想

表 24 は、食に関する指導について、養護教諭としてどのように関わっていけばよいと思われるか、また、食に関する指導についてのお考えなどをお知らせください、という自由記述に記載されたものをまとめたものである。

107 人のうち回答者は 86 人、記載なしは 21 人であった。92 の記述があり、19 の項目に整理された。「特になし」は 1 人であった。

19 の項目は「肯定的」、「どちらかという肯定的」、「肯定的ではない」に分類した。

肯定的な記述は 13 項目で、「養護教諭の専門性を生かした指導をしていきたい」、「担任、栄養士や栄養教諭と連携してかかわってきたい」、「コーディネーター、または推進役、リーダーとしてかかわってきたい」が多かった。

どちらかという意欲的な記述は 4 項目で、「家庭との連携が難しい」、「校内体制により関わり方が異なると思う」が多かった。

肯定的ではない記述は 2 項目で、「積極的に関わることだと思うが、現実的には無理がある」、「関わりを減らしていきたい」という意見があった。

表 24 食に関する指導に養護教諭としてどのように関わっていけばよいと思うか、また食に関する指導についての考え n=107 () 記述数

肯定的	<ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭の専門性を生かした指導をしていきたい。(11) ・担任と連携して関わってきたい。(10) ・栄養士や栄養教諭と連携して関わってきたい。(10) ・養護教諭は、コーディネーター、または推進役、リーダーとして関わってきたい。(9) ・担任への資料の提供を行いたい。(6) ・自己研鑽を積極的にして関わる必要性を感じる。(4) ・体制作りを行いたい。(4) ・関係機関と連携して、関わってきたい。(4) ・現在の給食指導を有効に活用してきたい。(3) ・将来の生きる力につなげる指導をしてきたい。(2) ・委員会活動を通した指導をしてきたい。(2) ・必要な指導だと思う。(2) ・自校の児童の実態を把握する必要がある。(1)
どちらかと言うと肯定的	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との連携が難しいと思う。(9) ・校内体制により、関わり方が異なると思う。(3) ・栄養教諭の指導を期待する。(2) ・できることからやっていく。(2)
肯定的ではない	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に関わることだと思うが、現実的には無理がある。(1) ・関わりを減らしていきたい。(1)

5 養護教諭と栄養教諭・学校栄養職員との連携について

①栄養教職員との連携の経験

表 25 は、これまでに栄養教職員と連携したことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」は 80.4% (86 人) と高率であった。一方、「ない」は 19.6% (21 人) であった。

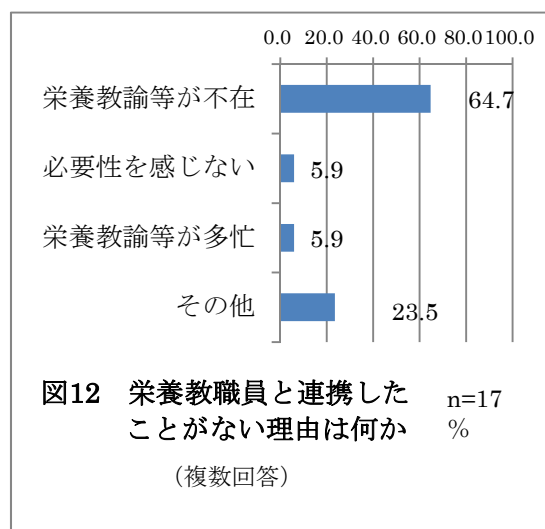
表 25 これまでに栄養教職員と連携したことがあるか 人 (%)

ある	86	(80.4)
ない	21	(19.6)
合計	107	(100.0)

②上記①で、連携したことがない理由

図 21 は、上記①で「連携したことがない」と回答した者にその理由は何ですか、という質問をした複数回答である。

「栄養教諭や学校栄養職員が不在」が最も多く、64.7%であった。



③上記①で、「ある」場合の連携の様子

表 26 は、上記①で「連携したことがある」と回答した者に、栄養教職員との連携の様子はいかがですか、という質問をした回答である。

「できている」が最も多く 59.3% (48 人) であった。「十分にできている」を合わせると、79.0% (64 人) と高率であった。一方、「あまりできていない」、「ほとんどできていない」は合わせて 21.0% であった。

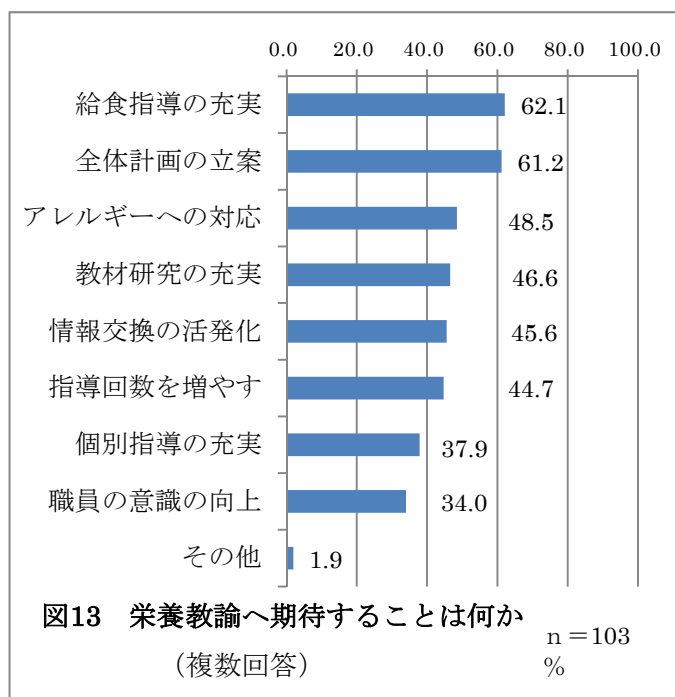
表 26 栄養教職員との連携はどうか 人 (%)

十分にできている	16	(19.8)
できている	48	(59.3)
あまりできていない	16	(19.8)
ほとんどできていない	1	(1.2)
合計	81	(100.0)

④栄養教諭へ期待すること

図 13 は、栄養教諭制度が始まっていることにより、栄養教諭へ期待することは何ですか、という質問の回答である。

「給食指導の充実」が62.1%、「食に関する指導の全体計画の立案」が61.2%、次いで、「アレルギーへの対応」48.5%、「教材研究の充実」46.6%、「情報交換の活発化」45.6%、「指導回数を増やす」が44.7%であった。



⑤指導内容による適切と考える指導者

図14は、「方法」で示したように、文部科学省発行の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容の項目ごとに、適切と思う指導者に○をつけてください、という質問の回答である。

回答は、「1 養護教諭が」、「2 栄養教諭が」、「3 学級担任や他の専門家が」、「4 養護教諭と栄養教諭が連携して」、「5 栄養教諭と学級担任や他の専門家が連携して」、「6 養護教諭と学級担任や他の専門家が連携して」、「7 養護教諭、栄養教諭、学級担任や他の専門家の3者が連携して」の7つに分けて示した。

「アレルギーの個別指導」などの個別指導については、養護教諭単独または栄養教諭や学級担任と連携しての指導が適切という回答が多数を占めた。「規則正しい食事」、「よくかむ」、「正しい姿勢」についても同様に多かった。

「給食の食品」、「食品や料理の名前」、「品質等への関心」では、栄養教諭が半数以上を占め、「食品の適切な選択」、「伝統料理」でも多かった。

「協力しての準備」、「食事のマナー」、「感謝の気持ち」では、学級担任が多かった。

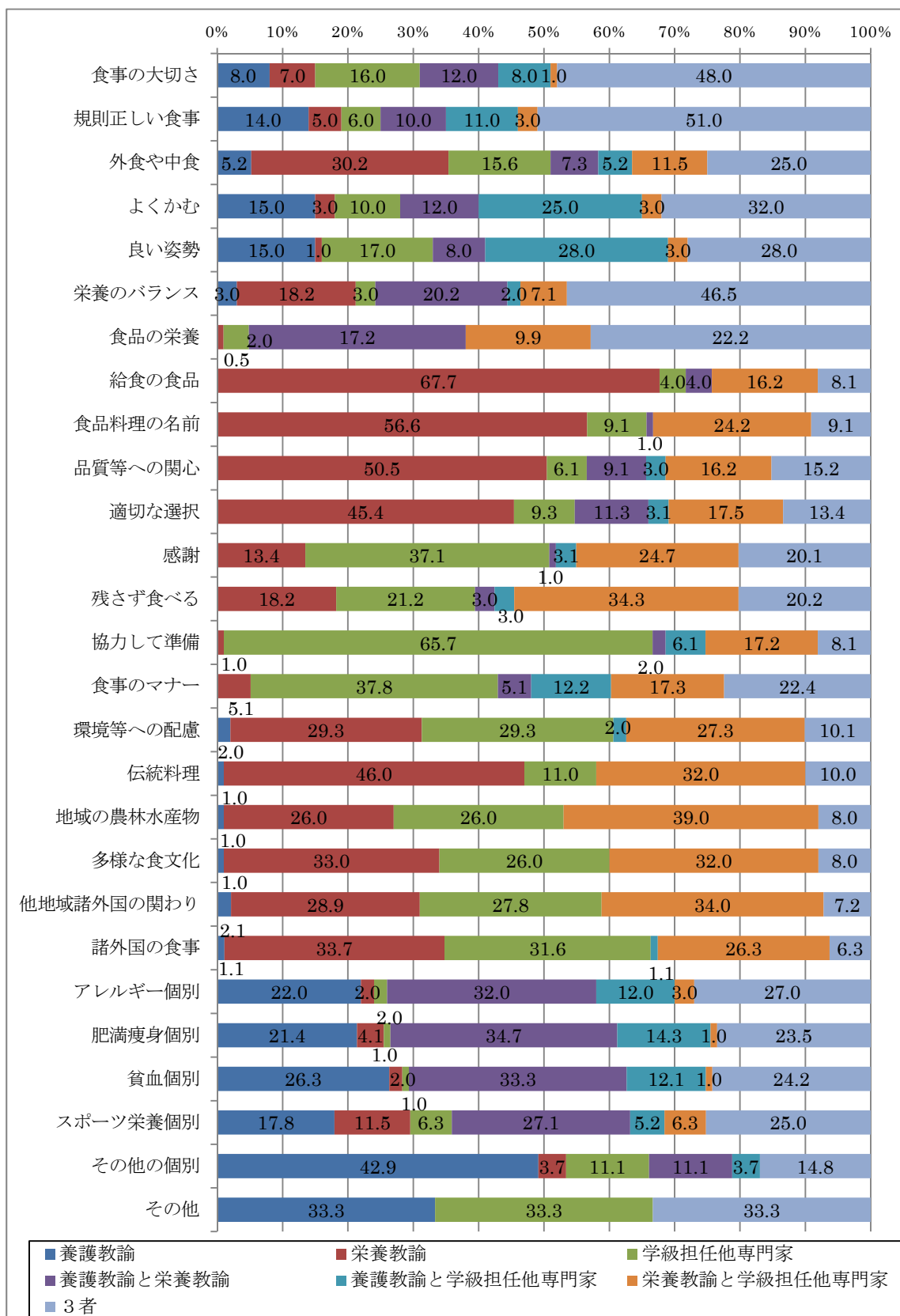


図14 指導内容により適切と考えられる指導者はだれか

n=101 %

⑥栄養教諭との連携について

表 27 は、栄養教諭とどのように連携していけばよいのか、また、栄養教諭制度についての自由記述に記載されたものをまとめたものである。107 人のうち回答者は 81 人、記載なしは 26 人であった。77 の記述があり、22 の項目に整理された。「特になし」は 3 人であった。

22 の項目は、「連携のしかた」、「栄養教諭制度について」、「その他」に分類した。連携のしかたについては 13 項目で、「情報交換や協議を行い、内容を充実させたい」、「全体指導、個別指導、保護者の指導を行ってほしい」という意見が多かった。

栄養教諭制度についての記述は 4 項目で、「配置を増やしてほしい」が多数であり、「現状は配置数が少ないため活用しにくい」という意見もあった。その他としては 2 項目で、「連携のしかたがよくわからない」が多数であった。

栄養教諭配置校に勤務する養護教諭の記述は 10 項目あり、アンダーラインで示した。

表 27 栄養教諭とどのようにして連携していけばよいのか
栄養教諭制度について n = 81 () 記述数

連携のしかたについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>情報交換や協議を行い、内容を充実させたい。</u> (7) ・ <u>全体指導、個別指導、保護者対象の指導も行ってもらいたい。</u> (6) ・ <u>連絡調整や、職員との間をつなぐ橋渡しの役割を果たす。</u> (5) ・ 積極的に連携していきたい。 (4) ・ <u>お互いの専門性を生かして連携していきたい。</u> (3) ・ 協力、分担していきたい。 (3) ・ 全体指導計画の立案、指導内容の検討を共同で行う。 (2) ・ 教材研究を共同で行う。 (2) ・ 役割を明確にし、職員間で共通理解をする必要がある。 (1)
栄養教諭制度について	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>各校または、給食センターに配置を増やしてほしい。</u> (17) ・ 積極的に活用したい。 (6) ・ 教諭として専念させたい。(栄養士の仕事をなくする。) (4) ・ 活用できれば良い制度だと思う。 (3) ・ 現状は、配置数が少ないため、活用しにくい。 (3) ・ アドバイザーと捉えている。 (1) ・ 食の指導を行える時間が限られてくる中で、その力を発揮できるのか不安である。 (1) ・ 配置の基準が不明であるので、栄養教諭の役割を明確にし、子どもたちのためになる配置をしてほしい。 (1)

その他	<ul style="list-style-type: none"> ・連携の仕方がわからない。(6) ・今後の展開により考えたい。(2) ・学校側の要請に応える指導もしてほしい。(1) ・指導内容が毎年同じだが，話し合いの機会がない。(1) ・センターに配置と校内に配置とでは連携のしかたが変わってくる。(1)
-----	---

第2節 栄養教諭

1 回答者の属性

①所属先

表28は、所属先をお知らせください、という質問の回答である。

小学校が78.6%（11人）と多く、中学校は12.3%（3人）であった。

表28 栄養教諭の所属先 人（%）

小学校	11	（ 76.8）
中学校	3	（ 12.3）
合計	14	（100.0）

②兼務先

表29は、兼務先をお知らせください、という質問の回答である。

共同調理場が85.7%（12人）、小学校7.1%（1人）、兼務先がない者もいた。（7.1%，1人）

ほとんどの栄養教諭は、所属校以外に兼務先があった。

表29 栄養教諭の兼務先 人（%）

共同調理場	12	（ 85.7）
小学校	1	（ 7.1）
なし	1	（ 7.1）
合計	14	（100.0）

③年齢分布

表30は、年齢をお知らせください、という質問の回答である。

40代が最も多く、50.0%（7人）であった。

表30 栄養教諭の年齢分布 人（%）

20代	1	（ 7.1）
30代	2	（ 14.3）
40代	7	（ 50.0）
50代	4	（ 28.6）
合計	14	（100.0）

④学校栄養職員としての経験年数

表31は、学校栄養職員としての経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

21年以上が最も多く、61.5%（8人）であった。

表31 栄養教諭の学校栄養職員としての経験年数 人（%）

1～10年目	4	（ 30.8）
11～20年目	1	（ 7.7）
21年以上	8	（ 61.5）
合計	13	（100.0）

⑤栄養教諭としての経験年数

表32は、栄養教諭としての経験年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～4年目が最も多く、84.7%（11人）

表32 栄養教諭としての経験年数 人（%）

1年目	1	（ 7.7）
2～4年目	11	（ 84.6）
5年以上	1	（ 7.7）
合計	13	（100.0）

であった。平成 18 年度に青森県の公立学校での栄養教諭制度が始まり、4 年経過しているためと考えられる。

⑥所属先での勤務年数

表 33 は、所属先での勤務年数をお知らせください、という質問の回答である。

2～4 年目が最も多く、57.1%（8 人）であった。

表 33 所属先での勤務年数 人（%）

1 年目	3 （ 21.4）
2～4 年目	8 （ 57.1）
5 年以上	3 （ 21.4）
合計	14 （100.0）

⑦主な仕事場

表 34 は、主に仕事をしている所はどちらですか、という質問の回答である。

兼務先が 71.4%（10 人）と多く、日常の主な仕事場所は兼務先である共同調理場であった。

表 34 栄養教諭の主な仕事場所 人（%）

所属先	4 （ 28.6）
兼務先	10 （ 71.4）
合計	14 （100.0）

2 給食の状況

⑧給食配食対象校数

表 35 は、給食の対象となる学校数と人数についての質問の回答のうち、給食配食対象校数を示したものである。

最少 1 校から最多は 23 校までであり、最も多かったのは 2～5 校と 16～20 校で、それぞれ 25.0%であった。

表 35 給食配食対象校数 人(%)

1 校	1 （ 8.3）
2～ 5 校	3 （ 25.0）
6～10 校	2 （ 16.7）
11～15 校	3 （ 25.0）
16～20 校	2 （ 16.7）
21～25 校	1 （ 8.3）
合計	12 （ 100.0）

⑨給食配食対象人数

表 36 は、給食の対象となる学校数と人数についての質問の回答のうち、給食配食対象人数を示したものである。

最少 254 人から最多は 8300 人までであり、8,000 人以上は 2 人であった。

最も多かったのは、3,000 人以上で、全体の 50.0%であった。

表 36 給食配食対象人数 人(%)

500 人未満	1 （ 8.3）
500～999 人	3 （ 25.0）
1000～1499 人	2 （ 16.7）
1500～1999 人	0 （ 0.0）
2000～2499 人	0 （ 0.0）
2500～2999 人	0 （ 0.0）
3000 人以上	6 （ 50.0）
合計	12 （ 100.0）

3 回答者の所属校・受配校における食に関する指導の状況

①所属校の食に関する指導についての研究推進校の指定の有無(平成 17 年度以降)

表 37 は、所属校は平成 17 年度以降に食に関する指導に関しての推進校・研究推進校の指定を受けたことがありますか、という質問の回答である。

64.3%が指定を受けていなかった。

表 37 所属校は食に関する指導についての推進校・研究推進校の指定を受けたか 人 (%)

ある	5 (35.7)
ない	9 (64.3)
合計	14 (100.0)

②所属校の食に関する指導への取組状況

表 38 は、所属校の食に関する指導の取組状況についての質問の回答である。

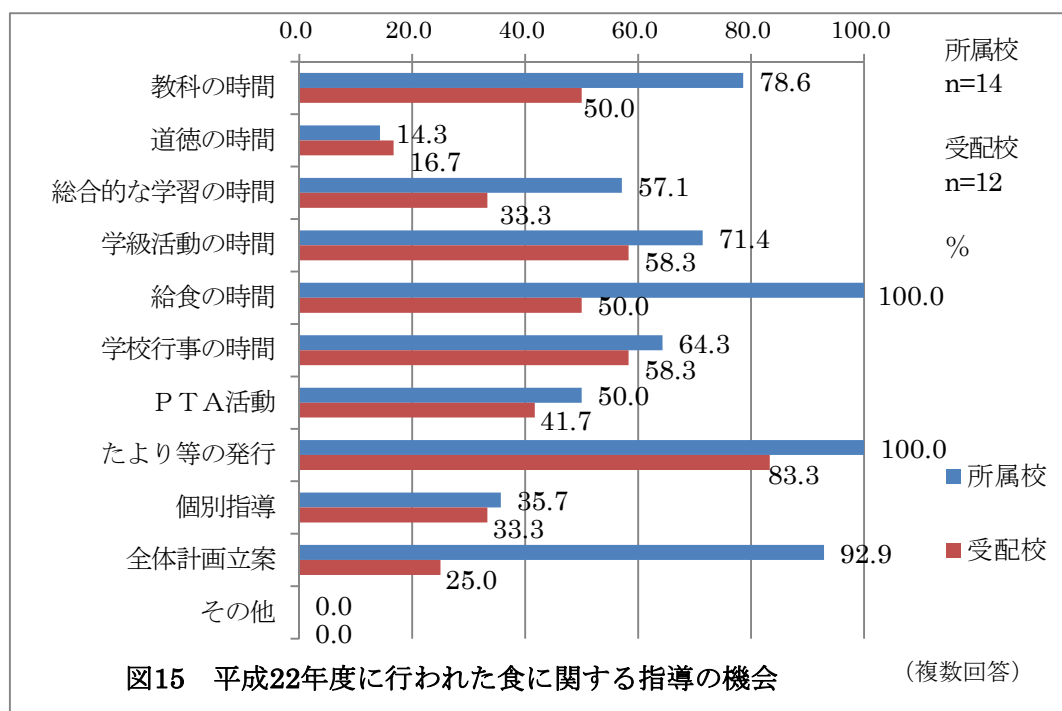
「比較的重点をおいている」が 64.3%であり、「非常に重点をおいている」と合わせると、ほとんどが重点をおいて取り組んでいた。

表 38 所属校の食に関する指導の取組状況 人 (%)

非常に重点をおいている	4 (28.5)
比較的重点をおいている	9 (64.3)
あまり重点をおいていない	1 (7.1)
取り組んでいない	0 (0.0)
合計	14 (100.0)

③所属校と受配校における平成 22 年度実施された指導

図 15 は、所属校及び受配校で 22 年度に行われた食に関する指導の機会と関わり程度についてあてはまるものを回答してください、という質問の複数回答のうち、指導の機会について示したものである。



「給食の時間」と「たより等の発行」は全ての学校で行われており、「全体計画の立案」もほとんどの学校で行われていた。受配校では「たより等の発行」が多かった。特に、「全体計画立案」と「給食の時間」において、所属校と受配校との差が大きかった。

④平成 22 年度の指導への関わりの状況（所属校と受配校）

図 16 は、上記③の回答のうち、所属校での食に関する指導へ関わりの状況を、また、図 17 は、同じく受配校での食に関する指導へのかかわりの状況を示したものである。

所属校

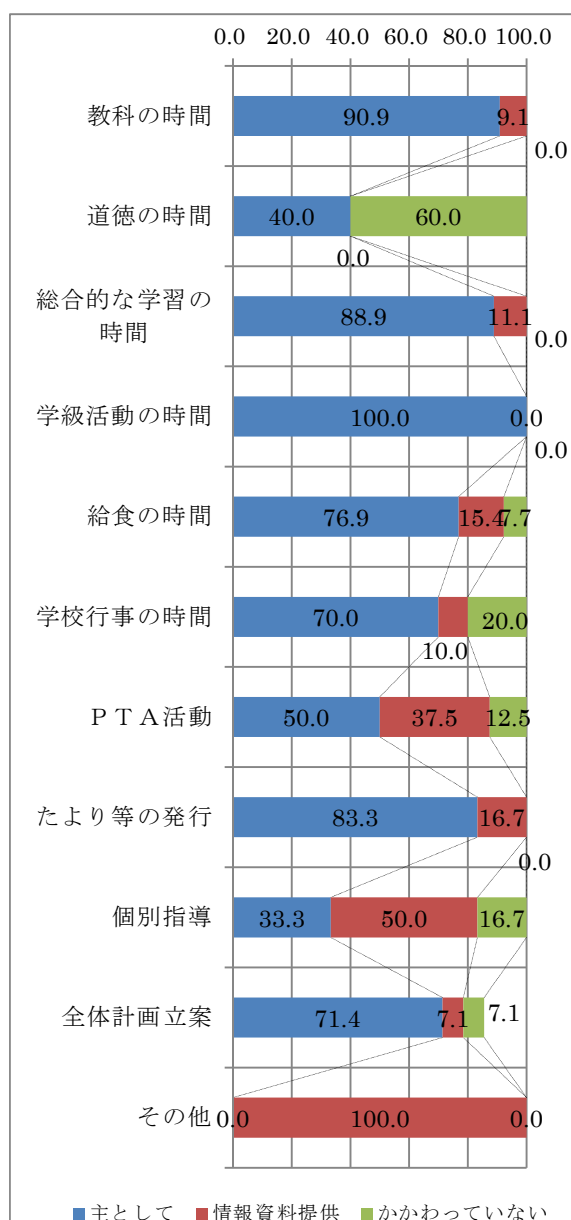


図16 所属校における
関わり方

n=13
%

受配校

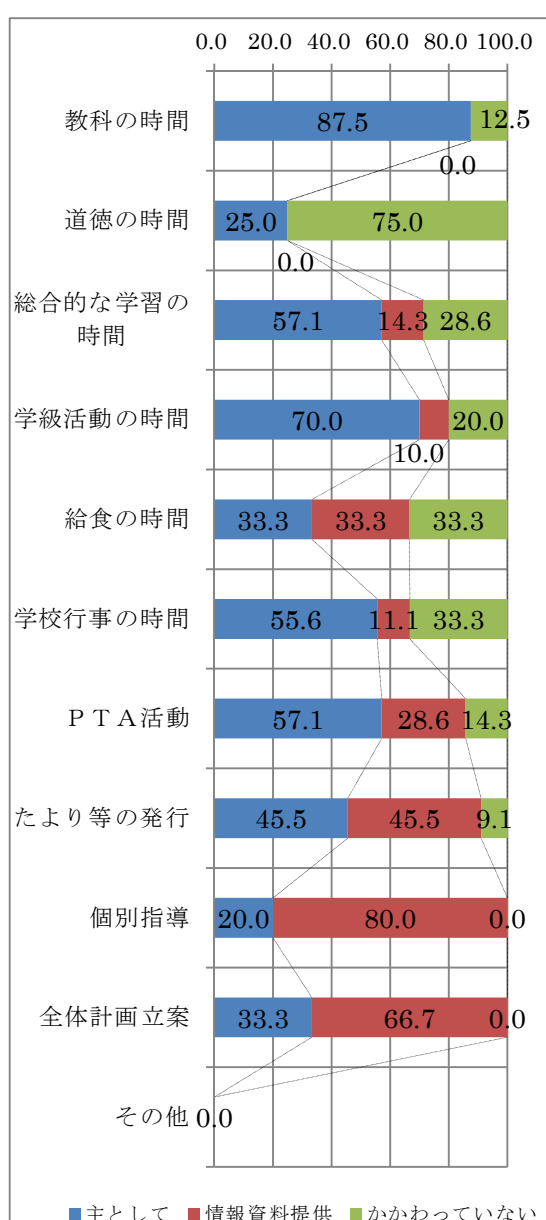


図17 受配校における
関わり方

n=12
%

P T A活動以外のすべての指導の機会において、所属校での指導へ「主としてかわる」割合が高かった。

給食の時間、たより等の発行、個別指導においては、受配校での指導では「情報や資料の提供」の割合が、所属先での指導の場合より高かった。

受配校では、教科の時間・道徳の時間・総合的な学習の時間・学級活動の時間・給食の時間・学校行事の時間において、「かかわっていない」の割合が、所属校での指導の場合より高かった。

⑤平成 22 年度の指導の実施

表 39 は、平成 22 年度に食に関する指導を行いましたか、という質問の回答である。無回答 1 名を除く全員が指導をしていた。

表 39 平成 22 年度に食に関する指導を行ったか 人 (%)

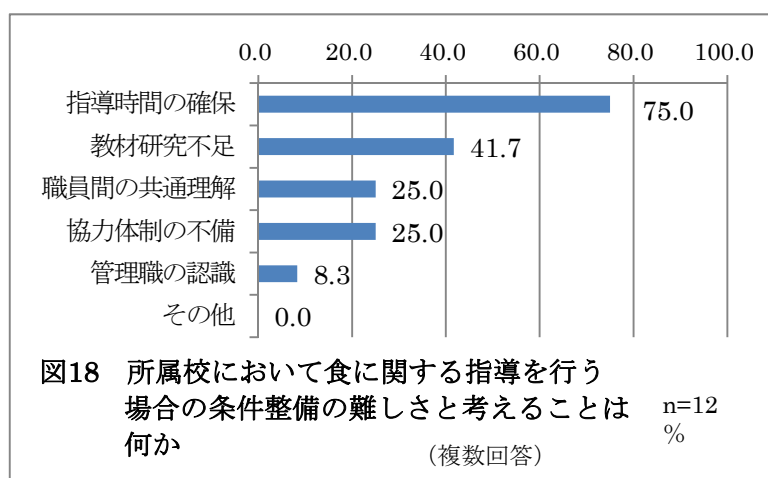
した	13 (100.0)
していない	0 (0.0)
合計	13 (100.0)

※無回答 1 名は、3 学期より臨時講師して赴任し、指導の機会がなかったため。

⑥所属校における指導を行う上での困難点

図 18 は、所属校において食に関する指導を行う場合の条件整備の難しさと考えられることは何ですか、という質問の複数回答である。

「指導時間の確保」が最も多く 75.0%、次いで「教材研究不足」41.7%であった。



⑦受配校での指導状況

表 40 は、受配校でも所属校と同じような内容で指導をしていますか、という質問の回答である。

「(所属校と) 同じようにはしていない」が 53.8% (7 人), 「ほぼ同じ」は 38.5% (5 人) であった。

表 40 受配校でも所属校と同じような内容で指導をしているか 人 (%)

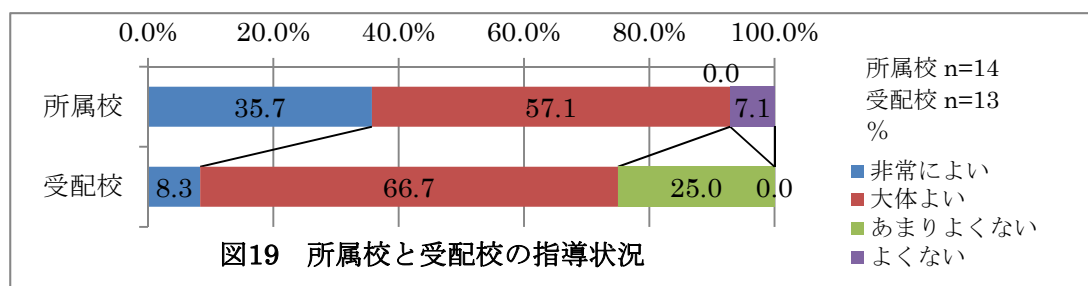
ほぼ同じ	5 (38.5)
同じようにはしていない	7 (53.8)
その他	1 (7.7)
合計	13 (100.0)

⑧所属校と受配校の指導状況

図 19 は、所属校や受配校において食に関する指導は円滑に行われていますか、という質問の回答である。

所属校においては、「非常によい」、「大体よい」を合わせると 92.9%であった。

受配校においては、「非常によい」、「大体よい」を合わせると 75.0%、「あまりよくない」が 25.0%であった。



4 食に関する指導への意識について

①これまでに関わった指導の機会と、そのうち直接指導した機会

表 41 は、これまでに関わったことのある食に関する指導の機会と、その内容をお知らせください、という質問の複数回答のうち、直接指導した機会を示したものである。

関わったことのある指導の機会としては、「給食の時間」、「学校行事の時間」、「たより等の発行」が 100.0%であり、次いで「教科の時間」、「学級活動の時間」、「総合的な学習の時間」も 85～90%以上だった。「道徳の時間」と「個別指導」は少なかった。

直接指導したことのある機会としては、「学級活動の時間」、「給食の時間」が 100.0%、次いで「教科の時間」、「たより等の発行」がいずれ 90.0%であった。こちらも「道徳の時間」と「個別指導」が少なかった。

表 41 これまでに関わったことのある指導の機会とそのうち直接指導した機会は何か 人(%)

指導の機会	これまでに関わった指導の機会 n = 14	直接指導した機会 n = 10
教科の時間	13 (92.9)	9 (90.0)
道徳の時間	2 (14.3)	1 (10.0)
総合的な学習の時間	12 (85.7)	7 (70.0)
学級活動の時間	13 (92.9)	10 (100.0)
給食の時間	14 (100.0)	10 (100.0)
学校行事の時間	14 (100.0)	7 (70.0)
PTA活動	11 (78.6)	8 (80.0)
たより等の発行	14 (100.0)	9 (90.0)
個別指導	8 (57.1)	4 (40.0)
全体計画立案	11 (78.6)	6 (60.0)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)

②これまでに指導したことのあった内容

図 20 は、上記①でこれまでに関わったことのある指導の内容のうち、直接指導した内容について示したものである。前述の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容から取り上げた項目について、これまでに指導したことがあるかを示した。

「食事の大切さ」、「規則正しい食事」、「食品に含まれる栄養」がいずれも 92.9%と高かった。アレルギーと肥満を除く「個別指導」が少なかった。

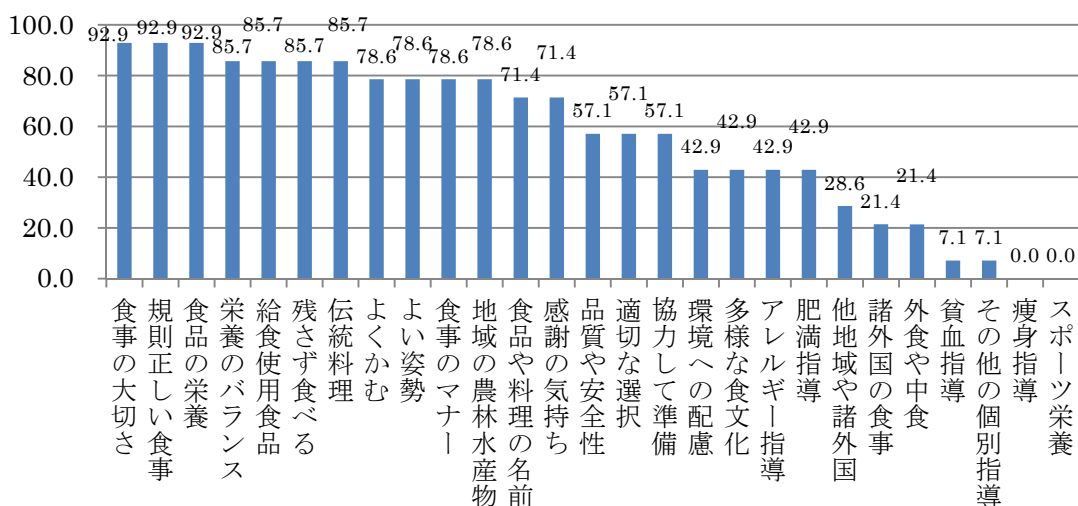


図20 これまでに関わったことのある指導内容のうち、
直接指導したものは何か
(複数回答)

n = 14
%

⑤指導の満足度

図 21 は、指導回数、指導内容、所属校の協力体制、受配校の協力体制のそれぞれについて、食に関する指導における満足度で、あてはまるものは何ですか、という質問に、4件法で回答してもらったものである。

どの項目も、「十分満足している」と「やや満足している」を合わせると高率となっている。しかし、その中で「指導内容」はやや満足度が低かった。

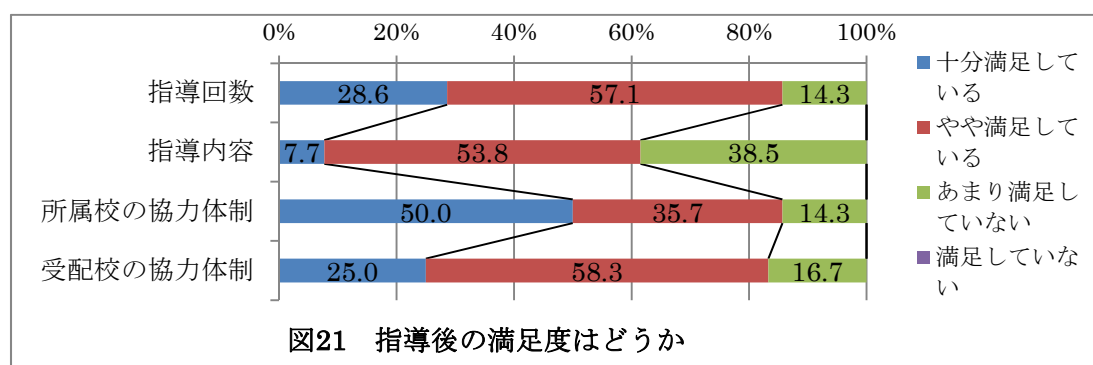


図21 指導後の満足度はどうか

③指導後の評価

表 42 は、指導した結果についてあてはまるものに○をつけてください、という質問の回答である。

全員が「良かった」と評価している。

表 42 指導した結果についてあてはまるものは何か 人 (%)

良かった	14	(100.0)
良くなかった	0	(0.0)
合計	14	(100.0)

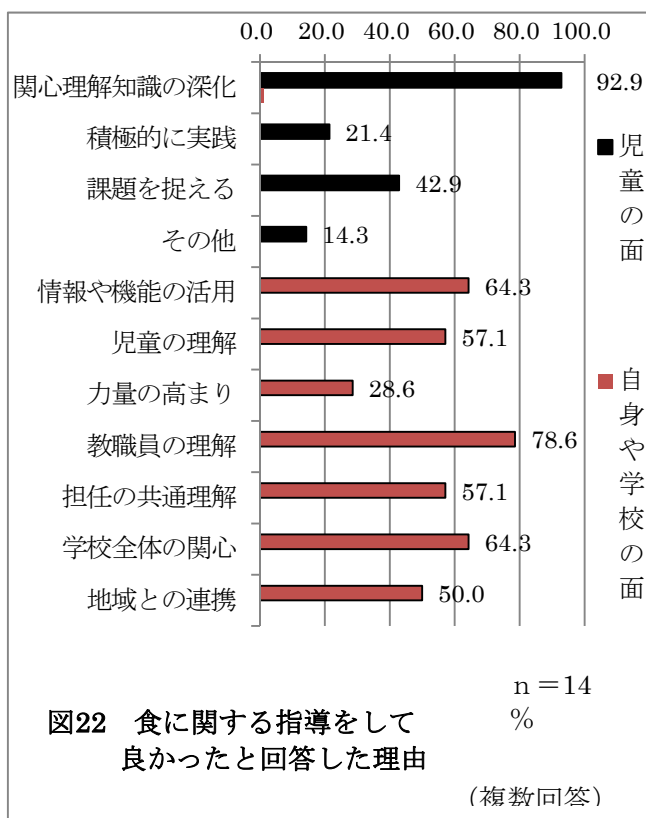
④上記③で、「良かった」と回答した理由

図 22 は、上記②の指導後の評価で、「良かった」と回答した者に、その理由をお知らせください、という質問をした複数回答である。

理由は、児童の面からと自身自身や学校全体の面から示した。

児童の面としては、「関心や理解、知識が深まった」が 92.9%と最も多かった。

栄養教諭自身や学校全体の面としては、「教職員の理解が進んだ」(78.6%)や「栄養教諭としての情報や機能が活用できた」、「学校全体の関心が高まった」(64.3%)が多かった。

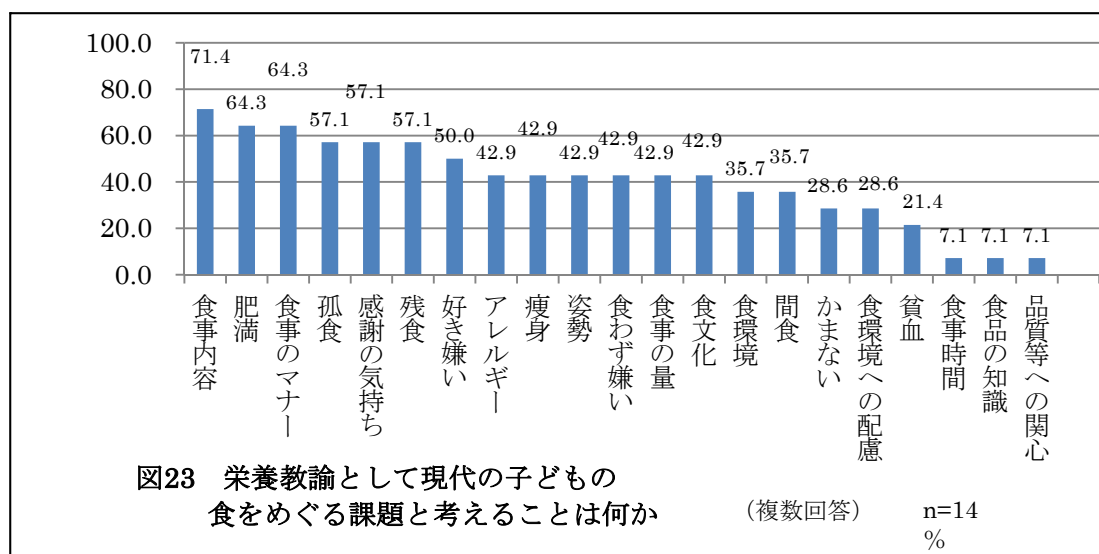


④食をめぐる課題と考えること

図 23 は、栄養教諭として現代の子どもたちの食をめぐる課題と考えることは何ですか、という質問の複数回答である。

「朝食抜き」が最も多く 78.6%，次いで「食事内容」が 71.4%，「肥満」，「食事のマナー」が 64.3%であった。

一方、少なかったのは、「食事の時間」，「食品の知識」，「品質等への関心」でいずれも 7.1%であった。



⑦食に関する指導についての課題，学校側の問題点等についての考え

表 43 は，食に関する指導についての課題や学校側の問題点と考えることをお知らせくださいという質問の自由記述に記載されたものをまとめたものである。

回答者は 10 人，記載なしは 4 人であった。14 の記述があり，3 項目に整理された。

「食に関する指導」についての課題としては，「継続的な指導が困難である」，「自己研鑽が必要である」，「教材研究や教材作りが困難である」などがあげられた。

また，学校側の問題点としては，「指導時間・打ち合わせ時間の確保が困難である」，「職員の共通理解が困難である」があげられた。「特に問題がない」もあった。

表 43 食に関する指導についての課題，学校側の問題点と考えることは何か

n = 10 () 記述数

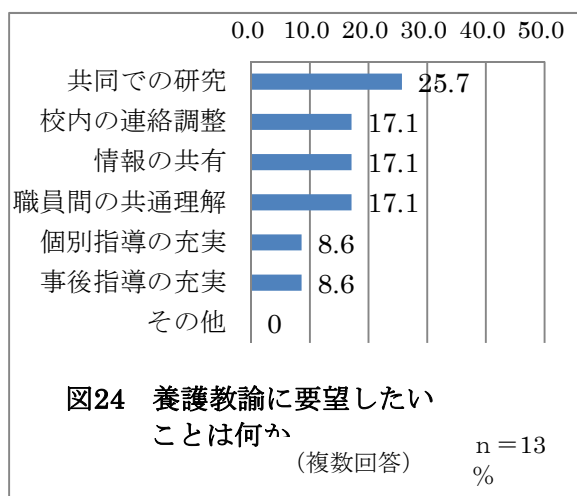
食に関する指導についての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な指導が困難である。(2) ・自己研鑽が必要である。(授業評価，教科内容) (2) ・教材研究，教材づくり，その時間の確保が困難である。(2) ・共同調理場内の理解・協力。任せられる環境づくりが必要である。(1) ・地域との連携が困難である。(1)
学校側の問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・指導時間の確保が困難である。(2) ・打ち合わせ時間の確保が困難である。(2) ・職員との共通理解が不可欠である。(2) ・栄養教諭の職務内容が把握されていない。(1)
問題なし	<ul style="list-style-type: none"> ・全体計画や年間計画に従って計画的に行っている。(1)

5 養護教諭と栄養教諭、学校栄養職員との連携について

①養護教諭に要望したいこと

図 24 は、養護教諭に要望したいことについて、あてはまるものに○をしてください、という質問の回答である。

「共同での研究」が 25.7% (9 人) と最も多く、次いで「個別指導の充実」、「事後指導の充実」が最も少なく 8.6% (3 人) であった。



②養護教諭との連携の経験

表 44 は、これまでに養護教諭と連携して指導をしたことがありますか、という質問の回答である。

経験が「ある」は 61.5% (8 人) と多かった。

一方、「ない」は 38.5% (5 人) であった。

表 44 養護教諭と連携して指導したことがあるか 人(%)

ある	8 (61.5)
ない	5 (38.5)
合計	13 (100.0)

③上記②で、連携したことの無い理由

表 45 は、上記で②で、「連携したことがない」と答えた者に、その理由は何ですかという質問をした回答である。

選択肢の中での回答は、「連携の必要性がない」(20.0%, 1 人) のみで、「その他」が 80.0% (4 人) であった。

「その他」としては、「機会がない」、「(役割が分担されており) 一緒に T T となっていない」、「時間の調整が難しい」があげられた。

表 45 連携したことがない理由は何か 人(%)

連携の必要性がない	1 (20.0)
推進担当の中心ではない	0 (0.0)
一人で実施する方がよい	0 (0.0)
その他	4 (80.0)
合計	5 (100.0)

④上記②で「ある」場合の連携の様子

表 46 は、上記②で「連携したことがある」と答えた者に、養護教諭との連携の様子はいかがでしたか、という質問をした回答である。

「十分にできている」「できていない」がそれぞれ 50.0% (4 人) で全員が連携できている状況であった。

「できていない」はなかった。

表 46 連携の様子はどうか 人 (%)

十分にできている	4	(50.0)
できている	4	(50.0)
あまりできていない	0	(0.0)
ほとんどできていない	0	(0.0)
合計	8	(100.0)

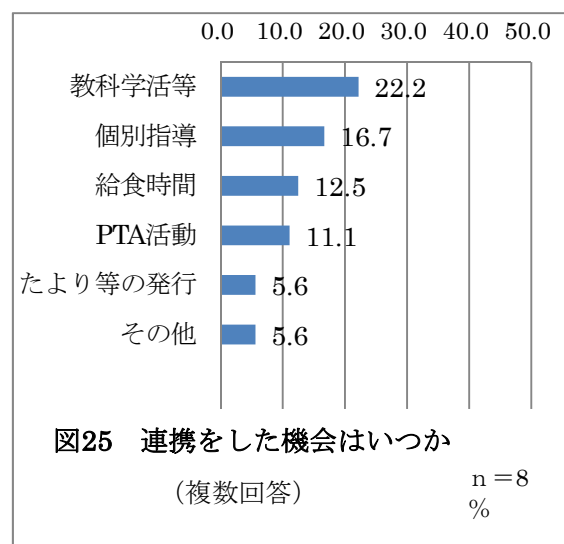
⑤上記②で「ある」と答えた者の連携の機会

図 25 は、上記②で「連携したことがある」と答えた者に、連携した機会に○をつけてください、という質問をした複数回答である。

「学校行事」が 33.3% (6 人) と最も多く、次いで「教科・学活等での指導」が 22.2% (4 人)「個別指導」(16.7%, 3 人)であった。

少なかったのは、「たより等の発行」,「その他」(5.6%, 1 人)であった。

「その他」としては、「養護教諭部会での共同研究」があげられた。



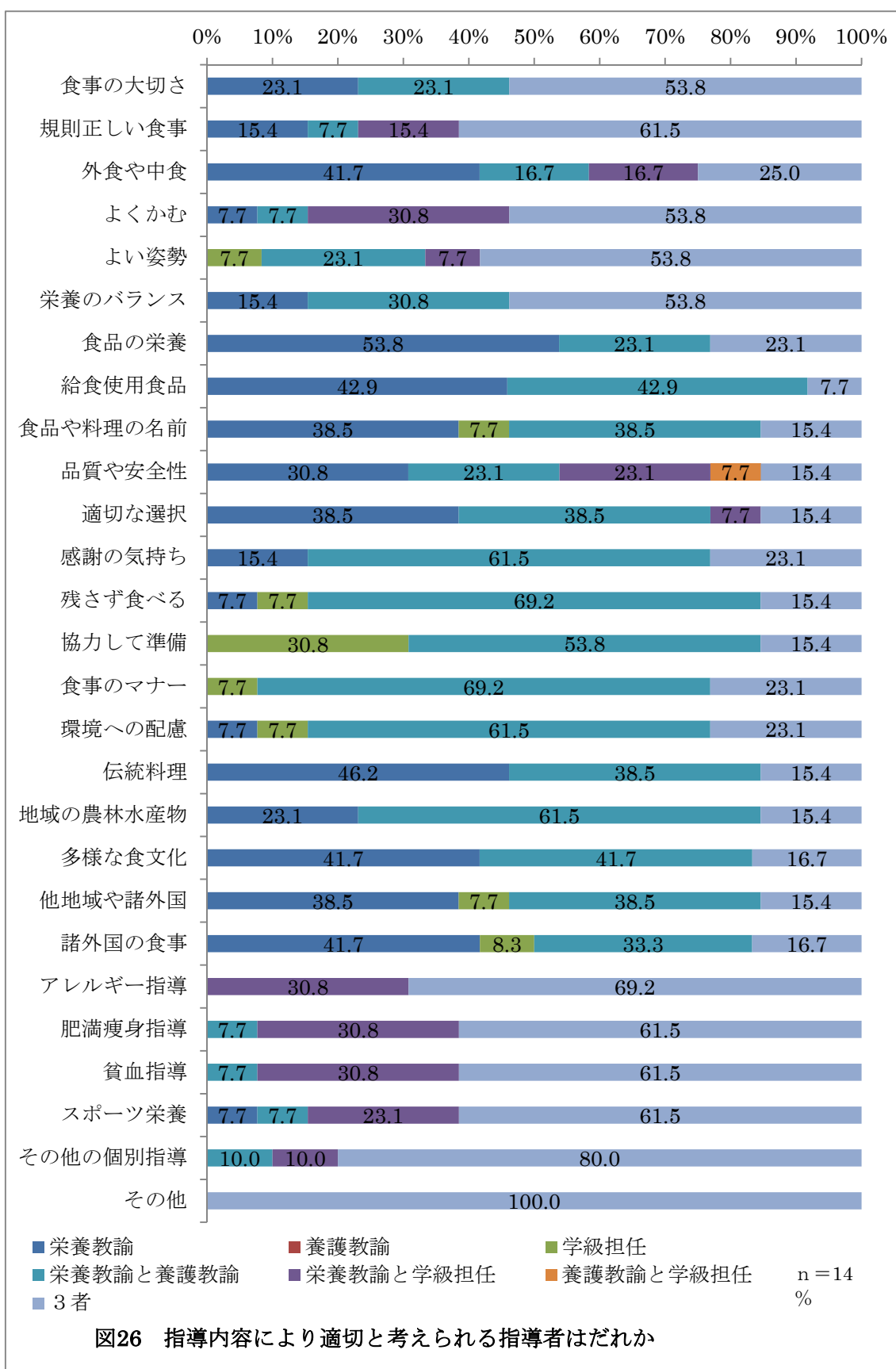
⑥指導内容により適切と考える指導者

図 26 は、「方法」で示したように、文部科学省発行の「食に関する指導の手引」に例示された指導内容の項目ごとに、適切と思う指導者に○をつけてください、という質問に複数回答で答えてもらったものである。

回答は、「1 栄養教諭が」、「2 養護教諭が」、「3 学級担任が」、「4 栄養教諭と養護教諭が」、「5 栄養教諭と学級担任が」、「6 養護教諭と学級担任が」、「7 栄養教諭、養護教諭、学級担任の3者が連携して」の7つに分けて示した。

栄養教諭単独では、「食品の栄養」(53.8%),「伝統料理」(46.2%),「給食の食品」(42.9%)「外食や中食」(41.7%)が多かった。

養護教諭単独で最も多かったのは、「よくかむ」、「アレルギーの個別指導」、「肥満痩身の個別指導」、「貧血の個別指導」がそれぞれ 30.8%であった。



⑦養護教諭との連携についての自由記述

表 47 は、養護教諭との連携についてのお考えをお聞かせくださいという自由記述に記載されたものをまとめたものである。回答者 13 人、記載なしは 1 人であった。13 の記述があり、2 項目に整理された。

いずれも養護教諭との連携には肯定的であり、連携のしかたでは、「健康面に関することや個別指導時や受配校で特に連携が必要である」、「情報を共有したい」という意見が多かった。

また、養護教諭との連携により、「相乗効果が期待できる」「子どものためになる」という意見があった。

表 47 養護教諭との連携についての考え

n = 13 () 記述数

連携のしかた	<ul style="list-style-type: none"> ・特に健康面に関することや、個別指導時に強い連携が必要である。(4) ・情報を共有したい。(4) ・共同で教材研究、教材づくりをしたい。(2) ・受配校において指導を推進していくために、特に連携が必要である(2) ・連絡調整の中心になってもらっている。(1) ・市町村の学校保健会活動で、共同で取り組んだ。(1)
連携の効果	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの専門性を出し合うことで相乗効果が期待できる。(1) ・「健康」を扱う職種同士、連携を持つことができれば、子どものためになる。(1)

第3節 検定結果

①栄養教諭の配置状況と食に関する指導計画の中心作成者

表 48 は、栄養教諭の配置状況と食に関する指導計画の中心作成者との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.001$)。

表 48 栄養教諭配置と食に関する指導計画の中心作成者 人 (%)

配置 \ 作成者	栄養教諭以外 (%)	
	栄養教諭	外
配置 (n=11)	9 (81.8)	2 (18.2)
未配置 (n=78)	1 (1.3)	77 (98.7)
合計 (n=89)	10 (11.2)	79 (88.8)

$p<0.001$

②栄養教職員配置と食に関する指導の取組状況

表 49 は、栄養教職員の配置状況と食に関する指導の取組状況の関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

取組状況については4段階の回答を2段階にまとめて検定を行った。

栄養教職員配置校では、食に関する指導に重点をおいて取り組んでいる傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 49 栄養教職員と食に関する指導の取組状況 人 (%)

配置 \ 取組状況	重点をおいている (%)	
	重点をおいている	そうでない
配置 (n= 23)	19 (82.6)	4 (17.4)
未配置 (n= 82)	52 (63.4)	30 (36.6)
合計 (n=105)	71 (67.6)	34 (32.4)

$p<0.1$

③養護教諭の食に関する指導の経験と食に関する指導への関心

表 50 は、食に関する指導の経験の有無と食に関する指導への関心の有無の関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 50 食に関する指導の経験と食に関する指導への関心 人 (%)

指導経験 \ 関心	関心 (%)	
	ある	ない
ある (n= 90)	87 (96.7)	3 (3.3)
ない (n= 13)	10 (76.9)	3 (23.1)
合計 (n=103)	97 (94.2)	6 (5.8)

$p<0.05$

④在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施

表 51 は、在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 51 在籍児童数と平成 22 年度の食に関する指導の実施 人 (%)

児童数	指導実施	
	した	しない
100 人未満 (n= 33)	30 (90. 9)	3 (9. 1)
100~300 人未満 (n= 30)	20 (66. 7)	10 (33. 3)
300 人以上 (n= 39)	22 (56. 4)	17 (43. 6)
合計 (n=102)	72 (70. 6)	30 (29. 4)

$p < 0.05$

⑤食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施

表 52 は、食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

取組状況については 4 段階の回答を 2 段階にまとめて検定を行った。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 52 食に関する指導の取組状況と平成 22 年度の食に関する指導の実施 人 (%)

取組状況	指導実施	
	した	しない
重点をおいている (n= 67)	53 (79. 1)	14 (20. 9)
そうでもない (n= 33)	17 (51. 5)	16 (48. 5)
合計 (n=100)	70 (70. 0)	30 (30. 0)

$p < 0.05$

⑥養護教諭が力を入れている保健指導内容と食に関する指導への関心

表 53 は、養護教諭が、保健指導内容の中で食に関することに力を入れているかどうかと、食に関する指導への関心との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

「食に関すること」を力を入れている保健指導内容の 1 番目から 3 番目までに選択した者を対象とした。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

力を入れている保健指導内容に「食に関すること」を選択した者は、食に関する指導への関心が高い傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 53 養護教諭の力を入れている保健指導内容と食に関する指導への関心 人 (%)

食に関すること	関心	
	ある	ない
力を入れている (n= 55)	54 (98. 2)	1 (1. 8)
そうでもない (n= 48)	43 (89. 6)	5 (10. 4)
合計 (n=103)	97 (94. 2)	6 (5. 8)

$p < 0.1$

⑦養護教諭が力を入れている保健指導内容と栄養教諭の配置状況

表 54 は、養護教諭が、保健指導内容の中で食に関することに力を入れているかどうかと、養護教諭現任校への栄養教諭の配置との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

「食に関すること」を力を入れている保健指導内容の 1 番目から 3 番目までに選択した者を対象とした。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

力を入れている保健指導内容に「食に関すること」を選択した者は、現任校に栄養教諭が配置されている傾向がみられた ($P<0.1$)。

表 54 養護教諭の力を入れている保健指導内容と栄養教諭の配置 人 (%)

食に関すること 栄養教諭	配置	
	配置	未配置
力を入れている (n= 56)	3 (5.4)	53 (94.6)
そうでもない (n= 48)	8 (16.7)	40 (83.3)
合計 (n=104)	11 (10.6)	93 (89.4)

$p < 0.1$

⑧現任校または給食センターへの栄養教職員の配置と養護教諭と栄養教職員との連携

表 55 は、養護教諭の現任校または給食センターへの栄養教職員の配置と、養護教諭と栄養教職員との連携保健学習担当との関連を明らかにするために χ^2 検定を行った結果を示したものである。

各項目とも、無回答を除いたものを検定の対象とした。

有意差がみられた ($P<0.05$)。

表 55 栄養教職員の配置と養護教諭と栄養教職員との連携 人 (%)

配置状況 連携	したことが	
	ある	ない
配置されている (n=102)	85 (83.3)	17 (16.7)
配置されていない (n= 5)	1 (20.0)	4 (80.0)
合計 (n=107)	86 (80.4)	21 (19.6)

$p < 0.05$

第 4 章 考 察

1 食に関する指導の実態

1) 実施状況

表 17 に示したように、「食に関する指導の全体計画がありますか」という問いに対して、87.7%が「ある」と回答している。平成 22 年度の青森県内の小中学校における食に関する指導の状況調査⁴³⁾では、指導計画があると答えた学校は、県内全小学校の 89.9%、全中学校の 71.3%で、本調査と同様の結果であった。平成 21 年度の同調査⁴⁴⁾と比較すると、小学校では 9.8%、中学校では 11.3%増加している。5 年間にわたる第 1 次食育推進基本計画も最終年度を迎え、食に関する指導の推進のためにその指導計画作成が強く求められてきたことの表れではないかと推察される。

同調査の「食生活学習教材の活用」については、小学校で 86.7% (H21 年度は 85.8%)、中学校で 56.9% (同 55.4%)、「食に関連した体験学習」については、小学校で 97.4% (同 96.6%) 中学校で 65.9% (同 63.1%) とそれぞれ増加している。食育は、青森県内の小中学校でも着実に推進されていると考えられる。

食に関する指導は、「教科」、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「学級活動」、「給食の時間」、「学校行事」の各時間に行われており、その他にも「PTA 活動」、「便り等の発行」、「個別指導」と様々な機会に実施されていた。ここでも学校での指導が着実に行われている様子がうかがえる。

表 18 に示したように、「食に関する指導」全体計画の中心作成者は、栄養教諭配置校では栄養教諭であった ($p < 0.001$) が、残り 79 校の未配置校では、全体として養護教諭が 37.1% と最も多かった。保健主事と答えた 14.6%のうち、養護教諭が保健主事として関わった割合とを合わせて考えると、青森県内の小学校における「食に関する指導」全体計画の作成者は養護教諭であり、全体計画作成においては中心的役割を果たしていると考えられる。

様々な学習活動における指導の担当者としては、学級担任や栄養教諭が多かった。しかし、指導が行われている割合は多かったものの、各学校における実際の時間数はさほど多くはない。多くの時間が食に関する指導に充てられているわけではないので、回答された割合だけで推し量られるわけではない。実際に栄養教諭が指導している割合が多いというわけではないと推察される。一方で、学習時間以外 (PTA 活動、便り等の発行、個別指導等) では、栄養教諭と学校栄養職員よりも、養護教諭が担当した方が多いという結果であった。養護教諭の指導は、「個別指導」、「便り等の発行」、「PTA 活動」が中心である。久保ら⁴⁵⁾による平成 22 年度の青森県内の小学校対象の調査では、「食育の指導者については、クラス担任、教科担任以外では、養護教諭が多かった。」という結果であった。図 5 の養護教諭が関わった学習機会の結果のように、指導計画作成と共に、養護教諭の関わりが大きくなったことが明らかになった。

2) 栄養教諭による指導

栄養教諭は、表 35, 36 に示したように、給食配食担当校数は最も多い者で 23 校、配食対象人数は最多で 8,300 人の給食管理をしながら、食に関する指導にあたっている。面接調査を行ったある栄養教諭は、兼務先が給食対象校 33 校の共同調理場であり、日常の主な仕事場もその兼務先であった。そこで給食管理を行うと共に、所属校を含め年間 80 回を超える指導を行っていた。(平成 22 年度)。また、平成 23 年度上北地方学校保健・学校給食研究大会で実践発表をしたある栄養教諭は、給食対象校が 12 校で指導回数は 48 回であった(平成 23 年度)。これらの栄養教諭の兼務先の共同調理場では、この指導を行う体制作りとして、学校栄養職員(栄養士)が加配されていた。回答した 14 名の栄養教諭の 92.9% には兼務先(共同調理場や他校)があり、給食受配校でも巡回指導を行っていた。栄養教諭もその職責を果たそうとしていること、学校側も積極的に活用しようとしていることがうかがわれた。先の栄養教諭の例のような、指導を行う体制づくりが望まれる。

栄養教諭による指導では、実に様々な工夫がされ、熱心に取り組まれている。受配校での巡回指導では、各校から日時や指導内容の希望をとり、できるだけ学校課題に合わせた指導をしようとしている。その内容は、食事のバランス、栄養素について、間食の摂り方、食事のマナーについてなど多岐にわたっていた。平成 23 年度青森県学校保健・安全・給食研究大会での実践発表の中で、小学校に所属している栄養教諭の、所属校で実践している特色ある取組が報告された。各学年の発達段階に応じた指導を行い、最終目標として子どもたちが自分でお弁当を作る「弁当の日」を実施したという取組であった。これは、事前の学習を踏まえて、当日にそれぞれの発達段階にあった手作りのものを詰めたお弁当を持参するというものである。小学校 1 年生であれば、事前に給食の米飯を利用して、学校でのおむすび作り、家庭科の調理実習を経験していない 4 年生は、ガスコンロの使い方や包丁の扱い方、卵の割り方、フライパンと油の使い方、器具や食器の洗いかた、後片付け等を栄養教諭から学び、簡単なおかずを作り、高学年は全員が同じ食材を使つての調理実習を経て、全校統一した日に自作の手作り弁当を持参する、という内容のものである。(1~3 年生は、自分で作ったラップおにぎり弁当を持参する。)当初は実際に作ることができるのか、保護者には受け入れてもらえるのか心配されたが、実施してみると児童は達成感を感じ、以後食に対する関心が高まった、また、保護者にも非常に好評で、保護者もまた食に関する意識が高揚した、という報告であった。これは、一つのテーマについて全学年を通して、具体的な食材を用いたり、給食を活用して学習することを通して、栄養教諭ならではの指導であり、栄養教諭が配置された学校でなくてはできない、栄養教諭の配置の利点を生かした取組と考える。研究発表者ゆえの優れた実践の紹介ではあるが、栄養教諭による指導の効果を認識した一例である。

また、面接した栄養教諭の事例では、授業時間以外での指導として、学校保健委員会、参観日等の学校行事での講話、親子料理教室、給食試食会等の PTA 行事や、食育だよりの発行、給食時の放送での指導資料の作成等、児童の食に関する意識を高める取組が行われ

ていた。栄養教諭らはその成果として、苦手なものでも食べようとする姿勢がみられること、食生活を改善しようとする意欲が感じられると述べていた。

栄養教諭による授業の参観、研究大会での栄養教諭の発表から、栄養教諭による指導は、非常に効果的なこと、栄養教諭の必要性を確認した。反面、本調査の栄養教諭の自由記述で「教材研究、教材づくり、その時間の確保が困難である」と述べられているように、日常の給食管理や受配校を何校も訪問して指導する栄養教諭の多忙も明らかになった。また、表 40 に示したように、所属校とは同じように指導できていないと感じている栄養教諭が多いことも明らかになった。

3) 栄養教諭配置校と未配置校

前述のように、栄養教諭による指導は効果的であると言える。

4 件法で食に関する指導への取り組み状況を尋ねた結果、現任校に栄養教職員が配置されている学校の方が、食に関する指導に「重点をおいている」傾向にあった ($p < 0.1$)。楠本等⁴⁶⁾によると、2004 年度の山形県内の小学校における食育実施状況では、栄養士が配置されている学校は、未配置校に比べ、食育の実施回数が有意に多かったと報告されている。この結果から食育の目的を達成するためにも、栄養教諭の配置の改善が必要であると考えられる。

養護教諭に、栄養教諭との連携、または栄養教諭制度について自由記述で考えを述べてもらったところ、「配置を増やしてほしい」という意見が最も多かった。栄養教諭を食に関する指導の中心的推進役として認識し、配置による効果を期待していることの表れと考えられる。

文部科学省によると、栄養教諭配置の効果の例として、以下のような成果が報告されている。⁴⁷⁾

- ・教職員の食育推進に向けた意識の向上がみられ、食育の取組が充実した。
- ・児童生徒の朝食欠食率が低下し、朝食欠食ゼロの日が増えた。
- ・計画的な指導の結果、児童生徒の健康や食に関する興味・関心が高まり、給食の残食率が低下した。
- ・栄養教諭が養護教諭と連携して個別指導に取り組んだ結果、児童の肥満傾向が改善された。
- ・保護者の食に関する関心が高まった。
- ・地域の生産者等との連携を図ったことにより、地場産物の使用率が増加した。

栄養教諭配置校では、学校全体で食育を推進するための指導体制が整備され、全教職員が計画的に食に関する指導に取り組んだ結果の成果とされている。

このように、成果があるとされている制度でも、栄養教諭未配置校においては義務教育課程の児童・生徒であってもその制度の恩恵を受けられないこととなってしまう。このような差を少しでも埋めるために、学校栄養職員等と連携した取り組みが必要であると考え

る。未配置校でも、受配校として栄養教諭の巡回指導を受けられる学校もあるが、共同調理場に栄養教諭が配置されていない学校もある。筆者の勤務する町にも栄養教諭は配置されておらず、学校栄養職員が配置されている。平成 23 年度は学校栄養職員が給食配食校で巡回指導を実施した。児童は興味深く指導を受け、指導後は食に関する興味関心が高まり、指導内容も意識されていた。指導後にその内容と児童の感想を保護者に伝え、保護者からの感想を募ったところ、ほとんどが「児童にとって有意義だった」、「今後も続けてほしい」という感想であったことから、保護者の意識の高揚の一助になったことと推察された。栄養教諭でなくても有資格者である学校栄養職員が指導にあたることでもその効果は高いと考える。栄養教諭の増員が困難であるとしても、「当面の対応策として、栄養教職員が不在の学校に時には学校種を超えて支援にあたるなどの柔軟な体制を整備する必要がある」⁴⁸⁾との指摘もあるように、学校栄養職員が巡回指導にあたりやすい体制や環境の整備により、指導の充実が図られるのではないかと推察される。

2 養護教諭の食に関する指導への関わり

表 21 に示したように、養護教諭の食に関する指導への関心は約 90%が「ある」と回答しており高かった。また表 22 に示したように、回答者の 87.5%が「これまでに食に関する指導を行ったことがある」と答えていた。食に関する指導への関心とこれまでに食に関する指導を行ったことがあるかどうかの検定では、有為差があった ($P<0.05$)。

平成 22 年度に関わった経緯としては「自分自身から」という回答が 30%近くを占め、ここでも積極的な姿勢がみられた。また「学級担任からの依頼」、「管理職からの依頼」が上位であげられたという結果から、養護教諭は指導者として期待されていることもうかがわれた。

平成 22 年度に指導をしたかしないかに関わる要因としては、「児童数」、「学校が食に関する指導に重点をおいている」に有意差があり ($P<0.05$)、「(養護教諭が) 保健学習を担当している」ではその傾向がみられた ($P<0.1$)。

図 7 に示したように、15 の保健指導内容の中から力を入れているもの 3 つを選択してもらい、1 位から 3 位まで合わせたところ、「食に関すること」は合計 53.8%で、1 位の「歯・口に関すること」(78.8%) に次いで多かった。また「食に関すること」を選択した者は、食に関する指導への関心が高い傾向にあり ($P<0.1$)、栄養教諭配置校の養護教諭に、「食に関すること」に力をいれていると回答した者の割合が多い傾向がある ($P<0.1$) こともわかった。養護教諭の関心が食に関する指導への関わりに反映され、そこには栄養教諭の配置の有無も影響していることがうかがわれた。

これまでに関わったことがある指導の機会と直接指導した機会を尋ねた結果、関わったことがある指導の機会としては、「学級活動の時間」、「便り等の発行」、「学校行事」、「個別指導」の順に多く、そのうち直接指導した機会としては「個別指導」、「便り等の発行」、「学級活動の時間」の順に多かった。

図 9 に示したように、養護教諭自身が指導して「良かったと思うこと」を選択してもらった結果、児童への効果として「児童の関心・理解や知識が深化したこと」が 84.1%と最も多く、このことは学校全体への関心を高め、教職員の理解を深めたという回答が多かったことにも反映されている。養護教諭としての「情報や機能を活用」も多かった。養護教諭が日頃行ってきた、個別指導や便り等の発行を含めた一斉指導を生かした方法を通して成果を実感したものと考えられる。鈴木⁴⁹⁾は自身の調査で「養護教諭らが、児童生徒の健康と生活の実態を踏まえた指導ができると考えていることが明らかになった。」と述べているが、本調査でも同様の結果が得られた。

学校の中心として指導を行う上での課題としては、図 11 のように「指導法」、「関係機関との連絡調整」、「教材研究」の順に多くあげられた。これらの課題は、前述の食に関する指導の目標⁵⁰⁾の中に、養護教諭の専門である健康だけではなく社会性や食文化に関わる内容もあるため、食育を推進し、より充実した指導をするためには、例えば市町村の栄養士などの活用や地域や大学等の「出前授業」の利用などの興味を引く方法を取り入れる必要があるためと推察される。

一方、これまで指導したことのない理由として、「(指導の) 機会がない」、「(指導に対しての) 自信がない」が最も多く、「必要がない」という回答もあったことから、積極的に取り組む養護教諭がいる一方で、消極的あるいは否定的な考えをもつ養護教諭もいることが明らかになった。また、「保健室を空けられない」、「多忙」、「時間がない」と養護教諭の抱える職務の多忙さもうかがわれた。鈴木⁵¹⁾は「栄養教職員の不在により、養護教諭の職務が過重になることは深慮すべき課題である。」と述べているが、本調査からも同様の危惧はあり、過重な負担は避けなければならないことと考える。

養護教諭が捉える、食に関する指導への課題としては「職員間の共通理解」が最も多く、次いで「専門性を持つ推進職員が不在」、「学校課題の認識不足」、「教材研究が困難」などがあげられた。今後はこれらの課題の解決策を模索していく必要があると考えられるが、「特に難しくはない」が全体の 1/4 を占めたことは、一律に食に関する指導をしていく上で課題がない、と言っても様々な事情があり、統計調査だけではなく、実態を踏まえた考察をしていく必要があると考える。従来指導してきたことを生かした指導をしていくことに前向きな養護教諭の姿勢がみられたことから、食に関する指導を養護教諭の職務の中に取り入れ、健康の視点をもって関わっていくことが可能であると考ええる。

埼玉県養護教員会では「養護教諭の専門性を生かした食育とは、医学的・看護的知識をもとに、児童生徒の健康状態や生活実態から『食』の課題を把握し、教育活動と関連させて指導や支援をしていくことである。」⁵²⁾と述べている。養護教諭は、日常の保健室での対応や健康診断、健康観察、保健調査、健康相談等の様々な活動から、児童の健康状態や生活状況を把握でき、そこから食の課題をつかむことが可能である。教職員との共通理解を図り、計画的な指導を行うことで、把握した課題の解決に向けた関わりができると考える。

3 栄養教諭との連携のあり方

現任校または給食センターに栄養教職員が配置されている場合は、未配置校と比べて連携をしたことがある割合が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。笠島ら⁵³⁾の研究では、養護教諭と学校栄養職員との連携について、「たとえ連携を望んでいても、《時間的余裕》、《身近な距離を保つ組織内の配置》などの物理的条件がなければ、連携が困難であると語られた。」と述べているが、本調査でも同様の結果が得られた。

連携のしかたについて意見を求めたところ、「情報交換や協議を行い、内容を充実させてい」、「連絡調整や、職員との間をつなぐ橋渡しの役割」、「お互いの専門性を生かして」、「協力、分担」、「積極的に連携」という積極的な意見が多かった。一方、栄養教諭も養護教諭との連携には肯定的であり、連携のしかたでは「健康面に関することや個別指導時、受配校での指導の際には特に連携が必要である」、「情報を共有したい」という意見が多く、養護教諭との連携により「相乗効果が期待できる」、「子どものためになる」と述べられていた。養護教諭、栄養教諭ともその連携に関しては有効性を感じ、肯定的に捉えていた。

栄養教諭から養護教諭へ要望したいことの自由記述として「共同での研究」、「校内の連絡調整」、「情報の共有」、「職員間の共通理解」等があげられた。養護教諭は校内における協力者として捉えられているようである。面接調査においても養護教諭は「頼りになる存在」、「子ども一人一人を把握している」と評価されていた。栄養教諭が指導を行う場合、養護教諭は、特に受配校においては、困難性を感じている担任との共通理解や連絡調整において、橋渡し役として協力していくことが求められている。

養護教諭にどのように関わっていききたいかを尋ねた自由記述には、「養護教諭の専門性を生かして」、「担任、栄養士や栄養教諭と連携して」、「コーディネーター、推進役、リーダーとして」関わっていききたいという積極的な意見が多かった。

前述の笠島らは、養護教諭と学校栄養職員の連携の意義と現状について「連携により、養護教諭は健康に関する様々な情報の収集と活用、健康診断をはじめとする全校児童の身体面の情報が把握できる、栄養職員は養護教諭と連携することによって、子どもの健康問題について、より多くの情報が得られ、より広い範囲の視野で食の問題を捉えることができ、子どものニーズを捉えた指導が可能になると考えられる。」⁵⁴⁾と述べている。さらに、アレルギー対応について、「生活背景を含めたアセスメントをもとに、食事、生活面の幅広い視点で、子どもの生活のサポートがなされ、単職種では捉えきれない子どもの問題の本質についても、双方の力を持ち寄るなどの協力関係を築く必要性が示唆された。」⁵⁵⁾と連携の必要性を述べている。

しかし、笠島らが「栄養職員に対する認識が十分であるかと言うとそうとは言えない。」⁵⁶⁾と述べているように、同様の傾向は、本調査の養護教諭の、栄養教諭との連携についての自由記述にもみられた。本調査では、養護教諭は、栄養教諭の指導の効果を認識しているが、栄養教諭は所属校での指導だけではなく、受配校での巡回指導や給食管理という多忙な職務を抱えていることが理解されておらず、実際の職務、勤務状況、指導状況につい

ては認識が十分とは言えなかった。

養護教諭は、栄養教諭との連携において、「《互いの専門性の理解と尊重》をしつつ、自分の専門性を発揮することで、さらに連携が推進されていくと考えられる。」⁵⁵⁾ が、栄養教諭の実際について認識を深めることが、連携推進の上で必要であるとする。

本研究にご協力くださいました養護教諭，栄養教諭の先生方，面接調査に応じてくださいました先生方，そして，ご指導くださいました面澤和子教授をはじめ諸先生方に深く感謝申し上げます。

- 1) 文部科学省；食に関する指導の手引—第一次改訂版—，1-5，2010
- 2) 前掲 1)；6
- 3) 前掲 1)；5
- 4) 内閣府；食育推進基本計画，3，2006
- 5) 高橋美保他；小学校学習指導要領の改訂からみる食育推進の課題（1），白鷗大学論集，第 25 巻第 1 号，121，2011
- 6) 平本福子；食育の方向性～近年の動向と実践事例から～，第 52 回日本学校保健学講演集，66，2005
- 7) 前掲 6)；66
- 8) 前掲 6)；66-67
- 9) 前掲 6)；67
- 10) 前掲 1)；6
- 11) 前掲 1)；6-8
- 12) 前掲 1)；まえがき
- 13) 前掲 1)；まえがき
- 14) 前掲 1)；11
- 15) 前掲 1)；11
- 16) 青森県教育委員会；地場産物を活用した食育指導資料，青森県教育委員会，はじめに，2011
- 17) 文部科学省；小学校学習指導要領 平成 20 年 3 月告示，12，2008
- 18) 文部科学省；中学校学習指導要領 平成 20 年 3 月告示，16，2008
- 19) 文部科学省；小学校学習指導要領解説 総則編，東洋館出版社，25-26，2009
- 20) 前掲 17)；90

- 21) 文部科学省；中学校学習指導要領技術・家庭科編， 57， 東山書房， 2008
- 22) 前掲 17)；101
- 23) 文部科学省；中学校学習指導要領保健体育編， 168-170， 東山書房， 2008
- 24) 前掲 17)；113
- 25) 文部科学省；中学校学習指導要領特別活動編， 16， 東山書房， 2008
- 26) 前掲 1)；11
- 27) 文部科学省；栄養教諭制度について
http://www.mext.go.jp/a_menu/syotou/eiyou/index.htm 2011 年 2 月 9 日
- 28) 前掲 27)
- 29) 文部科学省；平成 17～23 年度の栄養教諭の配置状況（平成 23 年 4 月 1 日現在）
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm 2012 年 1 月 20 日
- 30) 青森県教育委員会；平成 17・18・19・20・21・22 年度「児童生徒の健康・体力」，
青森県教育委員会，2006－2011
- 31) 青森県教育委員会；調査・統計「学校一覧」
<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/chousa02.html> 2012 年 1 月 20 日
- 32) 青森県教育委員会；調査・統計「学校一覧」
<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/chousa02.html> 2011 年 2 月 10 日
- 33) 前掲 31)
- 34) 東京都養護教諭研究会；平成 20・21 年度調査研究報告，東京都養護教諭研究会，
26-27， 62-65， 74－77， 2010
- 35) 青森県教育委員会；学校における食育マニュアル， 3， 2007
- 36) 青森県；青森県食育推進基本計画「いただきます！あおもり食育県民運動」， 53， 2006
- 37) 前掲 4)；3
- 38) 前掲 36)；1
- 39) 前掲 30)
- 40) 東京都教育委員会；<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/soumu/tokyo83/page4.html/>
- 41) 内閣府；第 2 次食育推進基本計画， 15， 2011
- 42) 久保 薫他；青森県内初等教育機関における食育活動の実態調査，青森中央短期大学
研究紀要 Vo1.24， 14， 2011
- 43) 青森県教育庁スポーツ健康課；平成 21 年度食に関する指導の状況， 2010，
- 44) 青森県教育庁スポーツ健康課；平成 22 年度食に関する指導の状況， 2011
- 45) 前掲 42)；19
- 46) 楠本憲二他；山形県内の小学校における食に関する指導の実態育の推進，日本家政学
会誌， 59（7）， 57-64， 2008
- 47) 文部科学省；食育・栄養教諭に関してよくある質問 Q&A
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/06121505/001.pdf 2011 年 2 月 9 日

- 48) 鈴木洋子；小学校及び中学校における食育推進の課題の究明—養護教諭の食育への参加実態と意識からの検討—，奈良教育大学紀要 60（1）（人文・社会）107-112，2011
- 49) 前掲 46)；110
- 50) 前掲 1)；11
- 51) 前掲 46)；111
- 52) 埼玉県養護教員会；平成 19 年度研究紀要（第 28 集），43，2008
- 53) 笠島亜里沙他；食育における養護教諭と学校栄養職員の連携状況とその推進要因の検討，学校保健研究 48，521-533，2007
- 54) 前掲 53)；530
- 55) 前掲 53)；530
- 56) 前掲 53)；531

資 料

資料 1 : 食育及び食に関する指導の概要の年表

資料 2 : 中学校学習指導要領総則 (第 1 章第 1 の 3)

資料 3 : 養護教諭用調査用紙

資料 4 : 栄養教諭用調査用紙

資料 1：食育及び食に関する指導の概要の年表

平成 9 年 (1997 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・保健体育審議会「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興の在り方について」を答申。 「食に関する指導について」が明記され、食に関する指導が強調されるようになった⁵⁾。 ・「栄養教諭制度」の検討が始まる。
平成 12 年 (2000 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「食生活指針」を厚生省，農林水産省，文部省の 3 省合同で推進することが閣議決定される。
平成 14 年 (2002 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・3 省連携による食育推進連絡会議設置
平成 16 年 (2004 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「楽しく食べる子どもに一食からはじまるすこやかガイド」 厚生労働省従来の栄養指導～栄養教育，食教育，食育へとその範疇を広げ，食育の目標を QOL とし，食における働きかけを総合的・包括的にとらえようとする考え方に移行しつつある。また，健康教育の分野では，個人への働きかけとともに，人々が健康を実現しやすいように環境を整備することが必要であるとするヘルスプロモーションの考え方も示されている⁶⁾。 ・「食を通じた子どもの健全育成（一いわゆる「食育」の視点から一）のあり方検討会」 食育のねらいを「現在をいきいきと生き，かつ生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本としての食を営む力を育てるとともに，それを支援する環境づくりを進めること」，また，その目標を「楽しく食べる子どもに」とする⁷⁾。 ・「栄養教諭」を食に関する専門性と教育に関する資質を併せもつと提言する⁸⁾。
平成 17 年 (2005 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養教諭制度施行（4 月 1 日） ・「食育基本法」施行（7 月 15 日） これまでの文部科学省，厚生労働省，農林水産省がそれぞれ実施してきた食育推進政策を集大成して再編し，法的に体系化した⁹⁾。 「国民が生涯にわたって健全な心身を培い，豊かな人間性をはぐくむ」（第 1 条）ことを目的とする。子どもに対する食育を重視するとともに，子どもに対する食育の推進のために教育関係者の取組を強く期待している¹⁰⁾。
平成 18 年 (2006 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「食育推進基本計画」策定（3 月 31 日） 「食育基本法」に基づき策定される。（平成 18 年度から平成 22 年度までの 5 年間を対象とする。）食育の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るために必要な基本的事項を定める。毎年 6 月を「食育月間」，

平成 19 年 (2007 年)	<p>毎月 19 日を「食育の日」と定め、食育推進運動の継続的な展開と食育の一層の定着を図る¹¹⁾。子どもたちの健全な食生活の実現と豊かな人間形成を図るため、学校における食育を推進することを重要視している¹²⁾。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省「食に関する指導の手引き」発行（3 月） <p>学校における食育の必要性、食に関する指導の目標、栄養教諭が中心となって作成する食に関する指導の全体計画、各教科等や給食の時間における食に関する指導の基本的な考え方や指導法を取りまとめた¹³⁾。</p>
平成 20 年 (2008 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・中央教育審議会答申（1 月） <p>食育は「教科等を横断して改善すべき事項」として位置付けられる。学校における食育は、特定の教科等においてのみ行われるものではなく、様々な教科等を関連させつつ、学校の教育活動全体で推進するものであることを示唆する¹⁴⁾。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領改訂（3 月） <p>総則に「学校における食育の推進」が盛り込まれたほか、関連各教科等での食育に関する記述が充実する¹⁵⁾。食育の推進に当たっては、児童生徒の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことと規定する。</p>
平成 21 年 (2009 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省 食生活学習教材児童生徒用「食生活を考えよう」、食生活学習教材指導者用「食生活を考えよう」発行。 <p>食生活学習教材として小学校低学年用、中学年用、高学年用、中学生用がそれぞれ該当児童生徒に配布される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改正学校給食法施行（4 月） <p>第 1 条（法律の目的）で「学校における食育の推進」を位置付けるとともに、栄養教諭が学校給食を活用した食に関する指導を充実させることについても明記される。</p>
平成 22 年 (2010 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省「食に関する指導の手引」第 1 次改訂版発行（3 月） <p>新学習指導要領や改正学校給食法等を踏まえて改訂される。</p>
平成 23 年 (2011 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「第 2 次食育推進基本計画」策定（3 月） <p>（平成 23 年度からの 5 年間）</p>

資料 2 中学校学習指導要領総則 体育・健康に関する指導 (第 1 章第 1 の 3)

中学校学習指導要領総則 体育・健康に関する指導 (第 1 章第 1 の 3) ²¹⁾

3 学校における体育・健康に関する指導は、生徒の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、学校における食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、保健体育科の時間はもとより、技術・家庭科、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする。また、それらの指導を通して、家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。

終章 まとめ

県内小学校における食に関する指導の実態を把握し、養護教諭としての関わり方や栄養教諭との連携のあり方を探ること目的として、調査（養護教諭へのアンケート調査と栄養教諭へのアンケート調査、栄養教諭への面接調査や指導の参観）を行った。

調査からは主に以下のことが明らかになった。

- 1 青森県内の小学校の 90%近くは、「食に関する指導」全体計画を作成し、教科や特別時間をはじめとする各時間や様々な機会を通して指導が行われていた。

「食に関する指導」全体計画の中心作成者は、栄養教諭配置校では栄養教諭であるが、未配置校では養護教諭が多く、保健主事として作成した場合を含めると、養護教諭が中心的役割を果たしていると言える。

様々な学習活動における指導の担当者としては、学級担任や栄養教諭が多かったが、学習時間以外（PTA 活動、便り等の発行、個別指導等）では、栄養教諭と学校栄養職員よりも、養護教諭が担当した方が多いという結果であった。

- 2 青森県内の栄養教諭は、調査時（平成 22 年度）には小学校 18 名（国立 1 校を含む）、中学校 4 名の計 22 名が配置されていた。その職務は、食に関する指導と学校給食の管理であるが、給食配食担当校数の最多は 23 校、配食対象人数の最多は 8, 300 人の給食管理をしながら、食に関する指導にあたっていた。国立小学校 1 校を除く全員が共同調理場等との兼務であり、その給食受配校で巡回指導を行っていた。

- 3 栄養教諭または学校栄養職員の配置校では、未配置校と比較して、食に関する指導に「重点を置いている傾向」があり（ $p < 0.1$ ）、栄養教諭は、所属校で指導に当たることが受配校の場合より多く、関わり方としては、「主として関わる」が受配校より多かった。

- 4 養護教諭の食に関する指導への関心は高く、約 90%が「ある」、87.5%が「これまでに食に関する指導を行ったことがある」と答えていた。食に関する指導への関心とこれまでに食に関する指導を行ったことがあるかどうかの検定では、有為差があった（ $p < 0.05$ ）。平成 22 年度に関わった経緯としては「自分自身から」という回答が約 30%で最も多かったが、「学級担任からの依頼」、「管理職からの依頼」も多かった。

指導をしたかしなかったかに関わる要因としては、「児童数」、「学校が食に関する指導に重点をおいている」に有意差がみられ（ $p < 0.05$ ）、「（養護教諭が）保健学習を担当している」ではその傾向がみられた（ $p < 0.1$ ）。

15の保健指導内容の中から力を入れているもの3つを選択してもらい、1位から3位まで合わせたところ、「食に関すること」は合計53.8%で、1位の「歯・口に関すること」(78.8%)に次いで多かった。また「食に関すること」を選択した者は、食に関する指導への関心が高い傾向にある($P<0.1$)ことがわかった。

これまでに関わったことがある指導の機会としては、「学級活動の時間」、「便り等の発行」、「学校行事」、「個別指導」の順に多く、そのうち直接指導した機会としては「個別指導」、「便り等の発行」、「学級活動の時間」の順に多かった。

指導後の自己評価としては、児童への効果として「児童の関心理解や知識が深化したこと」が84.1%と最も多く、学校全体としては「関心を高め、教職員の理解を深めた」という回答が多かった。養護教諭としての「情報や機能を活用」した指導ができたと実感されていたことがうかがわれた。指導を行う上での課題としては、「指導法」、「関係機関との連絡調整」、「教材研究」があげられた。

5 養護教諭としてどのように関わっていくかを尋ねた自由記述には、「養護教諭の専門性を生かして」、「担任、栄養士や栄養教諭と連携して」、「コーディネーター、推進役、リーダーとして」関わっていきたいという積極的な意見が多かった。

6 現任校または給食センターに栄養教諭・職員が配置されている場合は、未配置校と比べて連携をしたことがある割合が有意に多かった($p<0.05$)。

連携のしかたについては、「情報交換や協議を行い、内容を充実させたい」、「連絡調整や、職員との間をつなぐ橋渡しの役割」、「お互いの専門性を生かして」、「協力、分担」、「積極的に連携」という積極的な意見が多かった。一方、栄養教諭も養護教諭との連携には肯定的であり、連携のしかたでは「健康面に関することや個別指導時、受配校での指導の際には特に連携が必要である」、「情報を共有したい」という意見が多く、養護教諭との連携により「相乗効果が期待できる」、「子どものためになる」と述べられていた。

食に関する指導には、時間の確保や指導体制作りの難しさ、取り扱う内容が広範囲であること、栄養教諭の配置が少ないことなどの課題があると考ええる。青森県の場合は栄養教諭が一挙に増員される見込みがないことにより、現在の教職員の体制で取り組んでいかなくてはならない。今回の調査では、養護教諭は全体計画立案から直接の指導まで深く関わっており、さらに充実したものとするために、栄養教諭をはじめとする他の教職員との連携を深め、食に関する指導へ積極的に関わっていこうとしている姿勢がうかがわれた。養護教諭の専門性を生かしながら、それぞれの学校状況と児童の実態に応じた関わりを摸索しているようであった。

「食に関する指導への養護教諭の関わり」についてのアンケート

栄養教諭 様

本調査では「食に関する指導」を、「一単位時間または、個別に行う指導の両方を含み、学校教育活動全体を通じて行われている指導」とします。また、先生ご自身が指導したとお考えになったことは、「指導した」とお答えください。

回答は、統計的に処理し、個々の情報については外部に知られることはありませんので、率直なご意見をお聞かせくださればと思います。

年度末でお忙しいところ恐れ入りますが、3月18日（金）頃までにご回答の上、添付の封筒でご返送くだされば幸いです。（期日を過ぎましても、ご返送くださるとありがたいです。）

お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

弘前大学大学院教育研究科養護教育専攻 横濱 克子

各問のあてはまる番号に○を、また（ ）内に必要な事項をご記入ください。

※「その他」の場合は、具体的に記入してください。

1 現在の所属と、ご自身のことについてお聞きします。

問1 所属先をお知らせください。

- ①小学校 ②中学校 ③特別支援学校

問2 兼務先はありますか。あてはまる箇所に○をつけ、小中学校の場合は学校数をご記入ください。

- ①ある（ 共同調理場 ・ 小学校… 校 ・ 中学校 校 ）
②ない

問3 主に仕事をしている所はどちらですか。（1日または1週間の勤務時間の多くを過ごす場所）

- ①所属先 ②兼務先 ③その他（具体的に ）

問4 対象となる学校数と人数についてご記入ください。

- ・対象となる学校数 （ ）校 ・対象となる人数 （ ）人

問5 年齢をお知らせください。

- ①20代 ②30代 ③40代 ④50代

問6 経験年数をお知らせください。

- ・学校栄養職員として ①1～10年 ②11～20年目 ③21年以上
・栄養教諭として ①1年目 ②2～4年目 ③5年目以上

問7 現任の所属先での勤務年数をお知らせください。

- ①1年目 ②2～4年目 ③5年目以上

2 所属校・受配校についてお聞きします。

問1 所属校は、平成17年度以降「食に関する指導」に関しての推進校・研究指定校の指定を受けたことがありますか？

- ①ある（平成 年度 名称 ）
 ②ない
 ③わからない

問2 所属校の食に関する指導の取組状況について、あてはまるものに○をつけてください。

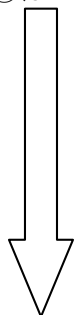
- ①非常に重点をおいている ②比較的重点をおいている ③あまり重点をおいていない ④取り組んでいない

問3 所属校および受配校で、今年度行われた食に関する指導の機会と関わり程度について、所属校受配校それぞれに対して、あてはまる欄に○を記入してください。（複数回答可）

指導の機会	所属校			受配校		
	今年度 行われ た指導 の機会	関わっている		今年度 行われ た指導 の機会	関わっている	
		主と して	資料 や情 報の 提供		主と して	資料 や情 報の 提供
①指導計画の作成						
②教科の時間での指導						
③道徳の時間での指導						
④総合的な学習の時間での指導						
⑤学級活動の時間での指導						
⑥給食時間での指導						
⑦学校行事（学校保健委員会等）						
⑧PTA活動（企画調整を含む）						
⑨たより等の発行						
⑩個別指導						
⑪その他 （具体的内容）						

問4 今年度、食に関する指導を行いましたか。

①はい



②いいえ



指導ができなかった理由としてお考えになることは何ですか。（複数回答可）

- ①時間がない ②機会がない ③兼務先が忙しい ④要請がない
 ⑤その他（具体的に）

→ 問6へお進みください

（裏面へお進みください）

(問4で、「①はい」と答えた方のみお答えください。)

問5 今年度指導した内容について具体的にご記入ください。

(※指導計画等、下の項目がわかる資料を添付していただければ記入は不要です。)

【例】

時間・教科	対象	所属校・ 受配校の 別	1学級 たりの 時間数	関わり かた	題材名・内容
学級活動	小3	①所・受	2	T T	「好き嫌い」
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			
		所・受			

(以下、皆様お答えください)

問6 所属校において、食に関する指導を行う場合の、条件整備の難しさとしてお考えになることは何ですか (複数回答可)

- ①時間の確保 ②職員との共通理解不足 ③校内の協力体制の不備 ④教材研究不足
⑤管理職の認識不足 ⑥その他 (具体的内容)

問7 受配校でも、所属校と同じような内容で指導をしていますか。

- ①ほぼ同じように指導している ②同じようにはしていない ③どちらともいえない
④その他（具体的に記入）

問8 所属校や受配校において、食に関する指導は円滑に行われていますか。

- ・所属校では ①非常によい ②大体よい ③あまりよくない ④よくない
・受配校では ①非常によい ②大体よい ③あまりよくない ④よくない

（問8で、「③あまりよくない」、「④よくない」と答えた方のみお答えください。）

その理由についてお知らせください。（自由記述）

3 ご自身についてお聞きします。

問1 学校栄養職員時代を含め、これまでに関わったことのある指導の機会と内容について○をつけてください。その中で、直接指導をしたものには、「◎」をつけください。（複数回答可）

【指導の機会】

- ①教科の時間での指導 ②学級活動の時間での指導 ③道徳の時間での指導
④総合的な学習の時間での指導 ⑤給食時間での指導 ⑥学校行事（学校保健委員会等）
⑦PTA活動 ⑧たより等の発行 ⑨個別指導 ⑩全体計画立案
⑪その他（具体的内容）

【指導の内容】（文部科学省「食に関する指導の手引き」の6つの目標から作成）

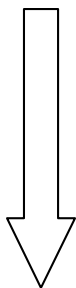
- ①食事の大切さ ②規則正しい食事・朝食をとる
③外食や中食，食環境(自販機やコンビニ等)との関わり ④よくかむ ⑤良い姿勢
⑥栄養のバランス・好き嫌い ⑦食品に含まれる栄養 ⑧給食に使われる食品
⑨食品や料理の名前や形 ⑩食品の品質や安全性への関心 ⑪食品の適切な選択
⑫食品や生産者等への感謝 ⑬残さず食べる・無駄なく調理する
⑭協力して準備後片付けをする ⑮食事のマナー ⑯環境や資源に配慮した食生活
⑰伝統料理，季節・行事料理 ⑱地域の農林水産物との関連 ⑲多様な食文化
⑳食品と他地域，諸外国との関わり ㉑諸外国の食事の様子 ㉒アレルギーの個別指導
㉓肥満の個別指導 ㉔痩身の個別指導 ㉕スポーツ栄養の個別指導 ㉖貧血の個別指導
㉗その他の個別指導 ㉘その他（具体的内容）

問2 指導した結果について、あてはまるものに○をつけてください。

①指導して良かったと思う

②良くも悪くもない

③良くなかったと思う



その理由をお知らせください。



→問3へお進みください。

児童にとって、栄養教諭として、また、学校全体として良かったと思われることは何ですか。

(複数回答可)

【児童】

- ①食に対する関心や知識理解が深まった
②健康生活の実践を積極的に行うようになった
③個々の健康課題をしっかりと捉えられるようになった
④その他(具体的内容)

【栄養教諭・
学校全体】

- ①栄養教諭のもつ情報や機能を生かした指導ができた
②児童の理解がいっそう進んだ
③指導を行う力量が高まった
④教職員の食に対する理解が進んだ
⑤担任や教科担当と共通認識がもてた
⑥学校全体の、食に対する関心が高まった
⑦家庭との連携が深まった
⑧その他(具体的内容)

問3 食に関する指導における満足度についてそれぞれ、あてはまる欄に○をつけてください

	1 十分満足している	2 やや満足している	3 あまり満足していない	4 満足していない
①指導回数	1	2	3	4
②指導内容	1	2	3	4
③所属学校の協力体制	1	2	3	4
④受配学校の協力体制	1	2	3	4
⑤兼務先の協力体制	1	2	3	4

問4 栄養教諭として、現代の子どもたちの食をめぐる課題とお考えになることは何ですか。(複数回答可)

- ①アレルギー ②肥満 ③痩身 ④貧血 ⑤朝食抜き・不規則な食生活
⑥孤食 ⑦食事にかかる時間 ⑧食環境(外食、自販機、コンビニ等) ⑨かまない
⑩食べる姿勢 ⑪好き嫌い ⑫食わず嫌い ⑬食事内容 ⑭食事の量 ⑮間食
⑯食品や料理の名や形についての知識 ⑰食品の品質や安全性についての情報への関心
⑱感謝の気持ち ⑲残食・食べ物を無駄にしない
⑳食事のマナー(箸の使い方、食器の並べ方、話題の選び方等)
㉑環境や資源に配慮した食生活 ㉒食文化
㉓その他(具体的内容)

問5 食に関する指導についての課題, 学校側の問題点等についてのお考えをお知らせください。
(自由記述)

4 養護教諭との連携についてお聞きします。

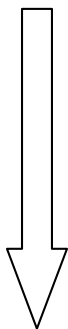
問1 養護教諭に要望したいことについて, あてはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

- ①校内の連絡調整 ②情報の共有 ③共同で研究 ④職員間の共通理解を図る
⑤個別指導の充実 ⑥事後指導
⑦その他 (具体的内容

)

問2 これまでに, 養護教諭と連携して, 食についての指導をしたことがありますか。

①ある



②ない



連携したことがない理由は何ですか。(複数回答可)

- ①養護教諭は, 中心になって推進する担当ではない
②連携する必要性がない
③一人で実施する方がよい
④その他 (具体的に記入

)

→問6へお進みください。

問3 養護教諭との連携のようすはいかがですか。

- ①十分に連携 ②連携できている ③あまり連携 ④ほとんど連携
できている できていない できていない できていない

(裏面へお進みください)

(問2で、「①ある」と答えた方のみお答えください。)

問4 これまでに養護教諭と連携した機会に○をつけてください。(複数回答可)

- ①教科、学級活動、道徳、「総合的な学習の時間」での指導 ②給食時間での指導
③学校行事（学校保健委員会等） ④P T A活動 ⑤たより等の発行 ⑥個別指導
⑦その他（具体的内容）

問5 これまでに養護教諭と連携した事例について、具体的にお知らせください。

[illegible]

問6 次の食に関する指導の内容について、適当と思う指導者に○をつけてください。（連携しての指導が適切と考える場合は、あてはまる指導者全てに○をつけてください。）（複数回答可）

指導の内容	指導者		
	栄養教諭担当が効果的	担任の担当が効果的	養護教諭担当が効果的
①食事の大切さ			
②規則正しい食事・朝食をとる			
③外食や中食，食環境(自販機やコンビニ等)との関わり			
④よくかむ			
⑤良い姿勢			
⑥栄養のバランス・好き嫌い			
⑦食品に含まれる栄養			
⑧給食に使われる食品			
⑨食品や料理の名前や形			
⑩食品の品質や安全性への関心			
⑪食品の適切な選択			
⑫食品や生産者等への感謝			
⑬残さず食べる・無駄なく調理する			
⑭協力して準備後片付けをする			
⑮食事のマナー			
⑯環境や資源に配慮した食生活			
⑰伝統料理，季節・行事料理			
⑱地域の農林水産物との関連			
⑲多様な食文化			
⑳食品と他地域，諸外国との関わり			
㉑諸外国の食事の様子			
㉒個別指導：アレルギー			
㉓個別指導：肥満・痩身			
㉔個別指導：貧血			
㉕個別指導：スポーツ栄養			
㉖個別指導：その他			
㉗その他			

問7 養護教諭との連携についてのお考えをお聞かせください。（自由記述）

最後までご協力ありがとうございました。

「食に関する指導への養護教諭の関わりについて」のアンケート

養護教諭 様

本調査では「食に関する指導」を、「一単位時間または、個別に行う指導の両方を含み、学校教育活動全体を通じて行われている指導」とします。また、先生ご自身が指導したとお考えになったことは、「指導した」とお答えください。

回答は、統計的に処理し、個々の情報については外部に知られることはありませんので、率直なご意見をお聞かせくださればと思います。年度末でお忙しいところ恐れ入りますが、3月18日(金)頃までにご回答の上、添付の封筒でご返送くだされば幸いです。(期日を過ぎましても、ご返送くださるとありがたいです。)お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

弘前大学大学院教育研究科養護教育専攻 横濱 克子

各問のあてはまる番号に○を、また () 内に必要な事項をご記入ください。

※「その他」の場合は、具体的に記入してください。

1 現在の勤務校と、ご自身のことについてお聞きします。

問1 職名をお知らせください。

①養護教諭 ②養護助教諭 ③その他 ()

問2 年齢をお知らせください。

①20代 ②30代 ③40代 ④50代

問3 所持免許について、番号および [] 内に○をつけ、その他の教科の場合はその教科名をご記入ください。

①養護教諭 [専修 ・ 1種 ・ 2種] ②看護師 ③保健師
④小学校 [1種 ・ 2種] ⑤養護学校・特別支援学校 [1種 ・ 2種]
⑥中学校 [1種 ・ 2種 (教科名 ア 保健 イ その他())]
⑦高等学校 [1種 ・ 2種 (教科名 ア 保健 イ その他())]
⑧栄養教諭 [1種 ・ 2種] ⑨その他 ()

問4 経験年数(講師経験を含む)をお知らせください。

①1年目 ②2～5年目 ③6～10年目 ④11～20年目 ⑤21～30年目
⑥31年以上

問5 現任校の勤務年数をお知らせください。

①1年目 ②2～5年目 ③6～10年目 ④10年以上

問6 保健主事を兼務しているかどうかをお知らせください。

①兼務している ②兼務していない

問7 保健学習を担当しているかどうかをお知らせください。

①担当している ②担当していない

問 8 児童生徒数をお知らせください。

- ①50 人未満 ②50～100 人未満 ③100～300 人未満 ④300～700 人未満
⑤700 人以上

問 9 養護教諭の配置状況についてお知らせください。

- ①単数配置 ②複数配置（養護教諭 2 名） ③複数配置（養護教諭と養護助教諭）
④その他（具体的に _____）

問 10 給食の実施状況についてお知らせください。

- ①完全給食（米飯の持参を含む） ②補食給食 ③ミルク給食 ④実施していない



給食の形態についてお知らせください。 ①自校給食 ②センター式給食

問 11 栄養教諭または学校栄養職員（栄養士）が配置されていますか。あてはまる番号に○をつけ、
在籍、または配置されている場合は[]内のあてはまる記号に○をつけてください。（複数回答も可）

- ①現任校に在籍している [ア 栄養教諭 イ 学校栄養職員]
②共同調理場（給食センター）に配置されている [ア 栄養教諭 イ 学校栄養職員]
③現任校にも共同調理場にも配置されていない
④その他（具体的に _____）
⑤わからない

2 現任校の食に関する指導についてお聞きます。

問 1 食に関する指導の全体指導計画はありますか。

- ①ある ②ない

問 2 食に関する指導の全体計画を、実際に中心となって作成したのはどなたですか。

保健主事兼務の場合は、どちらの立場で作成したかで回答してください。

- ①栄養 ②学校栄 ③保健 ④保健部 ⑤養護 ⑥その他
教諭 養職員 主事 所属の教諭 教諭 (_____)
↓ ↓ ↓ ↓ ↓

養護教諭はどの程度関わりましたか。

- ①保健部の一員として話し合った ②意見を求められたので答えた
③資料や情報の提供をした ④全く関わらなかった ⑤保健主事として関わった
⑥その他（具体的に _____）

（以下、皆様お答えください。）

問 3 現任校は平成 17 年度以降「食に関する指導」に関連する推進校・研究指定校の指定を受けたことがありますか。

- ①ある（平成 _____ 年度 名称 _____）
②ない
③わからない

問 4 現任校の食に関する指導の取り組み状況はいかがですか。

- ①非常に重点を ②比較的重点を ③あまり重点を ④取り組んで
おいている おいている おいていない いない

問5 今年度行われた指導の機会の番号に○をつけ、さらにその実施者にも○をつけてください。

指導の機会	実 施 者						(複数回答可)
	栄養 教諭	学校 栄養 職員	学級 (教科 担任	保健 主事	養護 教諭	その他(保 健師・地域 の人材等)	
① 教科の時間での指導							
② 道徳の時間での指導							
③ 総合的な学習の時間での指導							
④ 学級活動の時間での指導							
⑤ 給食時間での指導							
⑥ 学校行事(学校保健委員会等)							
⑦ P T A活動(試食会等)							
⑧ たより等の発行							
⑨ 個別指導							
⑩ その他 (具体的な内容)							

(上の①～⑤で、「養護教諭」の欄に○をつけられた方のみお答えください。)

指導をすることになったのはどうしてですか。(複数回答可)

- ①指導計画で決まっているから ②自分自身から ③学級担任からの依頼
 ④教科担任からの依頼 ⑤保健主事からの依頼 ⑥保健部で決定したから
 ⑦管理職からの依頼 ⑧栄養教諭・学校栄養職員からの依頼
 ⑨その他 (具体的に)

3 ご自身の「食に関する指導」についてのお考え等をお聞きます。

問1 保健指導の中で、力を入れているものを下の口の中から3つ選んで () の中に番号を記入してください。また、その中で力を入れている順を [] 内に数字で記入してください。

() () ()
 力を入れている順 [] [] []

- ①肥満・痩身 ②歯・口 ③視力 ④睡眠 ⑤運動 ⑥清潔 ⑦排泄 ⑧姿勢
 ⑨食に関すること(朝食・間食等) ⑩けが ⑪感染症(免疫・抵抗力) ⑫性に関すること
 ⑬喫煙・飲酒 ⑭薬物 ⑮こころの健康 ⑯その他 ((具体的な内容)

問2 ご自身の「食育」や、「食に関する指導」への関心はいかがですか。

- ①非常に関心がある ②関心がある ③あまり関心がない ④ほとんど関心がない

問3 現任校に限らずこれまでに資料や情報の提供を含めて、食に関する指導を行ったことがありますか

- ①ある ②ない



その理由は何ですか。(複数回答可)

- ①指導の時間がない ②指導する機会がない ③他職員の共通理解不足
 ④多忙 ⑤自信がない ⑥養護教諭が指導する必要はない
 ⑦保健室を空けられない ⑧実施したいと考えているが、現在検討中
 ⑨その他 (具体的な内容)

問4 これまでに関わったことのある指導の機会と内容について○をつけてください。その中で、直接指導をしたものには、「◎」をつけください。(複数回答可)

【指導の機会】

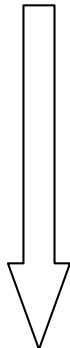
- ①教科の時間での指導 ②学級活動の時間での指導 ③道徳の時間での指導
④総合的な学習の時間での指導 ⑤給食時間での指導 ⑥学校行事（学校保健委員会等）
⑦PTA活動 ⑧たより等の発行 ⑨個別指導 ⑩全体計画立案
⑪その他（具体的内容

【指導の内容】

- ①食事の大切さ ②規則正しい食事・朝食をとる
③外食や中食，食環境(自販機やコンビニ等)との関わり ④よくかむ ⑤良い姿勢
⑥栄養のバランス・好き嫌い ⑦食品に含まれる栄養 ⑧給食に使われる食品
⑨食品や料理の名前や形 ⑩食品の品質や安全性への関心 ⑪食品の適切な選択
⑫食品や生産者等への感謝 ⑬残さず食べる・無駄なく調理する
⑭協力して準備後片付けをする ⑮食事のマナー ⑯環境や資源に配慮した食生活
⑰伝統料理，季節・行事料理 ⑱地域の農林水産物との関連 ⑲多様な食文化
⑳食品と他地域，諸外国との関わり ㉑諸外国の食事の様子 ㉒アレルギーの個別指導
㉓肥満の個別指導 ㉔痩身の個別指導 ㉕スポーツ栄養の個別指導 ㉖貧血の個別指導
㉗その他の個別指導 ㉘その他（具体的内容

問5 指導後のご自身の評価はいかがでしたか。

- ①指導をして良かったと思う ②良くも悪くもない ③良くなかったと思う



その理由をお知らせください。



児童にとって、また養護教諭として、学校全体として良かったと思われることは何ですか。

【児童】 ①食に対する関心や知識理解が深まった (複数回答可)

- ②健康生活の実践を積極的に行うようになった
③個々の食や健康に関する課題をしっかりと捉えられるようになった
④その他（具体的内容

【養護教諭・学校全体】 ①養護教諭のもつ情報や機能を生かした指導ができた

- ②児童への理解がいっそう進んだ
③指導を行う力量が高まった
④教職員の食に関する指導の理解が進んだ
⑤担任や教科担当との共通認識がもてた
⑥学校全体の食に対する関心が高まった
⑦家庭との連携が深まった
⑧その他（具体的内容

(以下、皆様お答えください)

問6 食に関する指導を推進する上で、難しいと思われることは何ですか。(複数回答可)

- ①指導時間の確保 ②必要性について職員間の共通理解不足 ③学校の課題の認識不足
④中心となって推進していく担当が不明確 ⑤教材研究が困難
⑥栄養教諭等専門性を持ち推進していく職員がいない ⑦特に難しいとは思っていない
⑧その他 (具体的内容)

問7 あなたが食に関する指導を行うとした場合、課題と思うことは何ですか。(複数回答可)

- ①指導内容の精選 ②指導法 ③教材研究 ④関係機関との連絡調整のしかた
⑤職員との共通理解のしかた ⑥その他 (具体的内容)

問8 次の食に関する指導の内容について、適当と思う指導者の欄に○をつけてください。(連携しての指導が適切と考える場合は、あてはまる指導者全てに○をつけてください。)(複数回答可)

指 導 の 内 容	指 導 者		
	養護教諭担当 が効果的	栄養教諭担当 が効果的	担任や他の専 門家等の担当 が効果的
①食事の大切さ			
②規則正しい食事・朝食をとる			
③外食や中食，食環境(自販機やコンビニ等)との関わり			
④よくかむ			
⑤良い姿勢			
⑥栄養のバランス・好き嫌い			
⑦食品に含まれる栄養			
⑧給食に使われる食品			
⑨食品や料理の名前や形			
⑩食品の品質や安全性への関心			
⑪食品の適切な選択			
⑫食品や生産者等への感謝			
⑬残さず食べる・無駄なく調理する			
⑭協力して準備後片付けをする			
⑮食事のマナー			
⑯環境や資源に配慮した食生活			
⑰伝統料理，季節・行事料理			
⑱地域の農林水産物との関連			
⑲多様な食文化			
⑳食品と他地域，諸外国との関わり			
㉑諸外国の食事の様子			
㉒個別指導：アレルギー			
㉓個別指導：肥満・痩身			
㉔個別指導：貧血			
㉕個別指導：スポーツ栄養			
㉖個別指導：その他(具体的内容)			
㉗その他(具体的内容)			

問9 食に関する指導について、養護教諭としてどのように関わっていけばよいと思われますか。
また、食に関する指導についてのお考えなどをお知らせください。(自由記述)

4 栄養教諭または学校栄養職員との連携についてお聞きします。

問1 これまでに、栄養教諭または学校栄養職員と連携したことがありますか。

- ①ある ②ない



連携したことがない理由は何ですか。(複数回答可)

- ①必要性を感じない ②栄養教諭・学校栄養職員がいない
③栄養教諭・学校栄養職員が多忙 ④その他(具体的内容)

→問3へお進みください。

問2 栄養教諭・学校栄養職員との連携のようすはいかがですか。

- ①十分に連携 ②連携できて ③あまり連携 ④ほとんど
できている いる できていない 連携できていない

問3 栄養教諭の配置が始まっていますが、これにより栄養教諭に期待することは何ですか。(複数回答可)

- ①指導回数を増やす ②全体指導計画の立案・参画 ③給食指導の充実
④個別指導の充実 ⑤アレルギーへの対応 ⑥教材研究の充実 ⑦情報交換の活発化
⑧職員の意識の向上 ⑨その他(具体的内容)

問4 栄養教諭とどのように連携していけばよいのか、また、栄養教諭制度について等のお考えをお知らせください。(自由記述)

最後までご協力ありがとうございました。